

ウエノ遺跡

—池田警察署庁舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1998

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター



(1) 調査区遠景（北より）



(2) 調査区南東部遺構検出状況（東より）

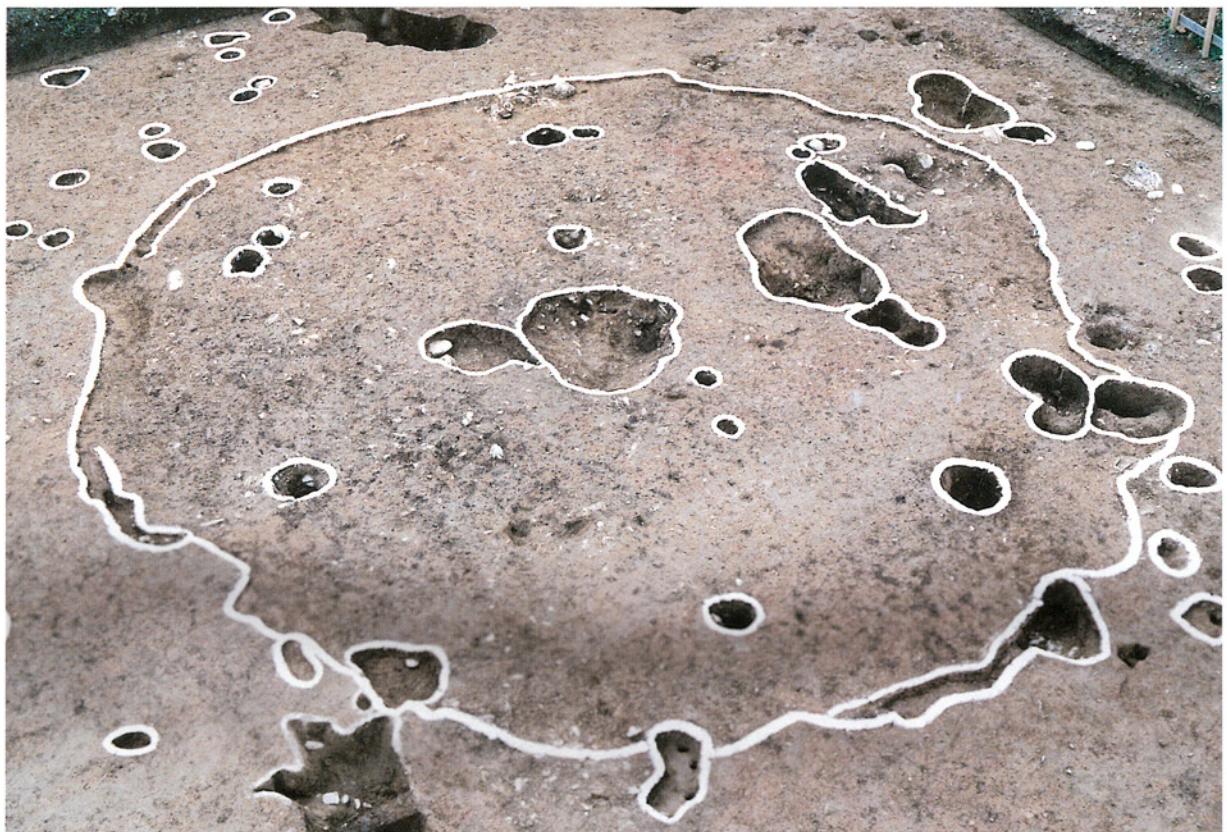
卷頭図版2



(1) SB1001完掘状況



(2) SB1002完掘状況



(1) SB1004完掘状況



(2) SB1006完掘状況

例　　言

1 本書は池田警察署庁舎新築事業に伴って、平成6年度・7年度に実施したウエノ遺跡（池田町ウエノ所在）の発掘調査実績報告書である。

2 発掘調査は徳島県警会計課より依頼を受けた徳島県教育委員会文化課（現文化財課）が試掘調査を行い、弥生時代の遺構・遺物の存在を確認したことから、平成6年度に文化課が、平成7年度には文化財課から委託を受けた徳島県埋蔵文化財センターが実施した。

3 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。

・発掘調査期間 平成5年5月27日～ 5月28日（試掘調査）

平成6年4月1日～平成7年3月31日（1次調査）

平成7年4月1日～ 6月30日（2次調査）

・報告書作成期間 平成7年4月1日～ 9月30日

平成8年4月1日～ 5月31日

平成9年2月1日～ 3月31日

4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

凡例

SB 竪穴住居跡 SD 溝 SG 棚列 SP 柱穴

SX 不明遺構

5 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』1989年度版によった。

6 第6図の地形図は建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「阿波池田」を使用した。

7 調査にあたっては、次の諸機関の御協力・御指導を得た。

徳島県警池田警察署

8 本書の執筆及び編集は石尾和仁が行い、遺物の写真撮影は福良毅が行った。

本文目次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経緯	3
2 調査の経過	5
3 調査日誌抄	5
II 遺跡の立地と環境	9
1 地理的環境	11
2 歴史的環境	11
III 調査成果	19
1 基本層序	21
2 遺構と遺物	21
(1) 弥生時代	21
(2) 室町時代	47
IV まとめ	53
V 考察	57
鋸歯文土器の分布と上野式土器	59

挿図目次

第1図 ウエノ遺跡位置図	3
第2図 グリッド配置図	5
第3図 遺構配置図	7
第4図 池田付近の中央構造線	12
第5図 池田段丘面の断層変位量の見積り	12
第6図 周辺の遺跡分布図	13
第7図 基本土層図(1)	22
第8図 基本土層図(2)	23
第9図 SB1001実測図	24
第10図 SB1001出土遺物実測図(1)	25
第11図 SB1001出土遺物実測図(2)	26
第12図 SB1002実測図	26
第13図 SB1002出土遺物実測図	27
第14図 SB1003実測図	28
第15図 SB1003出土遺物実測図	29
第16図 SB1004実測図	30
第17図 SB1004出土遺物実測図	31
第18図 SB1005実測図	32
第19図 SB1005出土遺物実測図	32
第20図 SB1006実測図	33
第21図 SB1006出土遺物実測図(1)	34
第22図 SB1006出土遺物実測図(2)	35
第23図 SB1007実測図	36
第24図 SB1007出土遺物実測図(1)	37
第25図 SB1007出土遺物実測図(2)	37
第26図 SB1008実測図	38
第27図 SB1008出土遺物実測図	38
第28図 SA1001実測図	39
第29図 SA1002実測図	39
第30図 SD1002土層断面実測図	40
第31図 SD1002出土遺物実測図	40
第32図 SP1007実測図	41
第33図 SP1007出土遺物実測図	41
第34図 SP1113実測図	41
第35図 SP1113出土遺物実測図	41
第36図 SP1141実測図	42
第37図 SP1141出土遺物実測図	42
第38図 SX1001実測図	43
第39図 SX1001出土遺物実測図	43
第40図 包含層出土遺物実測図(1)	44
第41図 包含層出土遺物実測図(2)	45
第42図 包含層出土遺物実測図(3)	46
第43図 包含層出土遺物実測図(4)	46
第44図 包含層出土遺物実測図(5)	46
第45図 SK1001実測図	47
第46図 SK1001出土遺物実測図	48
第47図 SK1018実測図	49
第48図 SK1018出土遺物実測図	49
第49図 SP1217実測図	50
第50図 SP1217出土遺物実測図	50
第51図 SP1218実測図	50
第52図 SP1218出土銅錢	50
第53図 SP1221実測図	50
第54図 SP1221出土銅錢	51
第55図 立善寺跡遺跡出土土師質鍋実測図	55
第56図 上野式土器実測図	59
第57図 ウエノ遺跡出土弥生土器	60
第58図 徳島県内出土の鋸歯文土器	61
第59図 特殊器台実測図	63
第60図 鋸歯文土器の類例(1)	64
第61図 鋸歯文土器の類例(2)	65
第62図 鋸歯文土器の類例(3)	66
第63図 鋸歯文土器の類例(4)	67
第64図 鋸歯文土器の類例(5)	68
第65図 鋸歯文土器の類例(6)	69
第66図 鋸歯文土器の類例(7)	70
第67図 鋸歯文土器出土遺跡分布図	71

図版目次

図版1 (1) 調査区遠望(北より)	99
(2) 調査前風景(南東より)	99
図版2 (1) 調査前風景(西より)	100
(2) 遺構検出状況(北西部) 南より	100
図版3 (1) 遺構検出状況(南東部) 東より	101
(2) 遺構完掘状況(南東部) 東より	101
図版4 (1) 遺構検出状況(東半部) 南より	102
(2) 遺構完掘状況(南半部) 東より	102
図版5 (1) 遺構検出状況(西端部) 南より	103
(2) SB1001完掘状況	103
図版6 (1) SB1002完掘状況	104
(2) SB1003完掘状況	104
図版7 (1) SB1004完掘状況	105
(2) SB1006完掘状況	105
図版8 (1) SB1007完掘状況	106
(2) SB1008完掘状況	106
図版9 (1) SB1005完掘状況	107
(2) SK1001完掘状況	107
図版10 (1) SB1007遺物出土状況	108
(2) SB1007遺物出土状況	108
図版11 (1) SB1001内土器溜まり	109
(2) SK1001遺物出土状況	109
図版12 (1) 調査区西端遺構検出状況	110
(2) SX1002完掘状況	110
図版13 (1) SP1113遺物出土状況	111
(2) SP1221銅錢出土状況	111

図版14	(1) 包含層遺物出土状況	112	図版17	出土遺物 (2)	115
	(2) 包含層遺物出土状況	112	図版18	出土遺物 (3)	116
図版15	(1) 包含層遺物出土状況	113	図版19	出土遺物 (4)	117
	(2) 包含層遺物出土状況	113	図版20	出土遺物 (5)	118
図版16	出土遺物 (1)	114	図版21	出土遺物 (6)	119

表 目 次

第1表	遺構一覧表 (堅穴住居)	76	第24表	SB1007出土遺物観察表 (2)	87
第2表	遺構一覧表 (溝)	76	第25表	SB1007出土遺物観察表 (3)	87
第3表	遺構一覧表 (土坑)	76	第26表	SB1008出土遺物観察表 (1)	87
第4表	遺構一覧表 (土坑)	77	第27表	SB1008出土遺物観察表 (2)	88
第5表	遺構一覧表 (土坑)	77	第28表	SD1002出土遺物観察表	88
第6表	遺構一覧表 (土坑)	78	第29表	SP1007出土遺物観察表	88
第7表	遺構一覧表 (土坑)	78	第30表	SP1113出土遺物観察表	88
第8表	遺構一覧表 (不明遺構)	78	第31表	SP1141出土遺物観察表	88
第9表	SB1001出土遺物観察表 (1)	79	第32表	SX1001出土遺物観察表	89
第10表	SB1001出土遺物観察表 (2)	80	第33表	包含層出土遺物観察表 (1)	89
第11表	SB1001出土遺物観察表 (3)	80	第34表	包含層出土遺物観察表 (2)	90
第12表	SB1002出土遺物観察表 (1)	81	第35表	包含層出土遺物観察表 (3)	91
第13表	SB1002出土遺物観察表 (2)	82	第36表	包含層出土遺物観察表 (4)	92
第14表	SB1002出土遺物観察表 (3)	83	第37表	包含層出土遺物観察表 (5)	93
第15表	SB1003出土遺物観察表	83	第38表	包含層出土遺物観察表 (6)	93
第16表	SB1004出土遺物観察表	84	第39表	SX1002出土遺物観察表 (1)	93
第17表	SB1005出土遺物観察表 (1)	84	第40表	SX1002出土遺物観察表 (2)	94
第18表	SB1005出土遺物観察表 (2)	85	第41表	SK1018出土遺物観察表	95
第19表	SB1006出土遺物観察表 (1)	85	第42表	SP1217出土遺物観察表	95
第20表	SB1006出土遺物観察表 (2)	86	第43表	SP1218出土遺物観察表	95
第21表	SB1006出土遺物観察表 (3)	86	第44表	SP1221出土遺物観察表	95
第22表	SB1006出土遺物観察表 (4)	86	第45表	SP1221出土遺物観察表	96
第23表	SB1007出土遺物観察表 (1)	86			

写 真 目 次

写真 1	調査風景	6
写真 2	小学生体験発掘風景	6
写真 3	現地説明会風景	6

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

ウエノ遺跡の所在する池田町上野台地は、大正時代の旧制池田中学校（現徳島県立池田高校）建設に際して縄文土器・弥生土器が出土しており、旧来より遺物包蔵地として知られていた。その池田高校に隣接する徳島県警池田警察署の庁舎建て替え事業に際しても遺跡の広がりが想定されたため、県教育委員会文化課（現文化財課）は、徳島県警と協議を進め、平成5年度に試掘調査を実施した。試掘調査で弥生土器片等の出土を確認したことから、本調査の必要性を要請し、平成6年度に文化課が本庁舎部分4000m²の調査を、翌平成7年度に駐車場部分となる400m²を文化財課から委託を受けた（財）徳島県埋蔵文化財センターがそれぞれ調査を実施した。



第1図 ウエノ遺跡位置図

調査組織及び調査体制は以下の通りである。

平成 6 年度（県教育委員会文化課）

総括	文 化 課 長	浅香 寿穂
	課 長 補 佐	中田 良雄（当時）
	庶 務 係 長	多田 祐（当時）
	事 務 主 任	松本 良男 志田 美穂（当時）
	埋蔵文化財第三係長	松永 住美
調査体制	調 査 主 任	近藤 理（文化財課社会教育主事・当時）
		相原 聰（同・当時）
	調 査 員	上田 淑子（当時） 内輪 敏幸（当時）
		井本 尚子（当時） 宗石 満弘（当時）

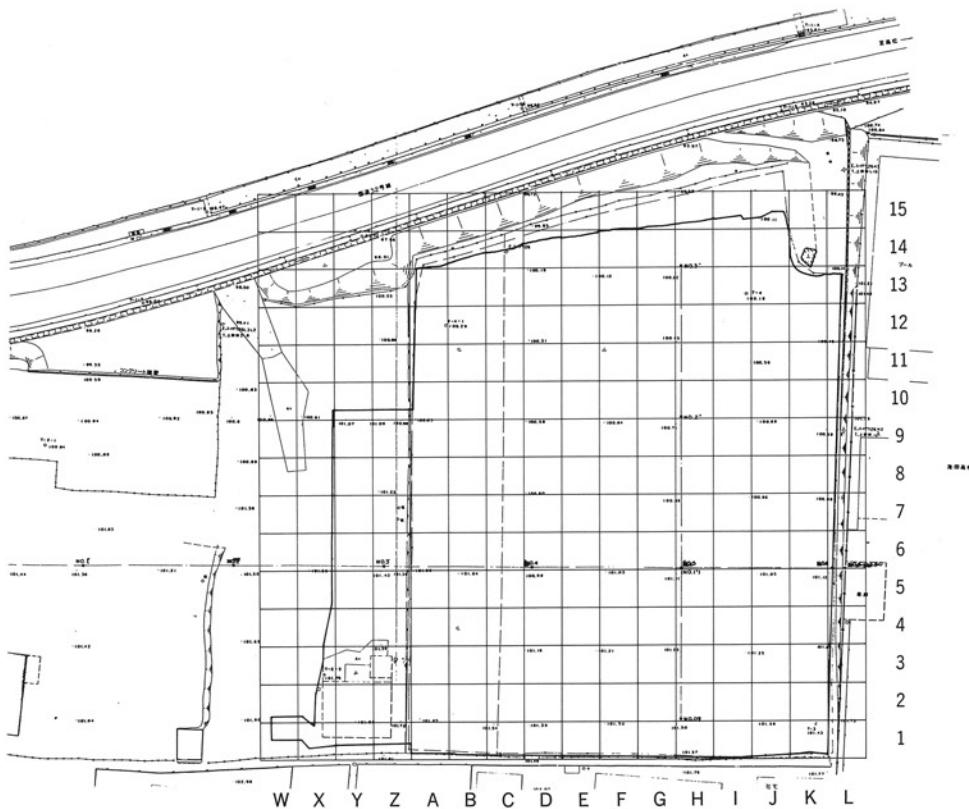
平成 7 年度（徳島県埋蔵文化財センター）

総括	所 長	筒井 豊祐
	事 務 局 長	柴田 広（当時）
	総 務 課 長	小林 敬治（当時）
	主 事	三木 和文（当時） 西木 未香
	研 究 補 助 員	扶川 道代（当時）
	臨 時 補 助 員	岸 章代 片岡 友恵（当時） 藤澤 美香（当時） 安江さおり（当時）
	調査第二課長	島巡 賢二
	調査第二係長	逢坂 俊男（当時）
調査体制	研 究 員	近藤 理（当時） 横田 温生
	調 査 補 助 員	岩見 光子（当時） 宗石 満弘（当時）
整理業務	（平成 7 年度）	
	研 究 員	相原 聰（当時）
整理・報告書作成業務	（平成 8 年度）	
	研 究 員	石尾 和仁 福良 肇

2 調査の経過

調査を開始するに当たり、平成6年度の調査対象地が庁舎建設予定地の4000m²という広い面積のため、調査の便宜上、東西・南北の両基線を基準に小区画割を行った。そして5m×5mを1グリッドとして南西隅より西から東にかけてA B C D E……、南から北にかけて1 2 3 4 5……の順に記号・番号を振った。また、調査自体も北東・南東・南西・北西の4つの大きなブロックに分け、順次調査を展開する形をとった。

平成7年度は、平成6年度調査地の西側にあたるため、東西方向のグリッド記号は変則的ではあるが、WX Y Zの順で付した（第2図参照）。



第2図 グリッド配置図

3 調査日誌抄

〈1次調査〉

1994年

4月12日 現況確認。

5月10日 資材搬入。

11日 除草作業、レベル移動。

12日 5mメッシュの杭打設。

- 16日 包含層人力掘削開始。
- 6月14日 遺構検出作業開始、包含層掘り下げ継続。
- 8月 東祖谷村立落合小学校体験発掘。
- 1995年
- 2月25日 現地説明会。
- 3月6日 下層確認トレンチ掘り下げ開始。
- 22日 埋め戻し作業開始。
- 28日 資材撤収。

〈2次調査〉

- 4月11日 現況確認。
- 12日 重機による整地。
- 14日 調査区測量。
- 15日 5mメッシュ杭打設。
- 17日 機械掘削開始。
- 20日 包含層人力掘削開始。
- 5月9日 遺構検出作業開始。
- 16日 遺構平面図作成開始。
- 22日 遺構掘り下げ開始。
- 24日 遺構断面図作成開始。
- 6月20日 完掘状況写真撮影。下層確認トレンチ掘り下げ。
- 26日 埋め戻し。
- 30日 資材撤収。



写真1 調査風景



写真3 現地説明会風景



写真2 小学生体験発掘風景



第3図 遺構配置図

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

県の北西端、吉野川の北流から東流への屈曲部に位置する池田町は、北は猪ノ鼻峠を越えて讃岐へ、西は佐馬地の谷を通って伊予へ、南は大歩危峡谷を経て土佐へ、東は徳島へそれぞれ通ずる四国の十字路という交通の要衝でもある。

当町は古来吉野川の河岸段丘上の渓口集落として発達してきており、吉野川の他、その支流である馬路川や松尾川・鮎苦谷川が町域を流れる。

ウエノ遺跡の位置する池田町ウエノは、吉野川の河岸段丘である上野台地（上野ヶ丘）上にあたり（高位段丘面）、南側のマチ地区（低位段丘面）との比高差は約20m近くもある。

また、中央構造線が町内を通過しており、町内各地で中央構造線が露頭している。

吉野川をはさんで、その北岸の阿讚山脈は中生代末期に浅海で堆積した堆積岩で構成される和泉層群、南岸に連なる四国山地では三波川結晶片岩が見られ、古生代末あるいは中生代に地中深くで形成された変成岩群である。この両層の境界をなすのが中央構造線である⁽¹⁾。

第4図は岡田篤正氏によって示された中央構造線の位置図である。F→←Fをつないだラインを中央構造線が通過していると考えられており、まさに低位段丘面と高位段丘面の境にあたる。この両段丘面の比高差が先述の通り約20mである。田上浩二氏による調査によても高位段丘面につらなる丸山から和泉層群の砂岩が、一方その南の新山からは結晶片岩がそれぞれ確認されている⁽²⁾。

なお、中央構造線がより南側、すなわち池田町の市街地と南側の山地との境界を通過すると考えられている須鎗和巳氏・阿子島功氏も、この高位段丘面と低位段丘面の境界にも副断層が走っていると解釈されており⁽³⁾、いずれにしてもこのウエノ遺跡の所在する高位段丘面の南崖に断層が走っているとする理解は共通するものである。

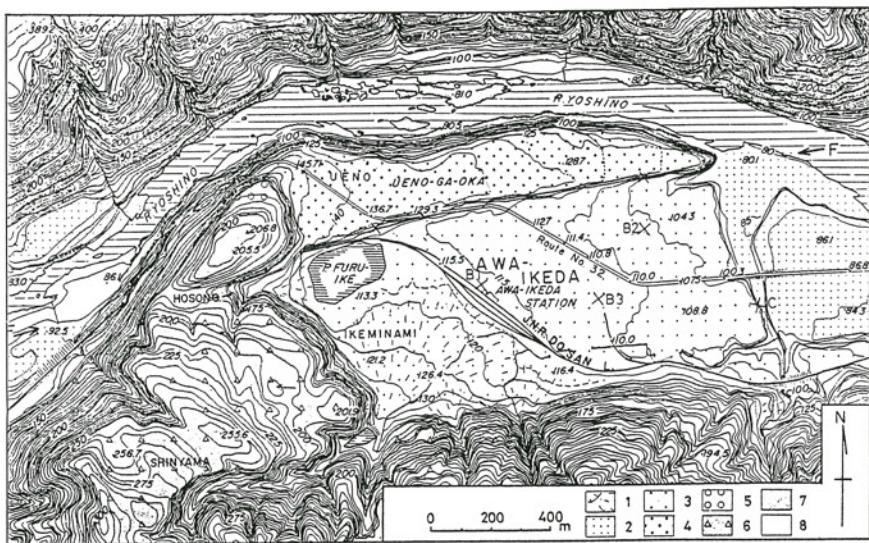
第5図は段丘上の断層変位量を示したものである。この高位段丘面と低位段丘面の境界を境として、水平方向への移動が顕著であることが示されている。すなわち、垂直変位量が50mであるのに対して水平変位量が200m以上あり、横ずれ断層であることを示している。

2 歴史的環境

吉野川流域の段丘上で先土器時代のナイフ型石器の発見例として報告されているのは20余例にのぼる。このうち三好郡内では先土器時代の遺跡として、三好町の土取遺跡⁽⁴⁾、三加茂町の丹田遺跡⁽⁵⁾、三野町の東上野遺跡⁽⁶⁾などが知られている。

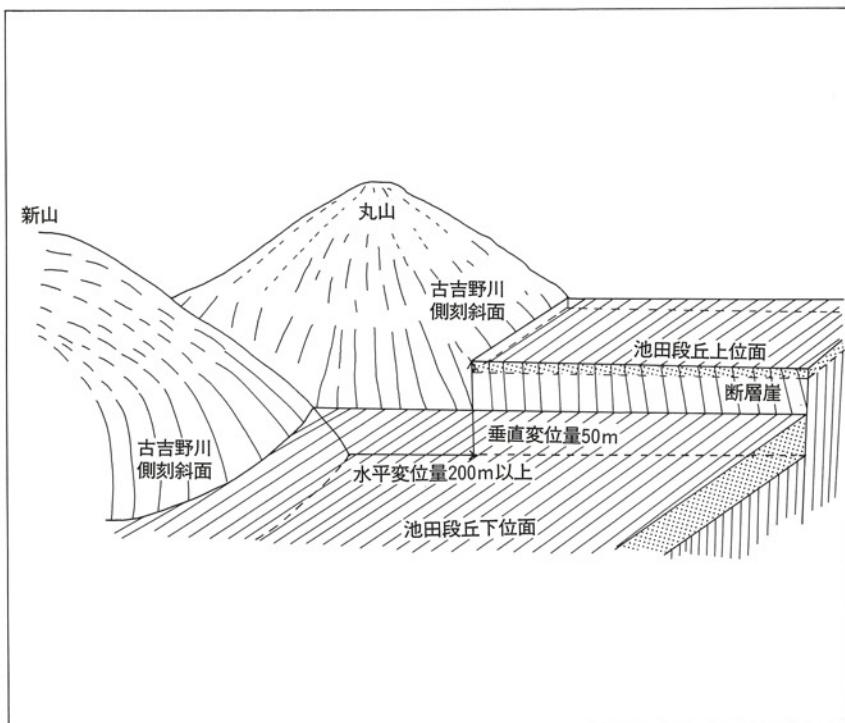
縄文時代の遺跡としては、三加茂町の加茂谷川岩陰遺跡群の他、ウエノ遺跡に隣接する池田高校の敷地から大正10（1921）年～翌11（1922）年にかけて旧制池田中学校が建設された際に縄文時代後期中葉にあたる津雲A式の土器が出土している⁽⁷⁾。その他、吉野川北岸農業用水路建設に際して調査された昼間遺跡や大柿遺跡でも縄文土器が出土している⁽⁸⁾。なお、大柿遺跡は四国縦貫自動車道建設に際しての調査でも縄文時代中期末から晩期にかけての遺構が検出されている⁽⁹⁾。また三加茂町の稻持遺跡は縄文時代の集落遺跡として重要な成果を残している⁽¹⁰⁾。

弥生時代の遺跡には先述の旧制池田中学校建設に際して弥生時代後期の甕・壺が出土したほか、吉野川北岸農業用水路建設とともに発見された東州津遺跡からも方形周溝墓や竪穴住居などの遺構が検出され、遺物も甕等が出土している⁽¹¹⁾。東州津遺跡は吉野川との比高差がわずかしかない低湿地にあり、

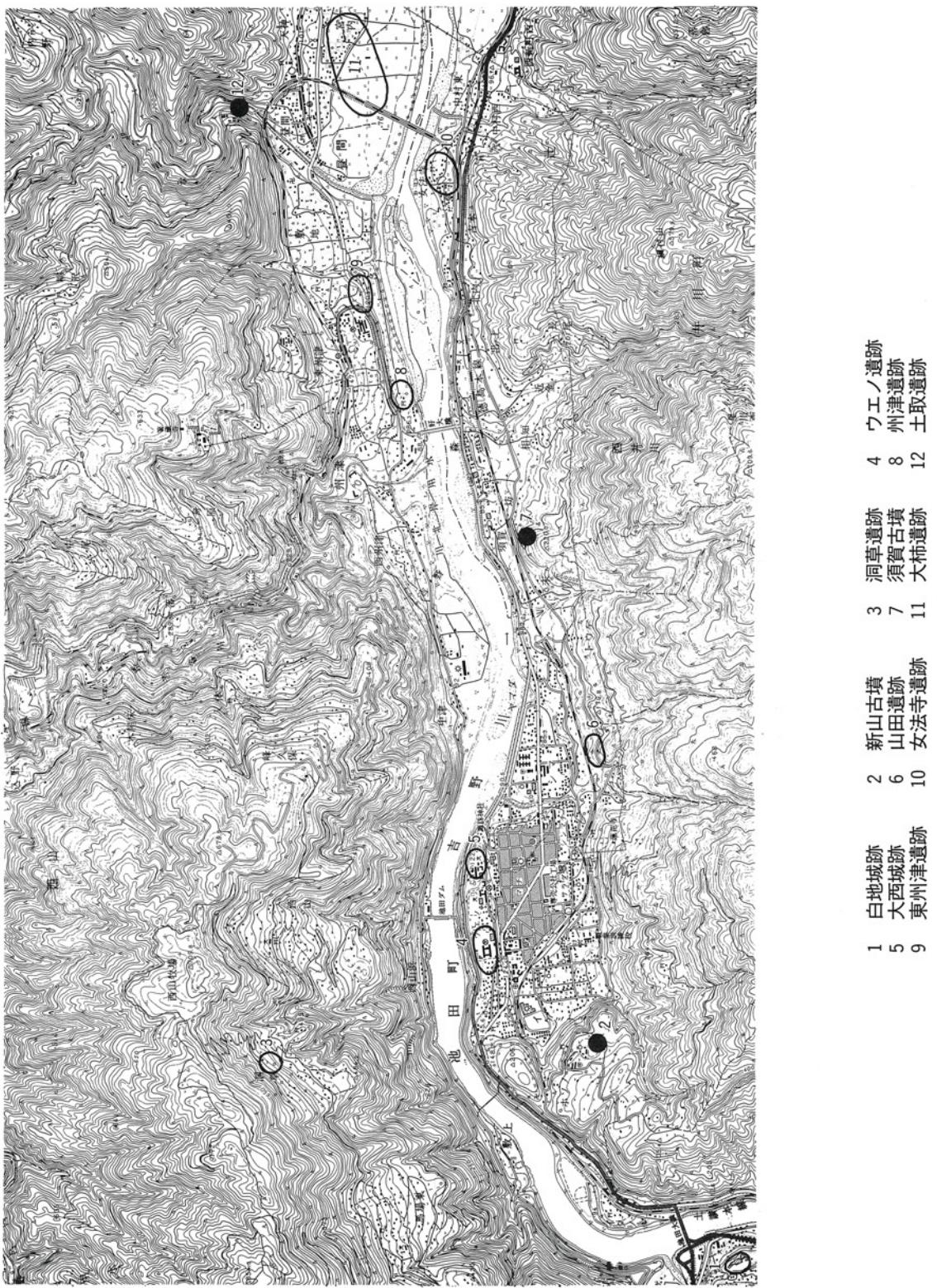


凡例 1 沖積扇状地 2 最低位段丘 3 池田低位段丘
 4 池田高位段丘 5 中～低位段丘 6 和泉層群由来の地すべり堆積物
 7 三波川系

第4図 池田付近の中央構造線
 (岡田(1980)より引用)



第5図 池田段丘面の断層変位量の見積り
 (岡田(1968)より引用)



第6図 周辺の遺跡分布図

ウエノ遺跡と好対照をなすものであるが、稻作に伴う水利からこの地にも集落が営まれたものと考えられている。その他、黒川原谷川の堆積作用によって形成されたゆるやかな傾斜をもつ台地上に位置する足代遺跡（小原地区）からも弥生時代から平安期にかけての遺構・遺物が検出されている⁽¹²⁾のをはじめとして、昼間遺跡（荒神前地区）や足代遺跡（円通寺地区）からも弥生時代の住居址が検出されている⁽¹³⁾。さらに昼間遺跡（西貝川地区）や池田町の州津遺跡でも弥生土器の出土が見られるなど⁽¹⁴⁾、吉野川北岸農業用水路建設に際する調査でも一定の成果があげられていたが、近年の四国縦貫自動車道建設に際する調査は特筆されるべき成果を残している。その多くの遺跡で今後整理作業が本格化するため概要のみの記述になるが、次のような成果が公けにされている。

三好町昼間の大柿遺跡は吉野川北岸の微高地上に立地しており、弥生時代中期の棚田が検出されたことで注目を集めた⁽¹⁵⁾。また、三野町勢力の大谷尻（館山）遺跡は比高差約50mの丘陵上で検出された環濠を伴う弥生時代後期初頭の高地性集落である。検出された竪穴住居は直径4～5mの小型のものばかりである。また穀物の貯蔵遺構や石包丁・磨石なども見られたことから防衛的機能も兼ね備えた日常の農業生産集落と捉えられている⁽¹⁶⁾。

大谷尻遺跡の西に位置する丸山遺跡は弥生時代中期の区画溝を伴う集落遺跡であり、25棟ほどの住居址が検出されている⁽¹⁷⁾。その他、弥生時代後期の集落遺跡で、円形から方形に住居の形態が変化していく状況の認められた井川町西井川の井出上遺跡⁽¹⁸⁾、隣接する積石墓群である足代東原遺跡との関連が注目される弥生時代後期の集落遺跡である西原遺跡⁽¹⁹⁾などが、四国縦貫自動車道建設に際して調査された三好郡内の弥生時代の遺跡である。

古墳時代になると、先の大柿遺跡で県下でも最大級の集落が営まれていたことが知られる。古墳時代後期に当該地域の微高地上に180棟近い竪穴住居が検出された他、鍛冶工房や灌漑用水路、多数の土壙群が検出されている⁽²⁰⁾。なお、古墳としては、池田町内では新山古墳と島古墳の2例が町内で確認されているのみで、この時期のウエノ遺跡周辺の地域的特色を考えるには資料的に乏しい現状にある。

律令体制下になると、池田町域を含む三郷郷は当初美馬郡に属していたが、貞觀2（860）年3月に三津郷・三野郷とともに美馬郡より分かれて三好郡となった。また、現三加茂町中庄あたりに郡衙が置かれたと考えられる。この地は白鳳期の瓦の出土で知られる中庄廃寺の所在地でもあることがその根拠の1つとなっている⁽²¹⁾。なお、『文徳天皇実録』によれば、承和13（846）年に阿波介に任じられた山田古嗣は、「公卿大臣以顧間に備え、文士を推薦し、多く納用を見る」といわれる文筆能力に優れた人物であったが、吉野川中流域の阿波郡・美馬郡地方が干害に苦しめられていることを憂慮して、当地方の各地に灌漑用の池を掘ったことが記されている。「阿波、美馬両郡、常に旱災に罹る、古嗣殊に方略を巡らし、陂を築き水を蓄えね其の灌漑を頼む」とある通りである⁽²²⁾。なお、古嗣のような人物は「儒教の文化的・思想的・技術的遺産を体得しており、在地の呪術的・未開的な「忌崇」を恐れない意識と能力（「儒骨」）をもった特殊な階層」であり、「たんに亡びゆく律令制的復古主義者としてではなく、一面では、日本中世社会とその文化の形成に特定の開明的な役割を果たしたものとして意義づける」ことが必要であると評価されている⁽²³⁾。当該期の発掘成果としては、井川町西井川の相知遺跡で掘立柱建物が5棟検出され、あわせて石帯も出土している⁽²⁴⁾。

さらに平安時代も後半になると、律令制の弛緩とともに寄進地系荘園の広汎な成立を見るが、池田町内でも西園寺家領田井莊が14世紀初頭にはすでに立莊化されていたことが確認できる。応長元（1311）後6月3日の高階恒基奉書（雲辺寺文書）に「阿波国田井庄野路内荒野事、四至堺任先規、右荒野者、

雲辺寺別当權律師任申請之旨、永代禁断殺生所寄進當伽藍也」と見えるのがそれである⁽²⁵⁾。この田井荘は現在の西祖谷山村西部・山城町・池田町にまたがると考えられている広大なものであり、関東申次家であった西園寺家にとって山城国鳥羽荘・伊予国宇和荘などと並ぶ重要な所領であった。

ところが、鎌倉幕府滅亡後は西園寺家もこの地を失い、南朝勢力下におかれることとなった。正平4(1349)年12月21日という南朝年号をもつ左衛門尉康宗奉書によれば「阿波国田井庄御年貢内三十石」を毎年野川太郎兵衛尉に与える旨が記されており⁽²⁶⁾、南朝勢力の及ぶところとなったことが確かめられる。また、正平20(1365)年正月5日の阿波守宛の某袖判氏行奉書にも「田井庄中西郷之内得善名、先度任御教書、可令知行旨、依仰執達如件」とあり⁽²⁷⁾、このことが確認できる。さらに同文書には栗野三位中将のものと考えられる花押が据えられており、三位中将が阿波守為仲に得善名の知行を認めたものと思われる。

こうした平安時代末期から南北朝時代、いわゆる中世前期にあたる時期の発掘調査成果としては、大柿遺跡の地鎮祭祀の事例が注目される。当地は11~13世紀には集落や水田が営まれていたことが確認されるが、その集落の中心部と推定されるところから、柱を抜いた後の柱穴に白磁四磁壺・瓦質四磁壺・土師質土器の杯や皿が埋納されており、祭祀形態を探るのに重要な情報を提供している⁽²⁸⁾。また、三好町昼間の土井遺跡では讃岐の西村系須恵器碗が出土したほか、煙管状土器焼成窯や灰原などの生産遺構も検出された⁽²⁹⁾。さらに三野町加茂野宮遺跡では稻藁を敷き畳をまいて菊花楓双鳥文鏡を埋納するという祭祀儀礼の痕跡を示す土壙の検出や銅印・硯・青磁・白磁が多数出土しており、一般的な村落景観とは異なる歴史像が今後提示されそうな調査成果を残している⁽³⁰⁾。

ところで、池田城は鎌倉時代後期から守護小笠原氏が居館を構えたところと考えられているが、この小笠原氏と姻戚関係等を結びつつ莊官として田井荘を支配していたのが大西氏である。鎌倉幕府滅亡後、阿波に入部した守護細川氏と対峙した守護小笠原氏・大西氏も康永2(1343)年には細川氏に降ることになる。そして、小笠原氏が三好氏と改姓して勝瑞に移った後は、大西氏が池田城に拠ったと考えられる。

大西氏は、細川氏にかわり力を蓄えた三好氏の被官として畿内で活躍したほか、吉野川上流域において強力な在地支配を展開したものと思われる。「故城記」に大西家の家紋である鳳凰と雁を使用したものが7家認められるが⁽³¹⁾、これらは大西家の一族と考えられるものである。

16世紀も後半になると、畿内に勢力を伸ばした三好氏も義賢・長慶の死去、家督を嗣いだ長治が重臣篠原長房を上桜城に攻め滅ぼすなど、その権力を弱化させたが、この時期に土佐の長宗我部氏の侵攻をうけることになる。そして、白地に居城を移していた大西覚用もその防戦に努めたが、長宗我部氏の軍勢の前に落城する。

なお、中世後半の遺跡としては、室町時代半ばに大規模な堀と土塁を修築する三好町足代字小山の円通寺遺跡(小山地区)の調査成果が重要である⁽³²⁾。この遺跡で確認された館は鎌倉時代にはすでに存在していたようであるが、15世紀後半に堀と土塁を伴う強固な城館に変貌を遂げている。遺跡の南が美濃田の淵で、吉野川が極めて狭くなるところであり、河川水運を掌握するには最適の位置にあることから、このことも目的に当地に館が占地されたとも考えられている。

その他、三好町足代の東原遺跡では周溝に囲まれた屋敷地を伴う集落址が検出され⁽³³⁾、三野町太刀野の花園遺跡では掘立柱建物や火葬墓・炭窯などを検出している⁽³⁴⁾。また、吉野川北岸農業用水路建設に伴う調査では、昼間遺跡の京伝地区や正力地区で中世遺物の出土が知られる。ここからは黒色土器碗や

瓦器椀・瓦質土器などが出土している⁽³⁵⁾。

秀吉の四国征伐によって長宗我部氏が土佐に退いて後は、蜂須賀氏の入部によって阿波にも近世幕藩体制の基礎が整えられることになったが、池田には「阿波九城」の1つである池田城に牛田掃部尉一長が入城し郡奉行として地域支配を展開した。そして、寛永15（1638）年には一国一城令によって「阿波九城」もそれぞれ廃城となり、池田には陣屋が置かれることになる。この陣屋は上野台地の下の宗安に所在していた。

(注)

- (1) 中央構造線に関する先行研究については膨大なものがあるが、岡田篤正「徳島県と周辺の中央構造線に関する文献」『徳島県立博物館準備調査報告』2号（1988）に文献目録が付されている。
- (2) 田上浩二「阿波池田付近の中央構造線」『地域研究』4集 鳴門教育大学地理学研究室 1988
- (3) 須鎌和巳・阿子島功「四国島の中央構造線の諸問題（その3）—吉野川流域のネオテクニクスの再検討—」『徳島大学教養部紀要（自然科学）』11巻 1978
- (4) 森浩一編『土取遺跡』徳島県教育委員会・三好町教育委員会 1973
- (5) 森浩一・伊藤勇輔『徳島県三好郡三加茂町丹田古墳調査報告』同志社大学 1970
- (6) 『池田町史 上巻』池田町 1983
- (7) 岡本健児「弥生土器—四国5—」『考古学ジャーナル』93号 1974、『池田町史 上巻』池田町 1983
- (8) 「昼間遺跡（天神前地区）」「昼間遺跡（正力地区）」『徳島県文化財調査概報 昭和52年度』徳島県教育委員会 1979、『埋蔵文化財速報展 繩文の彩り』徳島県埋蔵文化財センター 1996
- (9) 『四国縦貫自動車道建設に伴う大柿遺跡発掘調査現地説明会資料』徳島県埋蔵文化財センター 1998
- (10) 湯浅利彦「阿波の縄文人」『鳴門史学』7集 1993、同「縄文人の足跡を探る—徳島県域の縄文時代研究の現状と課題—」『高校地歴』34号 徳島県高校地歴学会 1998
- (11) 『池田町東州津遺跡発掘調査現地説明会資料』徳島県教育委員会 1980
- (12) 「足代遺跡 小原地区発掘調査」『徳島県文化財調査概報 昭和54年度』 徳島県教育委員会 1981
- (13) 「昼間遺跡 荒神前地区」『徳島県文化財調査概報 1976年度』徳島県教育委員会 1978、「足代遺跡（円通寺地区）」『徳島県文化財調査概報 昭和53年度』徳島県教育委員会 1980
- (14) 「昼間遺跡（西貝川地区）」『徳島県文化財調査概報 昭和52年度』徳島県教育委員会 1979、『吉野川北岸水利事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 I 州津遺跡発掘調査概要』徳島県教育委員会 発行年不掲載
- (15) 『四国縦貫自動車道建設に伴う大柿遺跡発掘調査現地説明会資料』徳島県埋蔵文化財センター 1998
- (16) 原芳伸「大谷尻（館山）遺跡」『徳島県埋蔵文化財センターニュース』7号 1996、同「徳島県三好郡三野町大谷尻（館山）遺跡」『日本考古学年報48（1995年度版）』日本考古学協会 1997
- (17) 「丸山遺跡」『埋蔵文化財速報展 繩文の彩り』徳島県埋蔵文化財センター 1996、『四国縦貫自動車道建設に伴う丸山遺跡発掘調査現地説明会資料』徳島県埋蔵文化財センター 1996
- (18) 『四国縦貫自動車道建設に伴う井出上遺跡発掘調査現地説明会資料』徳島県埋蔵文化財センター 1996、藤川智之「井出上遺跡」『徳島県埋蔵文化財センターニュース』8号 1997
- (19) 『四国縦貫自動車道建設に伴う西原遺跡発掘調査現地説明会資料』徳島県埋蔵文化財センター 1997、谷恒二・大橋育順「西原遺跡」『徳島県埋蔵文化財センターニュース』8号 1997
- (20) 前掲注(15) 現地説明会資料

- (21) 『阿波の古代寺院』徳島県博物館 1974、『歴史時代の徳島市－阿波の古瓦－』徳島市教育委員会 1982
- (22) 黒板勝美編輯『国史大系 日本文德天皇実録』吉川弘文館
- (23) 戸田芳実「中世文化形成の前提」『日本領主制成立史の研究』 岩波書店 1967 初出は1962
- (24) 藤川智之「相知遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』 8号 1997
- (25) 『三好郡誌』
- (26) 『南北朝遺文』 2卷1773号
- (27) 『南北朝遺文』 4卷3347号
- (28) 「大柿遺跡」『1997発掘とくしま 平成8年度埋蔵文化財速報展』徳島県埋蔵文化財センター 1997
- (29) 原芳伸「第9回四国中世土器研究会発表資料 土井遺跡出土の土器焼成窯」 1998
- (30) 『加茂野宮遺跡発掘調査現地説明会資料』三野町教育委員会他 1996、『加茂野宮遺跡－四国電力株式会社三野変電所新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』三野町教育委員会 1997
- (31) 『阿波国徵古雑抄』
- (32) 『四国縦貫自動車道建設に伴う円通寺遺跡（小山地区）発掘調査現地説明会資料』徳島県埋蔵文化財センター 1997
- (33) 九十九肇「東原遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』 8号 1997
- (34) 泊強「花園遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』 8号 1997
- (35) 「昼間遺跡発掘調査概報 京伝地区・荒神前地区」『徳島県文化財調査概報 1976年度』 徳島県教育委員会 1978、「昼間遺跡（正力地区）」『徳島県文化財調査概報 昭和52年度』徳島県教育委員会 1980

(参考文献)

- 『池田町史 上巻』 池田町 1983
- 『角川日本地名大辞典36 徳島県』 角川書店 1986
- 岡田篤正「阿波池田付近の中央構造線の新期断層運動」『第四紀研究』 7号 1968
- 阿子島功「生きている中央構造線」『総合学術調査報告 池田町』徳島県立図書館 1980
- 岡田篤正「中央構造線の第四紀断層運動」『地質学論集』18号 1980
- 中川衷三編『徳島の自然 地質2』徳島市中央公民館 1981

III 調 査 成 果

1 基本層序

調査区中央に設定した土層確認ベルトの堆積状況を図示して基本層序の説明にかえる。第7図は南北方向のベルトの東面、第8図は東西方向のベルトの南面をそれぞれ図示したものである。

いずれも、わずかばかりの盛土を除去すると室町時代の遺構面と弥生時代の遺構面が同一レベルで確認できるなど、大西城の築城に代表されるように上野台地は後世の削平がたびたび繰り返されていたものと考えられる。

2 遺構と遺物

(1) 弥生時代

竪穴住居跡1 (SB1001) (第9図)

直径11m、深さが約40cmで、平面形はほぼ円形である。外側に8本の柱、内側に4本の柱のあったことが確認できた。柱穴は、直径約30cm・深さ約30cmを測る。壁際には周溝（幅約10～15cm・深さ約10cm）が一部検出された。炉跡は住居のほぼ中央にあり、長軸約180cm、短軸約150cmを測る。多くの壺・鉢・甕などの土器と石器が出土した。建物跡の規模から考えて、集落の中心的な建物であったと考えられる。

出土遺物 (第10図～第11図)

1は頸部にタテハケの認められる壺型土器である。頸部のみの残存であるが、やや外方に開き気味に立ち上がる。頸径は15.0cmを測る。2～4は甕型土器の口縁部である。いずれも「く」の字状に屈曲した口縁形態であり、3の内面にユビオサエが認められる。5・6は壺型土器の口縁部で、いずれも外反する形態である。5は口縁端部に2条の擬凹線を施す。口径は5が10.4cm、6が13.7cmを測る。7～10は壺型土器の底部である。それぞれ底経が4.0cm～7.0cmの平底部分を有する。いずれも外面はタテハケが施されている。内面も8・9は残部が少なく詳細はわかりにくいものの、7・10にはヘラケズリによる成形が認められる。11・12の壺型土器は外面上半に水平のタタキが認められるもので、タタキ後施されると考えられるハケによる調整がなかったかきわめて弱かったものと思われる。12の底部付近にはタテハケが認められる。内面はヘラケズリが施されている。13～18は壺型土器または甕型土器の底部である。18の底径2.0cmという狭いものも含めて平底部分が認められる。18の外面はタタキが認められる。19～29は鉢型土器である。21が外面にハケメが認められるほか、20・23～26の外面にはタタキが認められる。30・31は高杯型土器または器台型土器の脚部である。

32は砂岩の円礫を使用した石臼である。長さ37.2cm、幅36.8cm、厚さ10.2cm、重量22.9kgを測る。中央部に擦痕が残る。

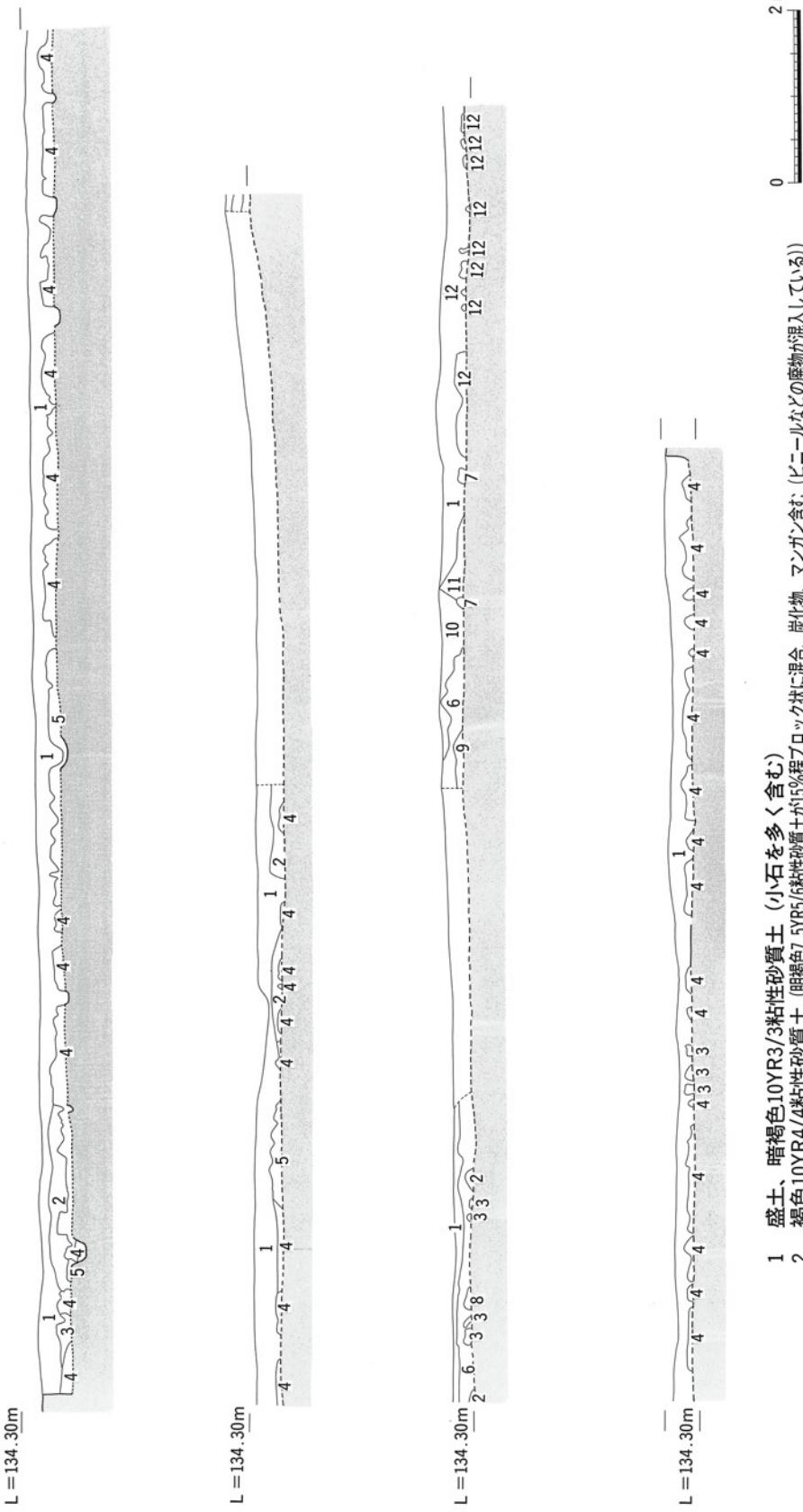
竪穴住居跡2 (SB1002) (第12図)

調査区の中央部南寄りで検出した住居跡である。西側を搅乱によって切られている。長辺約5.6m、短辺約5.4mの隅円方形の平面プランをもつ。ほぼ中央に長軸120cm・短軸60cm・深さ10cmの炉跡がある。東部と南部の一部に周溝（幅10cm・深さ5～13cm）が検出された。主柱は4本であると考えられる。柱穴は直径約20～30cm、深さ約30～40cmを測る。



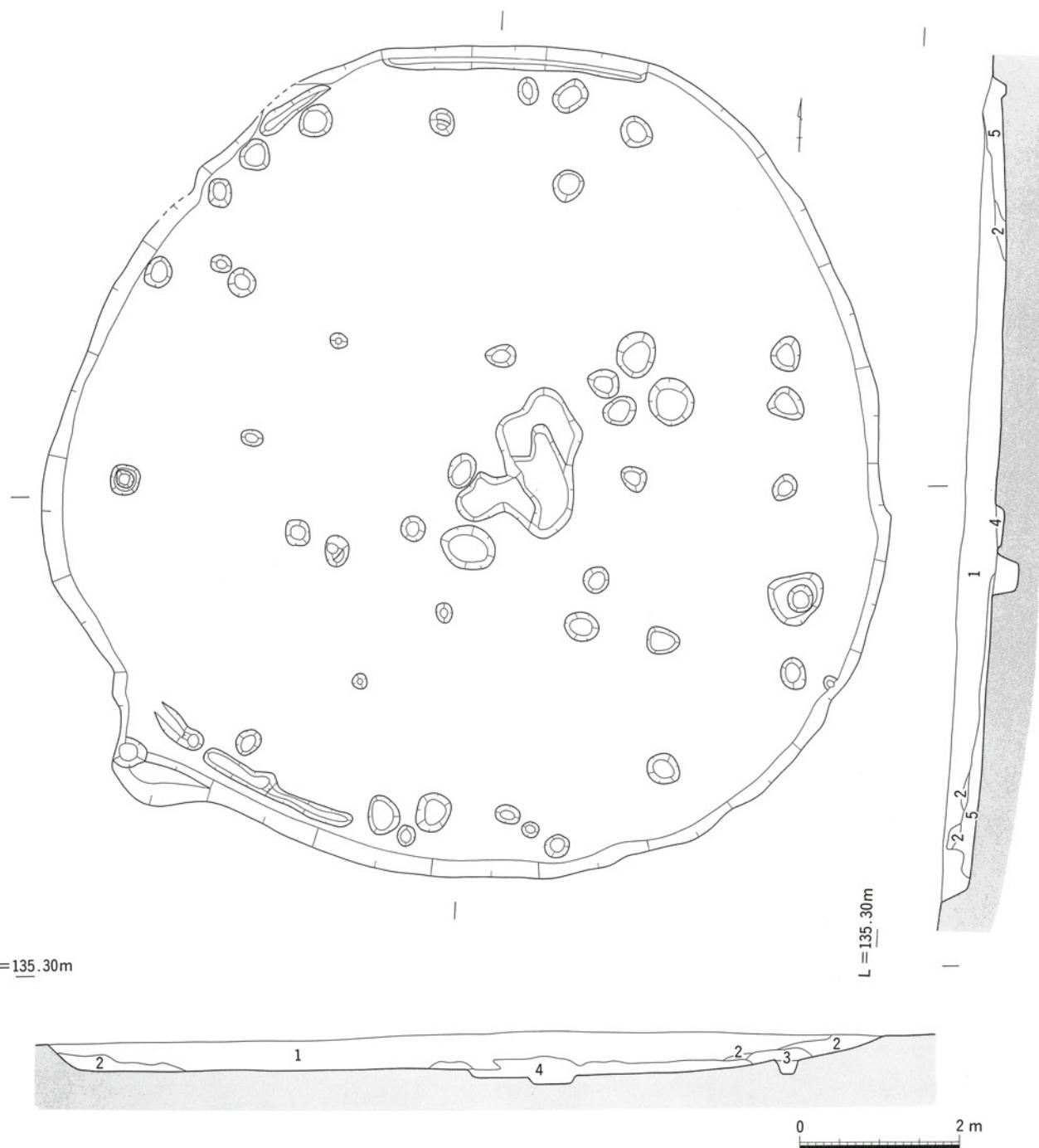
- 1 盛土、暗褐色10YR3/3粘性砂質土（小石を多く含む）
- 2 にぶい黄褐色10YR4/3粘性砂質土（0.2～1cm大の砂礫を多く含む、炭化物、マンガンを含む）
- 3 褐色10YR4/4粘性砂質土（0.2～1cm大の砂礫を多く含む、炭化物、マンガンを含む、しまりが弱い）
- 4 黒褐色10YR3/4粘性砂質土（褐色10YR4/4粘性砂質土が5%程くも状に混合、0.2～1cm大の砂礫を多く含む、炭化物、マンガンを含む、しまりが良好）
- 5 褐色10YR4/6粘性砂質土（褐色10YR4/4粘性砂質土が15%程混合、マンガン含む、しまりが良好）
- 6 褐色7.5YR5/6粘性砂質土（褐色10YR4/4粘性砂質土が10%程くも状に混合、1～2cm大の小石、砂礫を含む、マンガン含む）
- 7 明褐色10YR3/4粘性砂質土（砂礫を多く含む、炭化物、マンガンを含む）
- 8 暗褐色10YR4/4粘性砂質土（0.5～1cm大の砂礫を多く含む、しまりが良い、炭化物、マンガン含む）
- 9 褐色10YR4/4粘性質土（砂礫をほとんど含まず、粘性大）
- 10 褐色7.5YR4/3粘性砂質土（砂礫を多く含む、炭化物、マンガン少量含む、しまり良）
- 11 明褐色7.5YR5/6粘性砂質土（しまり良、マンガンを含む）

第7図 基本土層図 (1)

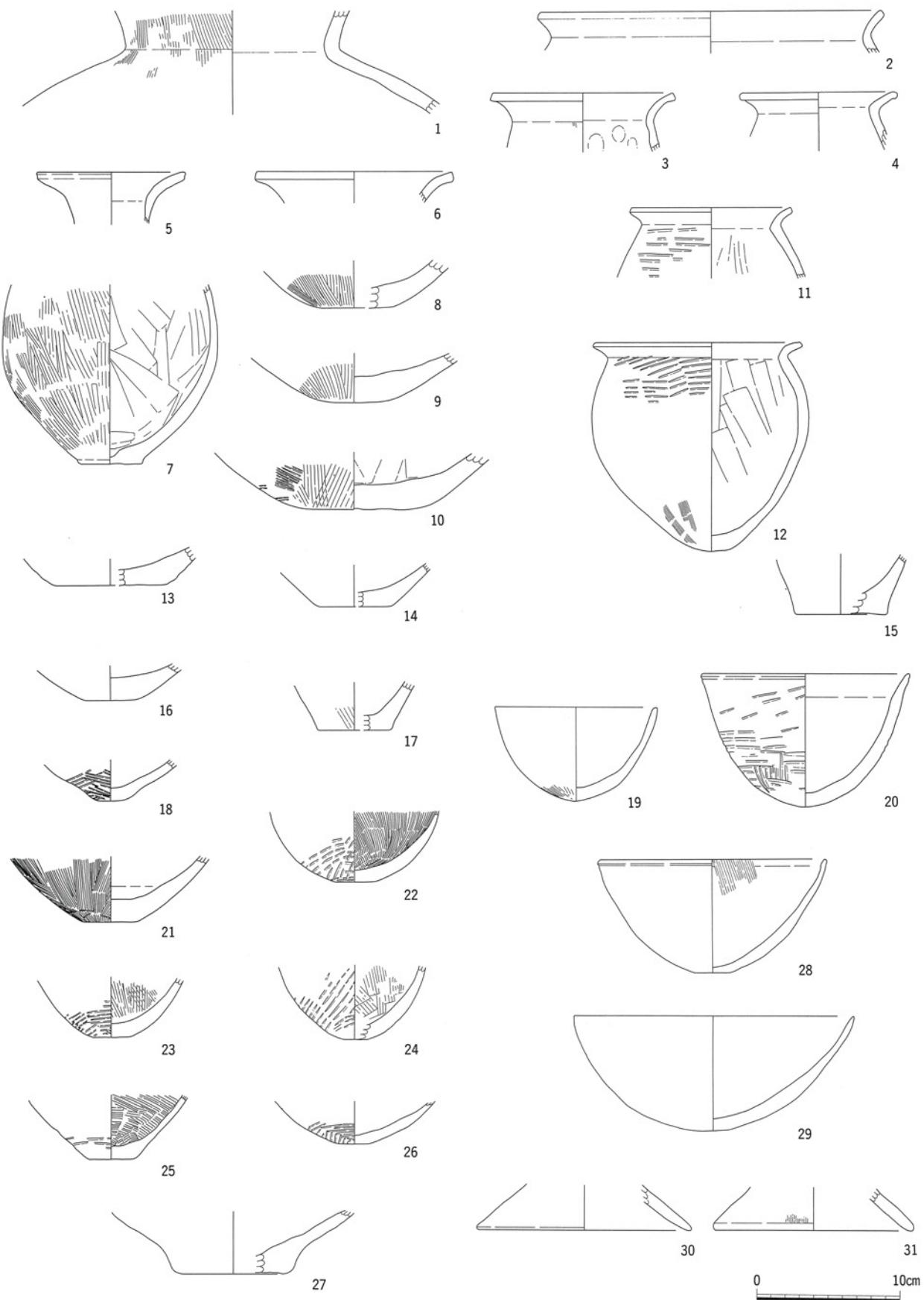


- 1 盛土、暗褐色10YR3/3粘性砂質土（小石を多く含む）
 2 褐色10YR4/4粘性砂質土（明褐色7.5YR5/6粘性砂質土が15%程ブロック状に混入、炭化物、マンガン含む（ビニールなどの腐物が混入している））
 3 黄褐色10YR5/6粘性砂質土（しまり良い）
 4 明褐色7.5YR5/6粘性砂質土（明褐色10YR4/4粘性砂質土がブロック状に混合、マンガン含む、しまり良い）
 5 明褐色7.5YR5/6粘性砂質土（黄褐色10YR5/6が20%程ブロック状に混合）
 6 褐色7.5YR4/3粘性砂質土（砂礫を多く含む、炭化物、マンガンを少量含む、しまり良）
 7 明褐色7.5YR4/6粘性砂質土（マンガンを含む、しまり良）
 8 褐色10YR4/8粘性砂質土（褐色7.5YR4/3粘性砂質土がブロック状に混合、マンガンを含む）
 9 褐色7.5YR4/6粘性砂質土（褐色7.5YR4/3粘性砂質土がブロック状に混合、マンガンを含む）
 10 黒褐色7.5YR3/2粘性砂質土（砂礫を多く含む；（3cm～5cm大の小石を多く含む）、炭化物、マンガン含む）
 11 暗褐色10YR3/4粘性砂質土（砂礫を含む、炭化物、マンガン含む、しまり良）
 12 褐色10YR4/6粘性砂質土（砂礫を少量含む、マンガン含む）

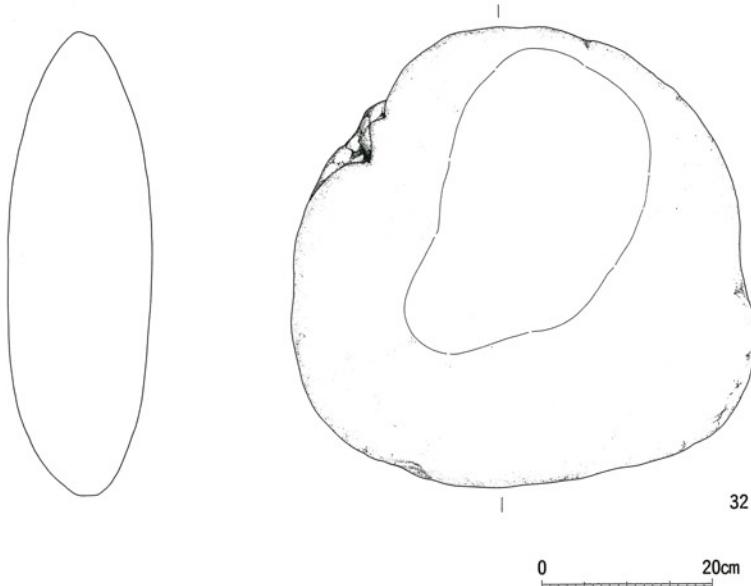
第8図 基本土層図 (2)



第9図 SB1001実測図



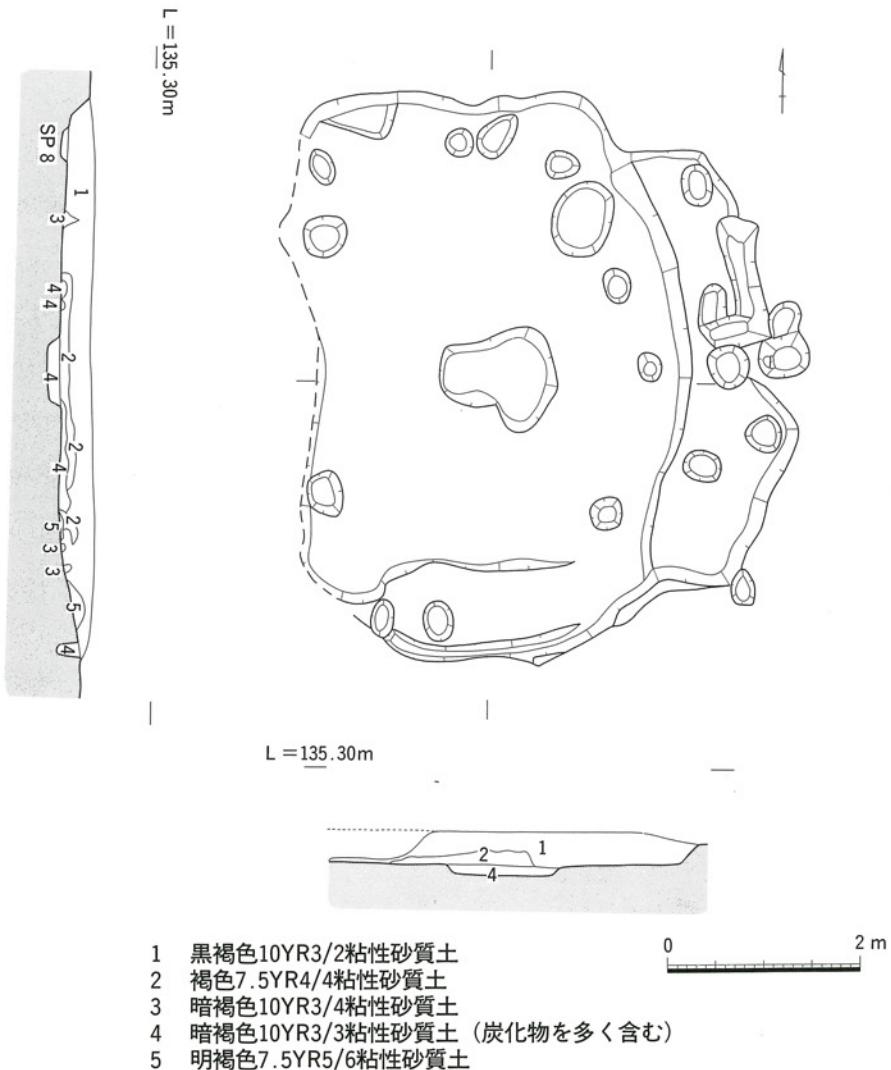
第10図 SB1001出土遺物実測図 (1)



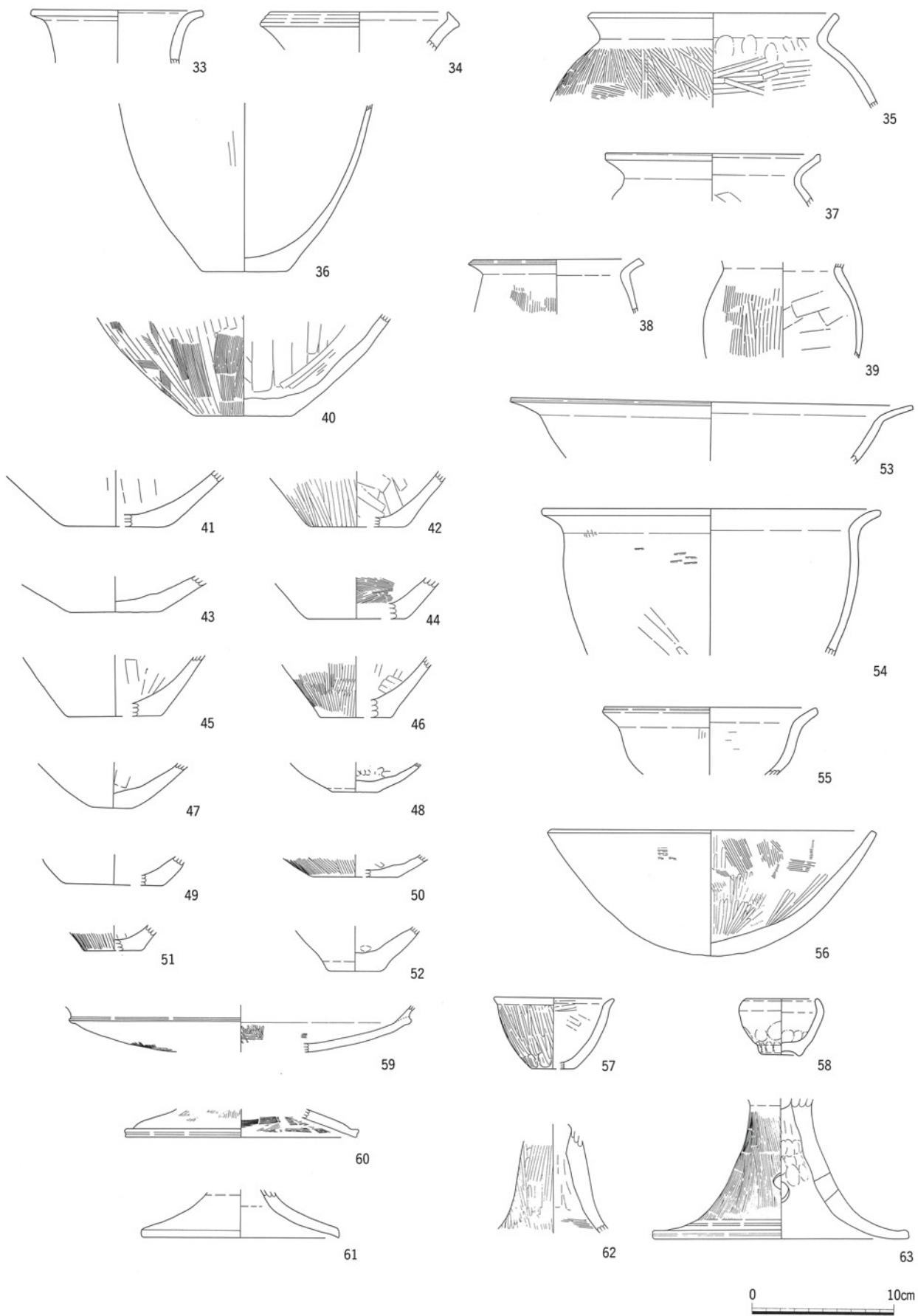
第11図 SB1001出土遺物実測図 (2)

出土遺物 (第13図)

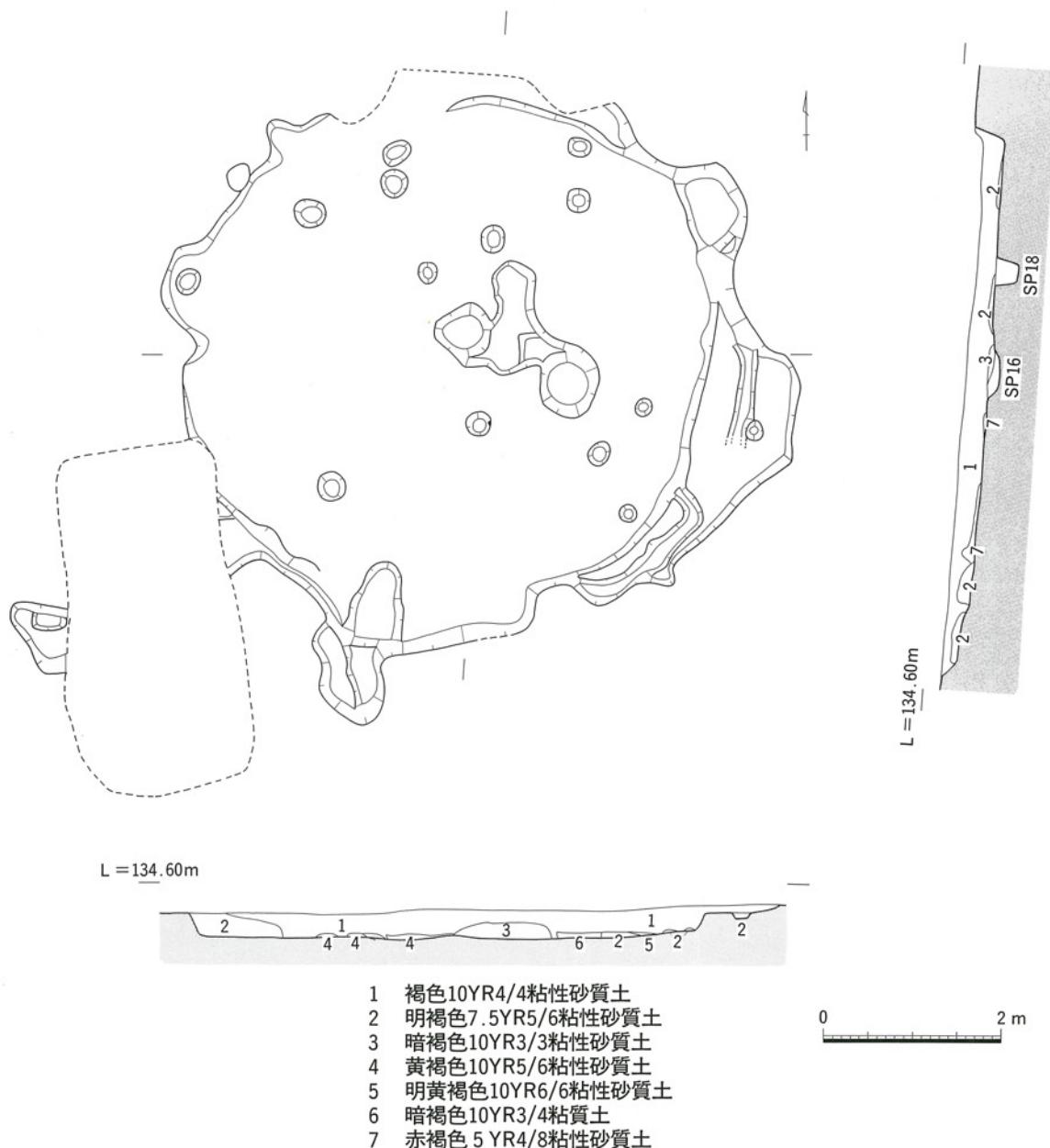
33・34は壺型土器の口縁部である。34は口縁端部を上方につまみあげ、3条の擬凹線を施す。35の甕型土器は「く」の字状の頸部をもち、外面はハケメ、内面は頸部にユビオサエ後ヘラケズリが施されている。36は平底の底部をもつ壺型土器である。胴部は卵型である。37・38は甕型土器の口縁部、39は甕型土器の胴部である。37は内面にユビオサエ、38は外面にタテハケ、39は外面タテハケ、内面ヘラケズリが認められる。40～51は壺型土器の底部である。いずれも2.6cm～7.0cmの平底



第12図 SB1002実測図



第13図 SB1002出土遺物実測図



第14図 SB1003実測図

部分が認められる。磨耗が著しく調整痕の観察し難いものが多いが、外面はタテハケ、内面はヘラケズリが基本的な調整方法である。52～55は甕型土器である。52は突出した平底を呈する底部、53は「く」の字状に屈曲した口縁部である。54・55はゆるやかに外反する口縁部である。56の鉢型土器は口径22.5cmを測り、外面にはタタキ痕、内面に下半ヘラケズリが認められる。57は口径8.4cmの小型の鉢型土器である。内外面ともヘラミガキが施されている。58はミニチュアの鉢型土器で、口径は5.0cm、底部外面がややくぼむものの平底形態である。59は高杯の杯部で、ゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。胎土に結晶片岩や長石を含む。60～63は高杯の脚部である。62は石英・結晶片岩を含む胎土に外面タテハケ、内面ヘラケズリが施されている。63は方形状におさめた脚端部をもち、外面タテハケ、内面ユビオサエが認

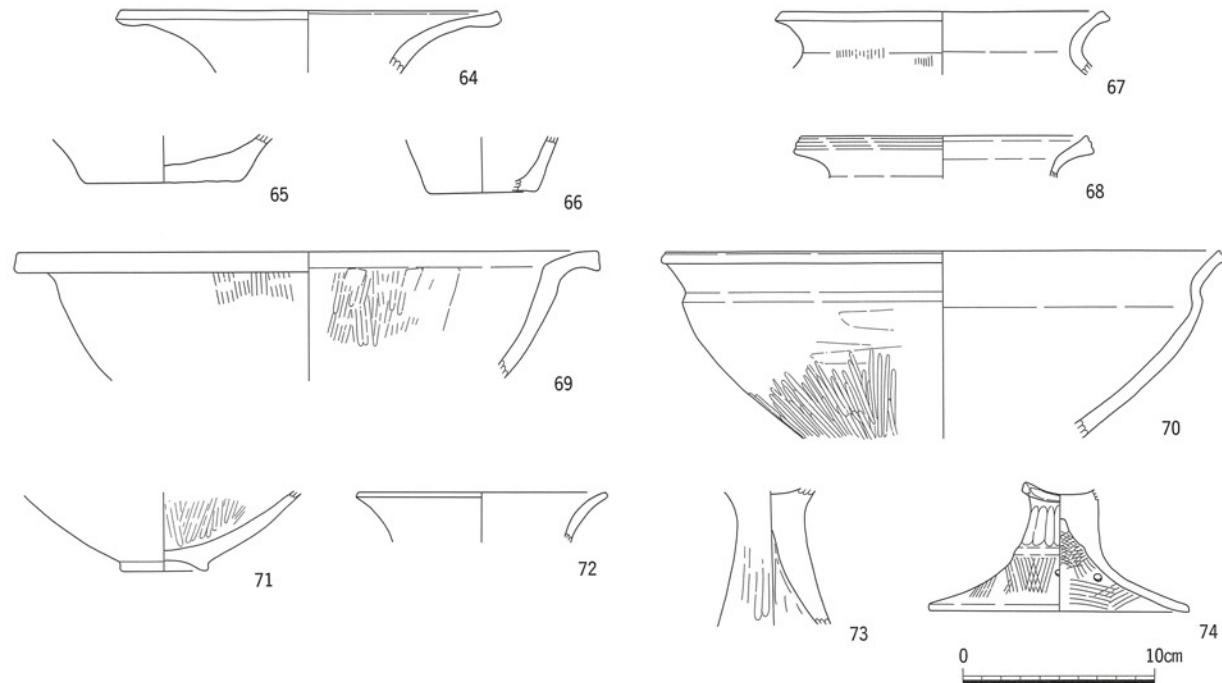
められる。

竪穴住居跡3 (SB1003) (第14図)

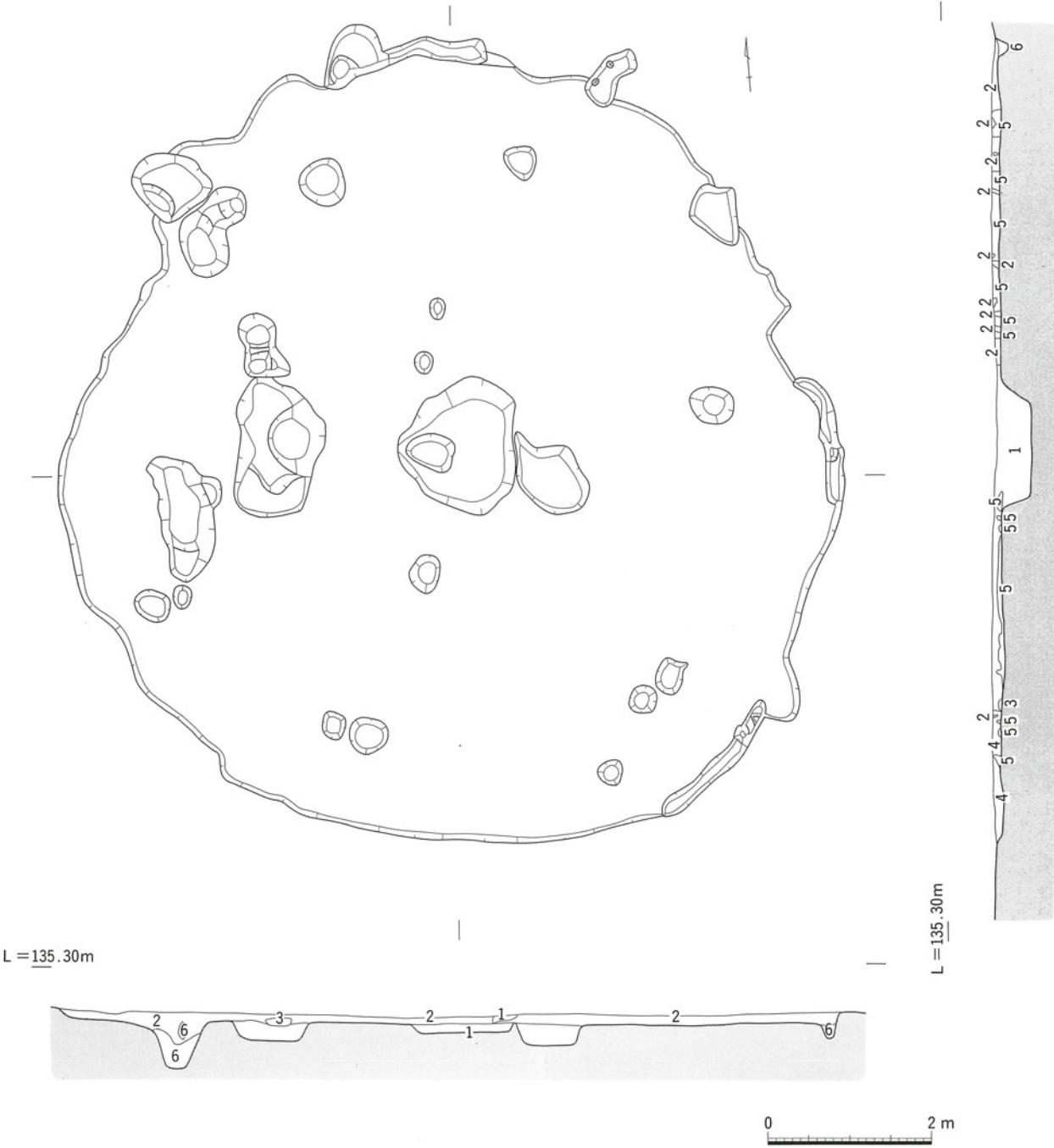
直径約6m、深さが約35cmの不整な円形の竪穴住居跡である。4本の主柱を持っている。柱穴は直径約20~30cm、深さ約35cmを測る。その中には、柱穴の周りに石を配したものも確認された。壁際には周溝（幅10~15cm・深さ約10cm）が一部検出された。炉跡は住居の中央よりやや東にあり、長軸約120cm、短軸約60cmを測る。住居の北東部の壁際には貯蔵穴、南側には住居を拡張した部分のあったことが確認できた。

出土遺物 (第15図)

64は壺型土器の口縁部、65・66は壺型土器の底部である。いずれも磨耗が著しく調整痕は確認し難い。67・68は甕型土器の口縁部である。68は口縁端部に2条の凹線を施す。69は鉢型土器である。外反する口縁部をもち、外面はタテハケ、内面はヘラミガキが施されている。70は「S」字状に屈曲する口縁部をもつ高杯の杯部である。口縁端部はわずかに下方に拡張し1条の擬凹線が認められる。外面下方にヘラミガキが施されている。71は鉢型土器の底部、72は壺型土器の口縁部である。71の内面にはヘラミガキが認められる。73・74は高杯の脚部である。73は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、74は内外面ともハケメが認められる。



第15図 SB1003出土遺物実測図



- 1 黒褐色10YR2/3粘質土（炭化物を多く含む）
- 2 黒褐色7.5YR3/2粘質土（炭化物を含む）
- 3 明赤褐色2.5YR5/6粘性砂質土
- 4 褐色10YR4/6粘性砂質土
- 5 黄褐色10YR5/8粘性砂質土
- 6 暗褐色10YR3/3粘質土

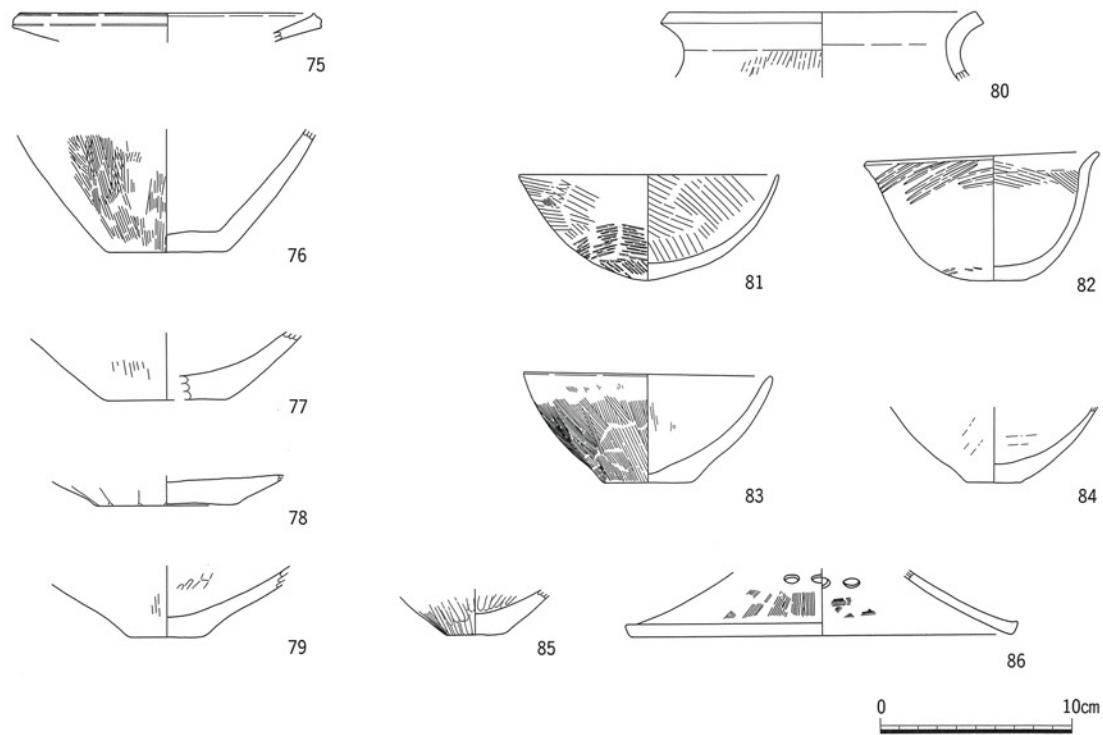
第16図 SB1004実測図

竪穴住居跡4 (SB1004) (第16図)

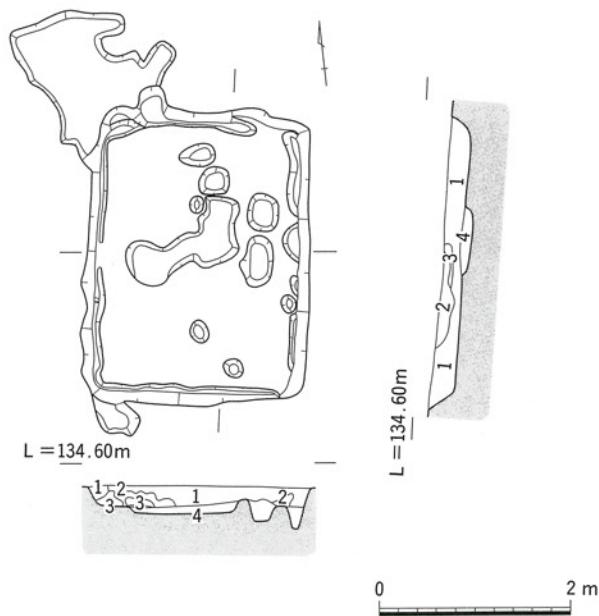
調査区の南西部で検出した住居跡である。長軸約10m、短軸約9.8mを測る不整な円形の平面プランをもつ。ほぼ中央に長軸160cm・短軸約120cm・深さ約15cmの炉跡がある。北部と南東部の一部に周溝（幅約10cm・深さ約5cm）が検出された。主柱は6本であると考えられる。柱穴は直径約20～40cm・深さ約30～50cmを測る。柱穴が2つ並んでいるところがあり、建て替えられた可能性がある。

出土遺物 (第17図)

75は口縁端部を上方に拡張し2条の凹線をもつ壺型土器の口縁部、76は平底を呈する壺型土器の底部である。77～79も平底を呈する壺型土器の底部である。外面にはハケメ痕が認められる。80は甕型土器で、外反する口縁部の外面にタテハケが施されている。81～85は鉢型土器である。81は口径13.6cmを測り、外面上方及び内面にはハケメが、外面上方にはタタキ痕が認められる。82は外反する口縁部をもつもので、口径は11.9cmを測る。底部は平底を呈する。外面にタタキ痕、内面にハケメが認められる。83は口径12.8cmを測るもので、底部は平底を呈する。外面にハケメが顕著に残る。84・85はそれぞれ平底を呈する。86は高杯の脚部で、脚端部はわずかに上方に拡張する。内外面ともハケメ痕が認められる。



第17図 SB1004出土遺物実測図



- 1 暗褐色10YR3/3粘性砂質土
 2 褐色7.5YR4/6粘性砂質土
 3 褐色10YR4/6粘性砂質土
 4 赤褐色5YR4/8粘性砂質土

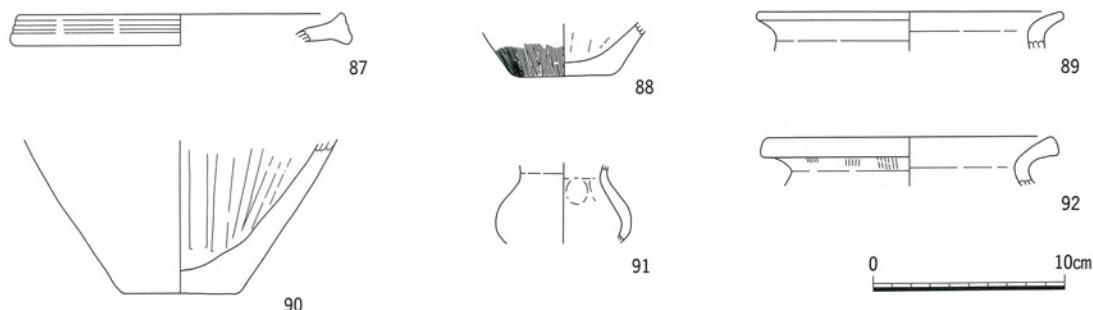
第18図 SB1005実測図

豎穴住居跡5 (SB1005) (第18図)

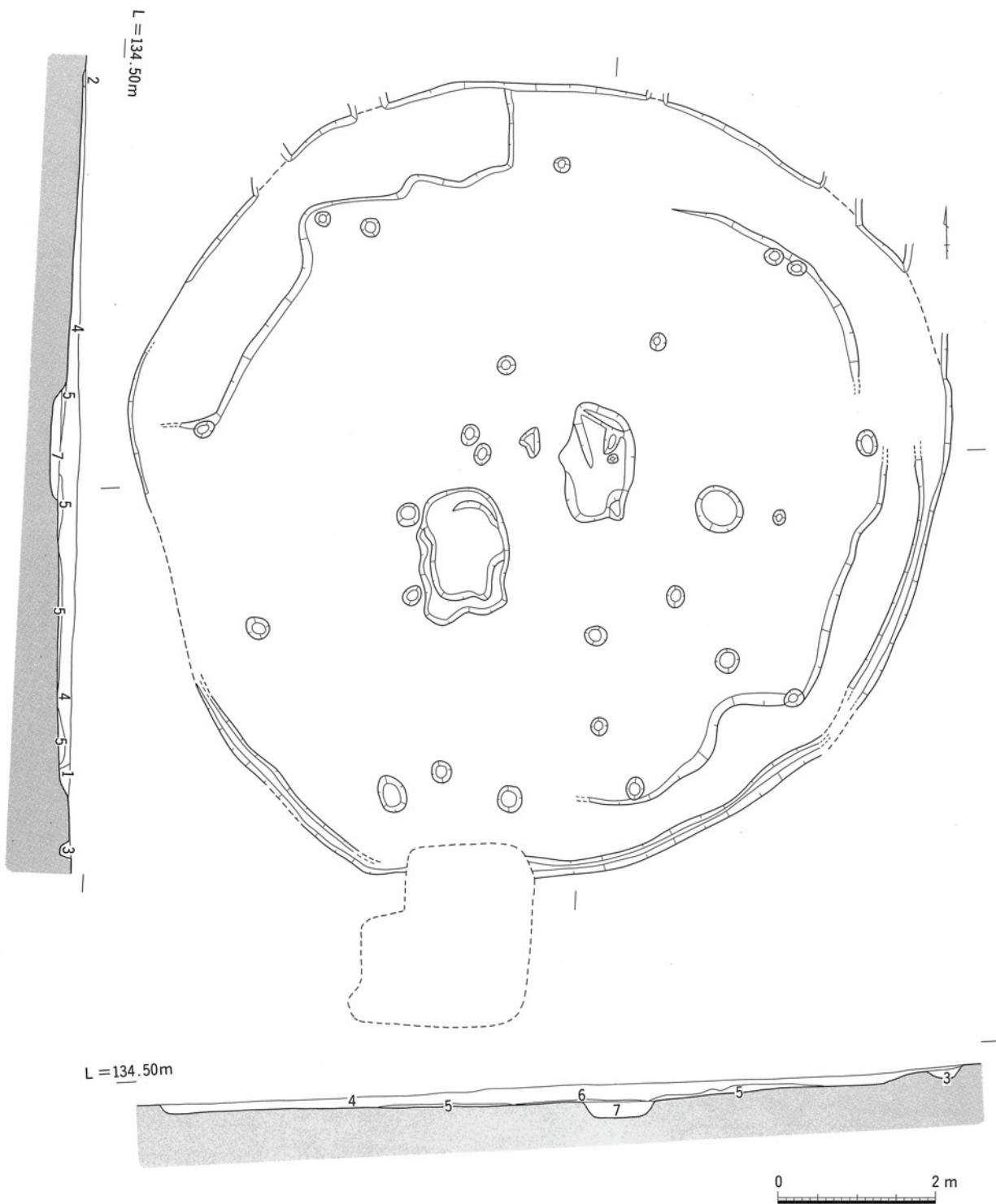
長辺約3m、短辺約2.3m、深さが約20cmの隅円方形の住居跡である。壁際には、幅約10cm、深さ約10cmの周溝が検出された。炉跡は住居の中央よりやや西にあり、長軸約100cm、短軸約40cm、深さ約20cmを測る。当遺跡では最も小さい住居跡である。

出土遺物 (第19図)

87は壺型土器の口縁端部で、上下に拡張され2条の凹線が施されている。88は平底を呈する壺の底部で、外面にタテハケが施されている。89・92は甕型土器の口縁部で、外反する形態である。90は壺型土器の底部で、平底を呈し、内面はヘラケズリが施されている。91はミニチュア土器である。

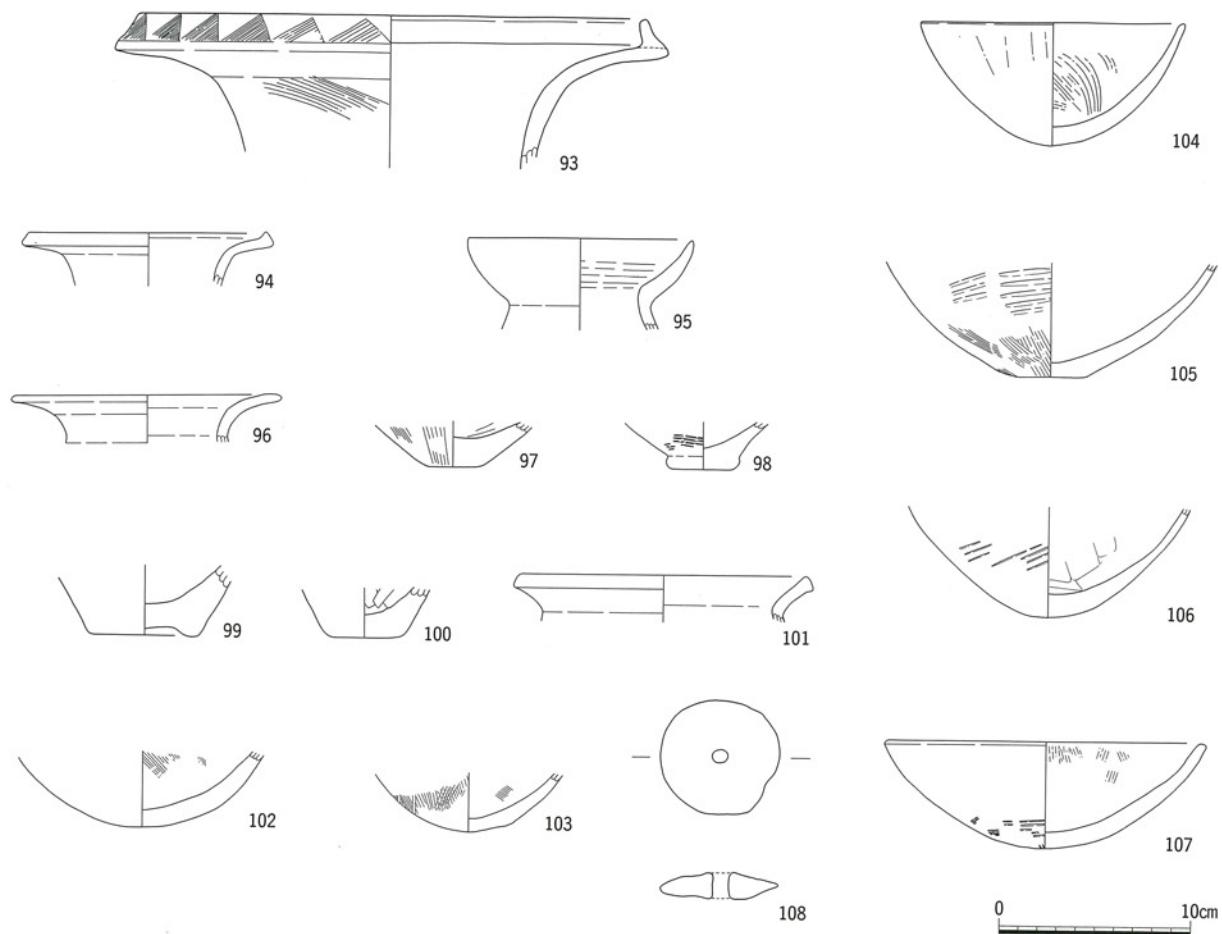


第19図 SB1005出土遺物実測図



- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1 褐色10YR4/6粘性砂質土 | 5 褐色7.5YR4/6粘性砂質土 |
| 2 オリーブ褐色2.5Y 4/3粘性砂質土 | 6 黒褐色10YR3/1粘性砂質土 |
| 3 暗褐色10YR3/3粘性砂質土 | 7 黒褐色10YR2/3粘性砂質土 (炭化物多く含む) |
| 4 褐色10YR4/4粘性砂質土 | |

第20図 SB1006実測図



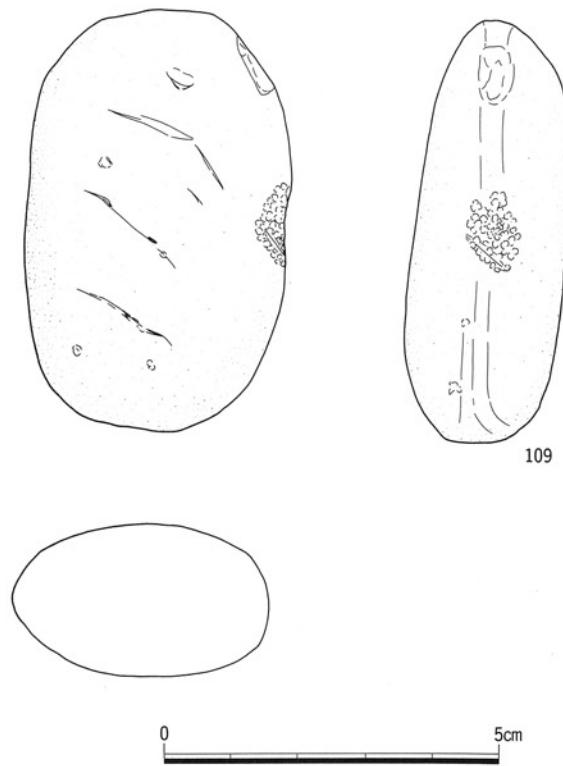
第21図 SB1006出土遺物実測図 (1)

豎穴住居跡 6 (SB1006) (第20図)

直径約10cm、深さが約20cmの不整な円形の豎穴住居である。9本の主柱を持っている。柱穴は直径約20~30cm、深さが約30~40cmを測る。壁際に周溝（幅10~20cm・深さ5~10cm）が一部検出された。炉跡は住居の中央よりやや東にあり、長軸約150cm・短軸約80cmを測る。南東部にベッド状遺構が確認された。

出土遺物 (第21図~第22図)

93は壺型土器の頸部から口縁部にかけての部分である。外反する頸部をもち、口縁端部は三角形を描いた部分に斜線を施した文様を書き込んでいる。いわゆる「鋸歯文」と呼ばれるものであり、岡本健児氏によって「上野II式」と分類された弥生土器のなかにもこの文様のものが認められる⁽¹⁾。94~100も壺型土器である。94は端部を上方に拡張した口縁部、95は内彎しつつあがる口縁部、96は外反する口縁部である。97~100は平底を呈する底部である。98の外面にはタタキ痕が、100の内面にはヘラミガキ痕が認められる。101は甕型土器の口縁部で、外反しつつ端部はわずかに下方に拡張する。102~107は鉢



第22図 SB1006出土遺物実測図 (2)

出土遺物 (第24図～第25図)

110・111は平底形態の壺型土器底部である。112・113は鉢型土器で、112は口径13.4cmを測り、外面ヘラケズリ、内面タテハケの調整痕が認められる。胎土に結晶片岩・石英・長石を含む。113は外面タタキ後ナデ、内面ユビオサエによる調整が施されている。両者とも底部は平底を呈する。114・115は平底の壺型土器・甕型土器の底部、116～119は鉢型土器である。116～118は平底を呈し、119は丸底である。116は口径12.8cm、外面にはヘラケズリとタタキの調整が認められる。117は外面下方にユビオサエ痕が残る。118・119は外反する口縁部をもち、119は半球形の胴部をもつ。120は高杯の杯部である。口径は23.0cmを測る。121は平底の鉢で、口径は19.2cm、内外面ともハケメが認められる。122の高杯は讚岐系と考えられるもので、杯部外面はヘラミガキ、杯部内面は格子目状に密なヘラミガキを施す。

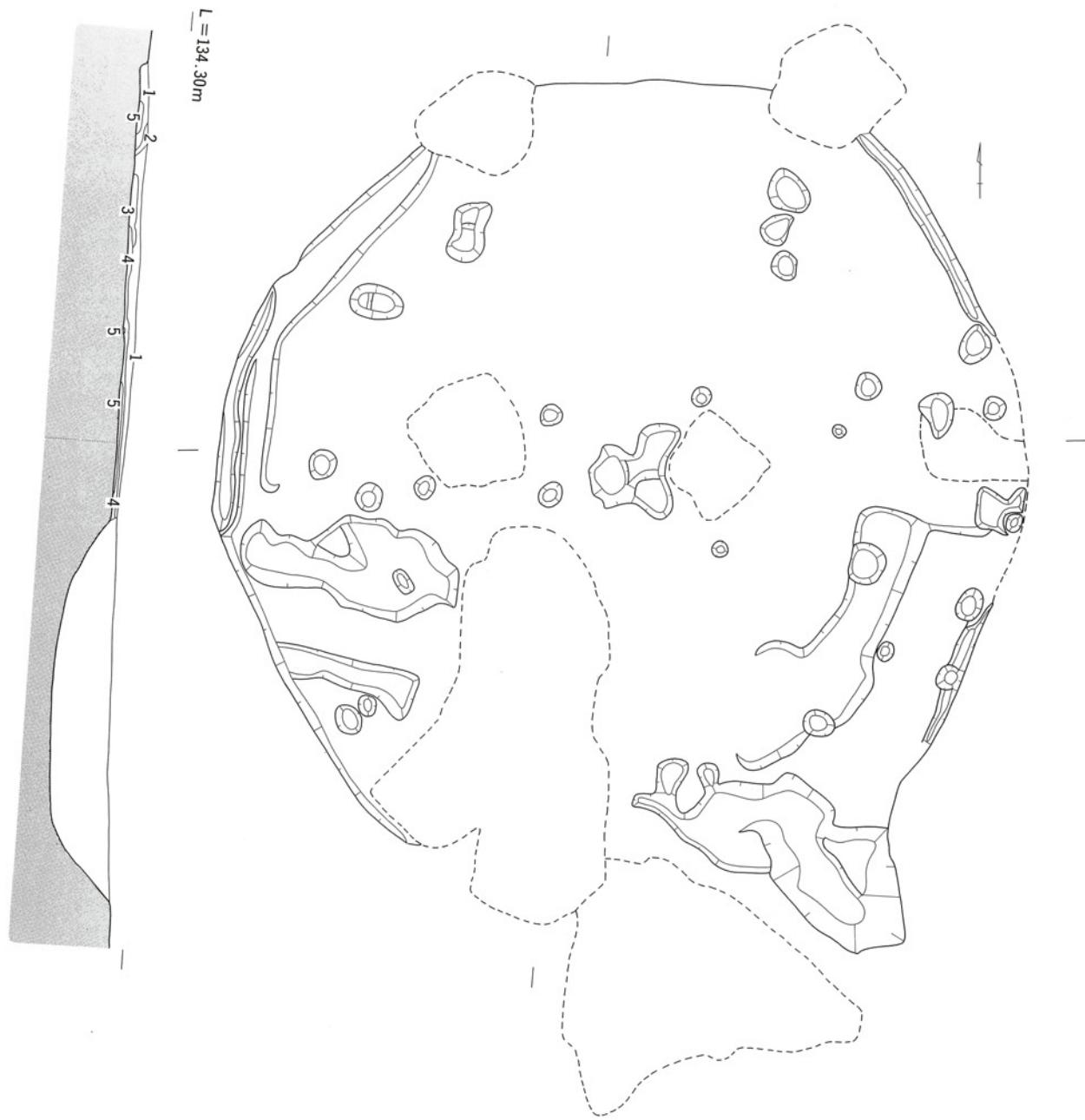
123・124はサヌカイトを用いたスクレイパーである。123は両面形成により刃部を形成している。残存部分の長さは8.5cm、幅4.0cm、厚さ0.4cm、重量20.5gを測る。124も同様にサヌカイトを用いたスクレイパーで、裏面からの平坦な剝離によって刃部を形成している。残存部分の長さは5.3cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重量6.82gを測る。

型土器である。105を除きいずれも丸底を呈する。105の外面は下方を除きタタキが認められる。また106・107の外面もタタキが施されている。さらに106の内面にヘラケズリ痕が認められるほかはハケあるいは磨耗によって調整痕の観察が困難なものである。108は紡錘車である。長軸6.2cm・短軸5.9cm・厚さ1.3cm・孔径0.8cmを測る。

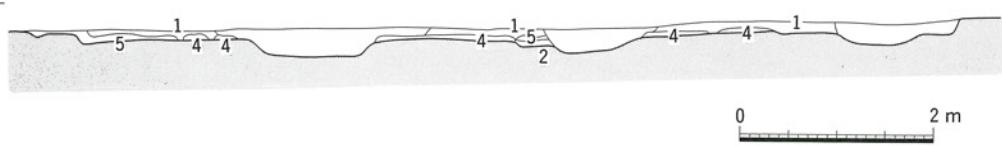
109は緑色片岩の円礫を利用した敲打痕のある石である。縁辺中央部に敲打痕が認められる。長さ16.8cm・幅10.2cm・厚さ6.0cm・重量1.99kgを測る。

竪穴住居跡7 (SB1007) (第23図)

調査区の北西部で検出した住居跡である。南側を攪乱によって切られている。長軸約10m、短軸約9.2mを測る不整円形の平面プランをもつ。ほぼ中央に長軸110cm・短軸85cm・深さ10cmの炉跡がある。北東部と北西部の一部に周溝(幅10～20cm・深さ5～20cm)が検出された。主柱は6本確認されている。柱穴は直径約30～40cm・深さ約30～40cmを測る。

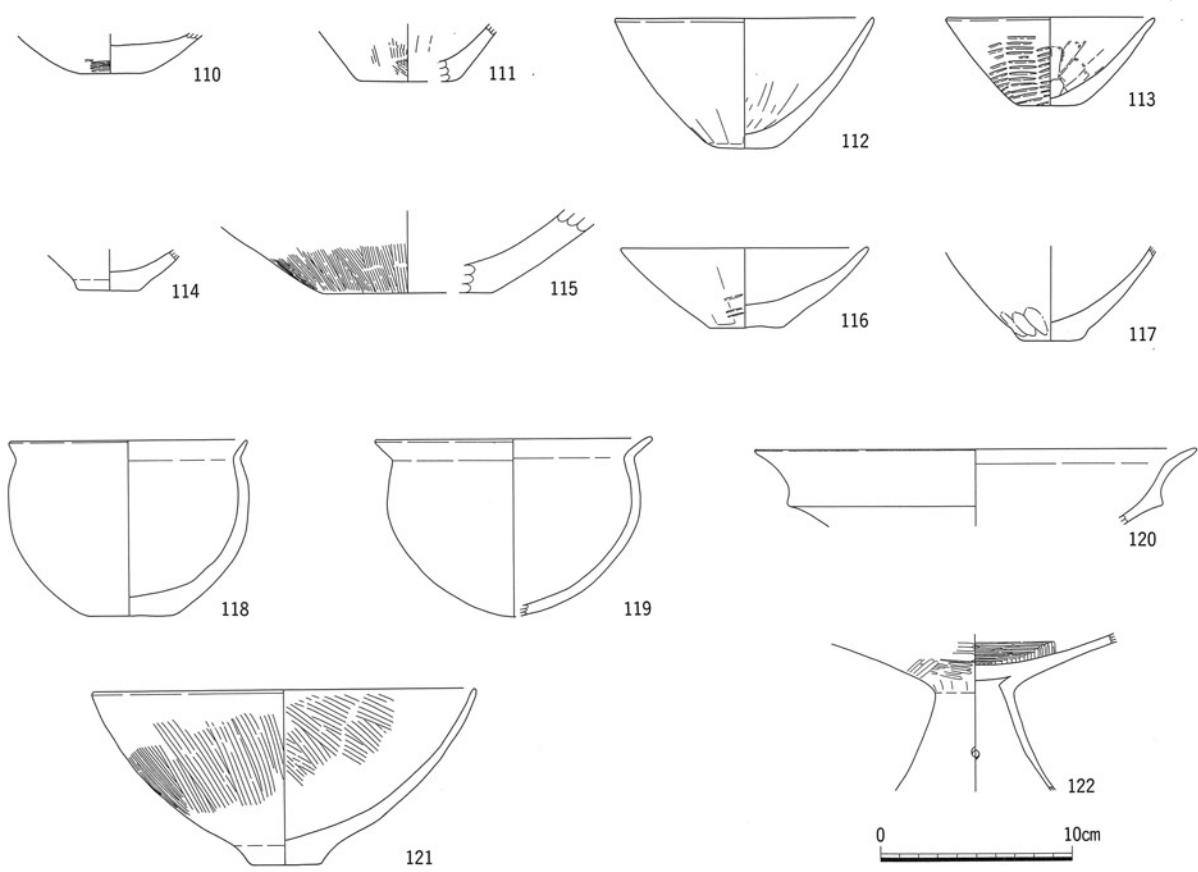


L = 134.30m

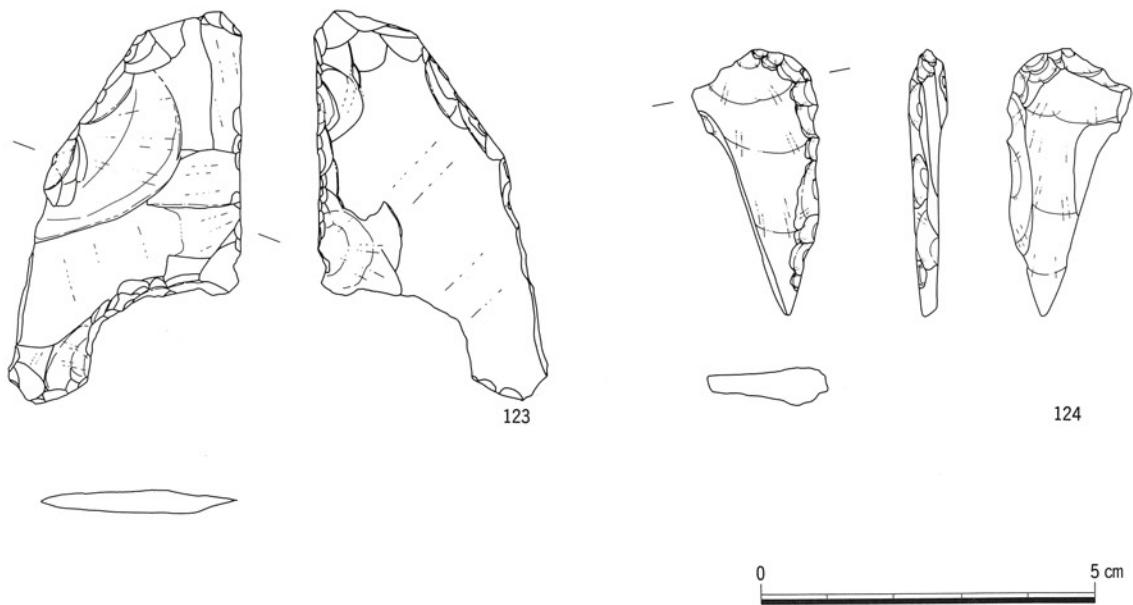


- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 褐色10YR4/4粘性砂質土 | 4 暗褐色7.5YR3/4粘性砂質土 |
| 2 赤褐色5 YR4/6粘性砂質土 | 5 明褐色10YR5/6粘性砂質土 |
| 3 褐色7.5YR4/4粘性砂質土 | |

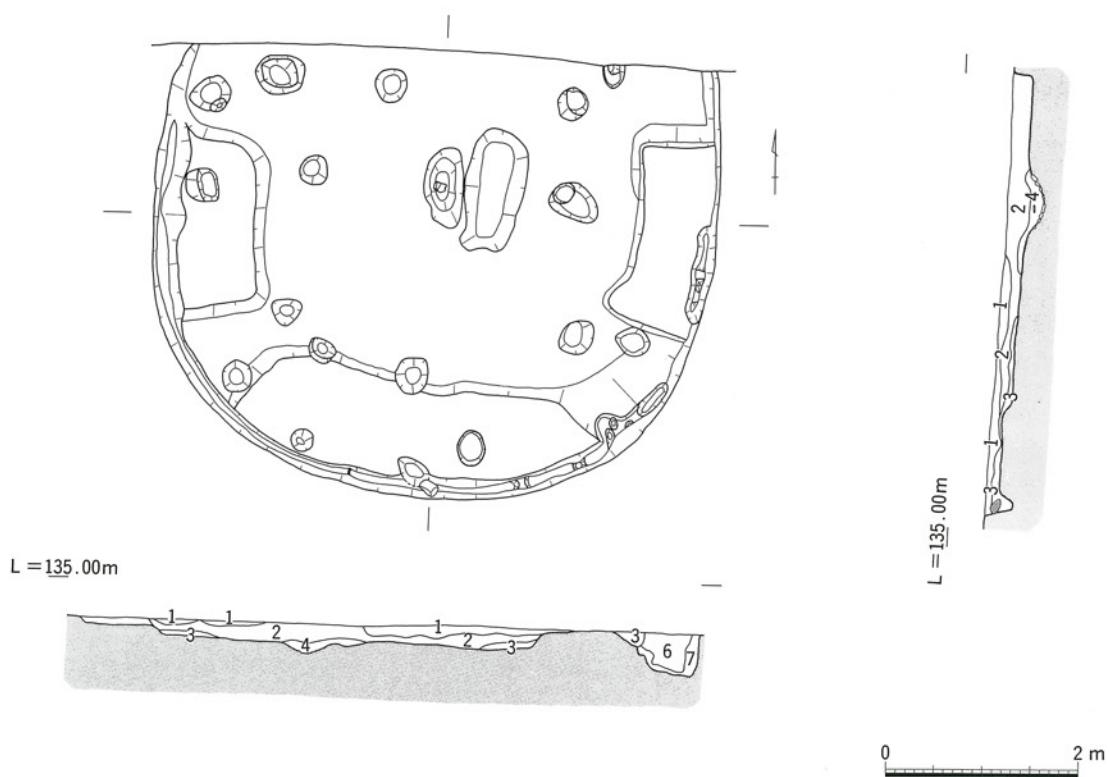
第23図 SB1007実測図



第24図 SB1007出土遺物実測図 (1)

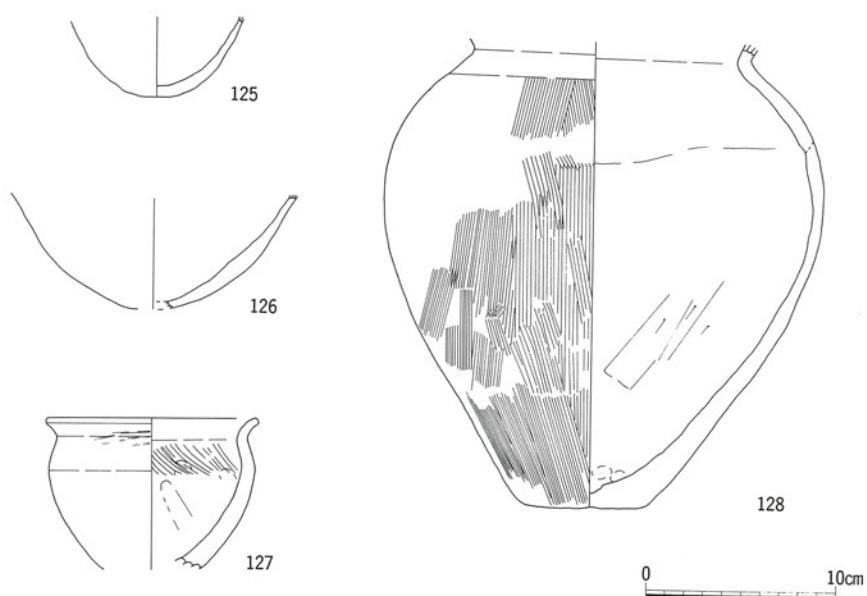


第25図 SB1007出土遺物実測図 (2)

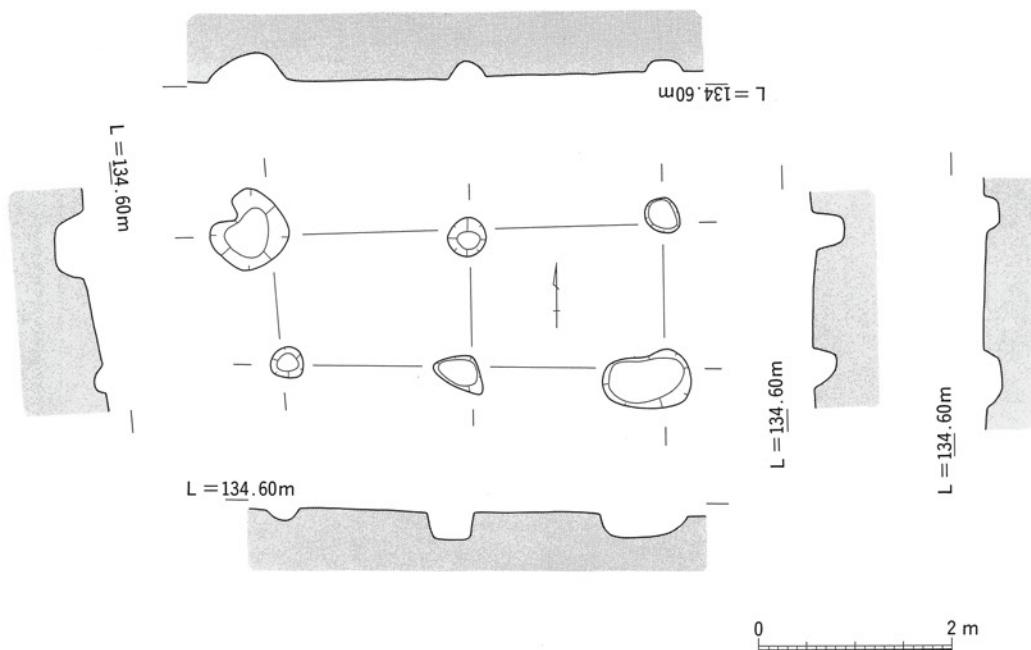


- 1 にぶい黄褐色10YR5/4粘性砂質土（粒子細かい、小礫（R 2 mm）やや多めに含む、土器片含む）
- 2 にぶい黄褐色10YR4/3粘性砂質土（粒子細かい、小礫（R 2 mm）含む、土器片含む）
- 3 褐色10YR4/4粘性砂質土（粒子やや粗い、小礫（R 2 mm）含む、土器片含む）
- 4 暗褐色10YR3/3粘性砂質土（やや粘性強い、粒子きわめて細かい、小礫（R 2 mm）少量含む、炭・土器片含む、しまり良い）
- 5 明褐色7.5YR5/8粘性砂質土（粒子細かい、小礫（R 2 mm）やや多めに含む）
- 6 黒褐色10YR3/2粘性砂質土（粘性強い、粒子きわめて細かい、炭含む、土器片含む、しまり悪い）
- 7 褐色10YR4/6粘性砂質土（粘性強い、粒子きわめて細かい、小礫少量含む、しまり悪い）

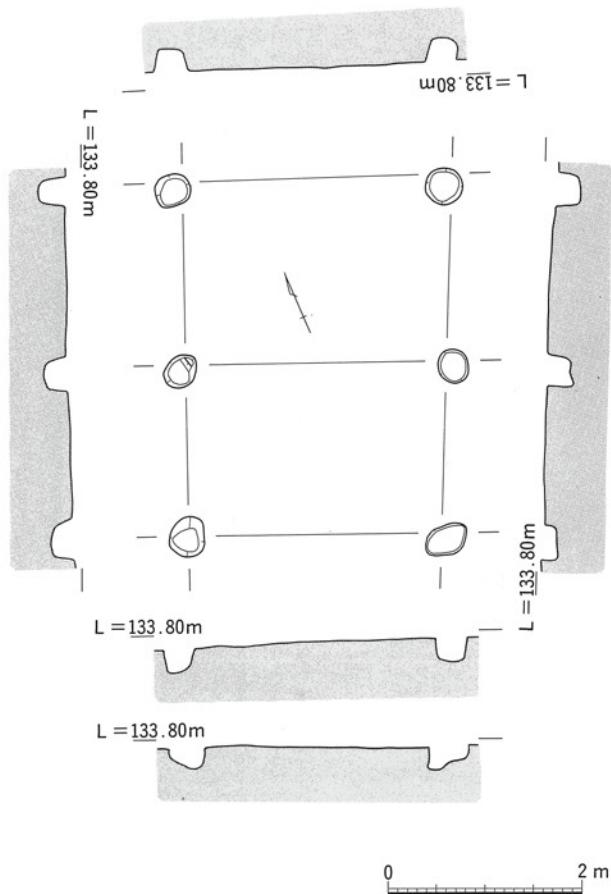
第26図 SB1008実測図



第27図 SB1008出土遺物実測図



第28図 SA1001実測図



第29図 SA1002実測図

豊穴住居跡 8 (SB1008) (第26図)

調査区で最も西に位置する住居跡である。北端が調査区外に延びているため、全体の規模については不明であるものの、東西軸は約5.8mを測り、平面プランは不整円形である。中央やや東で長軸約1.3mを測る炉跡とその西側に長軸約0.9mを測る炉跡を検出した。ともに土器片を多量に含むものの、前者は多くの炭化物を含むのに対し、後者はほとんど含んでいなかった。壁際には幅約15cm・深さ約26cmの断面V字形の周溝が確認された。主柱は8本である。

出土遺物 (第27図)

125～127は鉢型土器で、127は底部が欠損しているものの125・126は丸底である。127は外反する口縁部をもち、口縁部外面にタタキ、内面下方にヘラミガキが認められる。128は底部平底の甕型土器であ

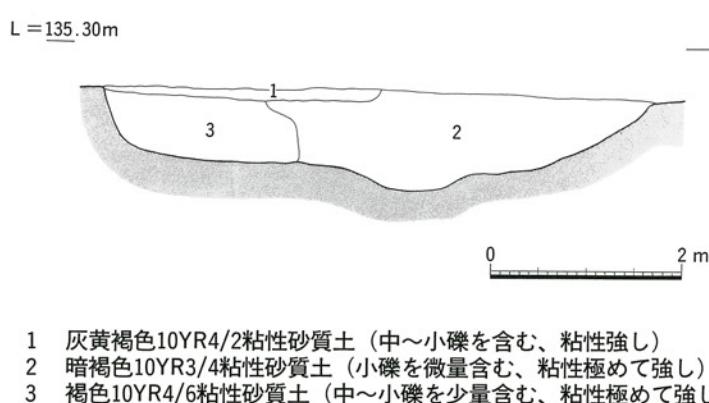
る。外面はタテハケ、内面下方にヘラケズリが施されているのが看取される。

掘立柱建物跡1 (SA1001) (第28図)

F・G-3グリッドで検出された6つのピットで構成される住居跡である。ほぼ東西方向の主軸をもち、1間×2間の小規模なものである。梁間約3.2m、桁行約4mを測る。柱穴は直径約30cm前後の円形プランを有する。深さは約35cm～40cmを測る。各柱穴間距離は約1.8mである。

掘立柱建物跡2 (SA1002) (第29図)

H・I-13・14グリッドで検出された6つのピットで構成される住居跡である。主軸を北東-南西方向にもち、梁間1間・桁行2間の小規模なものである。梁間約2.7m・桁行約3.7mを測る。柱穴は直径約30～40cmの円形プランを有する。深さは約20～25cmを測り、桁行の柱穴間の距離は約1.8mである。



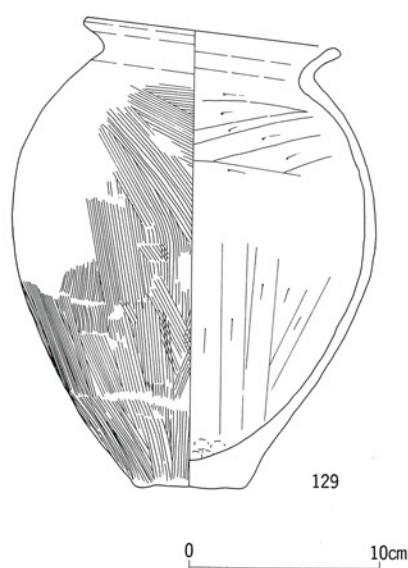
第30図 SD1002土層断面実測図

溝1 (SD1002) (第30図)

調査区の南西隅、X・W-1グリッドで検出された溝で、L字状に屈曲する部分が確認されたが、その南端は調査区外へ延びる。灰黄褐色や暗褐色の埋土には礫が含まれており、粘質度の強い土である。

出土遺物 (第31図)

129は底部平底の壺型土器で、口縁部は「く」の字状に屈曲する。外面にタテハケ、内面上方にヨコ方向のヘラケズリ、下方にタテ方向のヘラケズリが施されている。



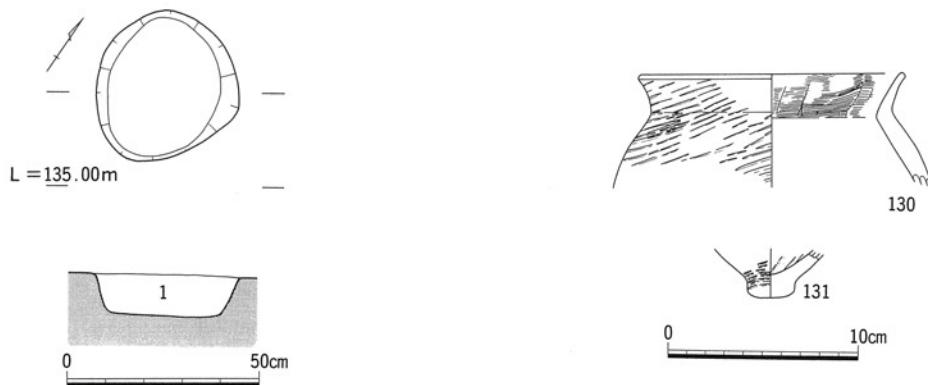
柱穴1 (SP1007) (第32図)

A-13グリッドで検出された柱穴で、ほぼ円形の平面形で、長軸約40cm・深さ約10cmを測る。

出土遺物 (第33図)

130は甕型土器で、口縁部は「く」の字状に屈曲する。外面にはタタキ痕が残り、内面にはハケメが認められる。131は壺型土器の底部で、突出したやや丸みをもつ底形態を呈する。外面にタタキが認められる。

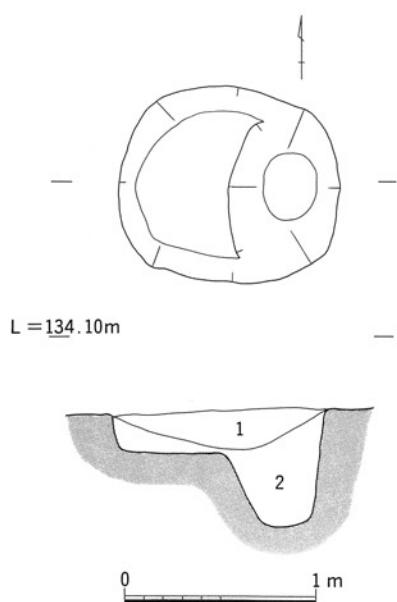
第31図 SD1002出土遺物実測図



1 暗褐色10YR3/3粘性砂質土

第32図 SP1007実測図

第33図 SP1007出土遺物実測図



1 暗褐色10YR3/4粘性砂質土
2 黄褐色10YR5/6粘性砂質土

第34図 SP1113実測図

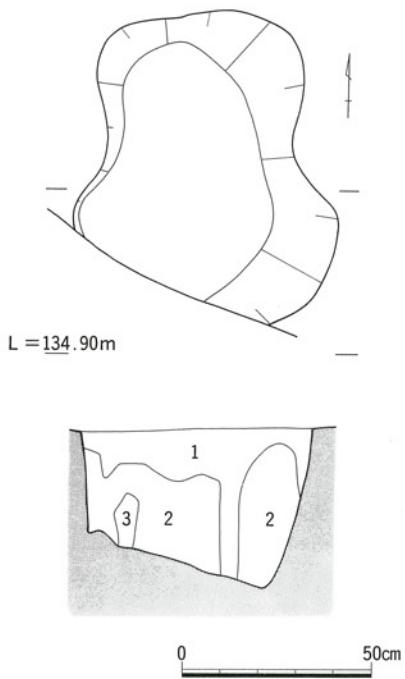
第35図 SP1113出土遺物実測図

柱穴 2 (SP1113) (第34図)

SB1006の北側、Q-11グリッドで検出された柱穴で、2段に掘り込まれている。平面形はほぼ円形で、長軸は約115cm・深さは東半の深いところで約60cmを測る。

出土遺物 (第35図)

132は甕型土器で、外反する口縁部に端部は擬凹線を施す。底部は平底を呈する。口縁部外面にユビオサエ痕、体部外面にタテハケ、内面下方にヘラケズリが認められる。



1 暗褐色10YR3/4粘性砂質土
2 黄褐色10YR5/6粘性砂質土
3 褐色10YR4/6粘性砂質土

第36図 SP1141実測図

柱穴 3 (SP1141) (第36図)

SB1006の東側、H-9グリッドで検出された。南端をSP1142に切られており、検出できた平面形は瓢箪形である。

出土遺物 (第37図)

133は甕型土器の底部で、平底を呈する。外面にハケメ痕が認められる。

不明遺構 1 (SX1001) (第38図)

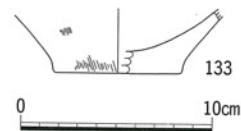
調査区南東部のI-1グリッドで検出された不整形な遺構である。弥生土器片とともに多量の礫が混入していた。

出土遺物 (第39図)

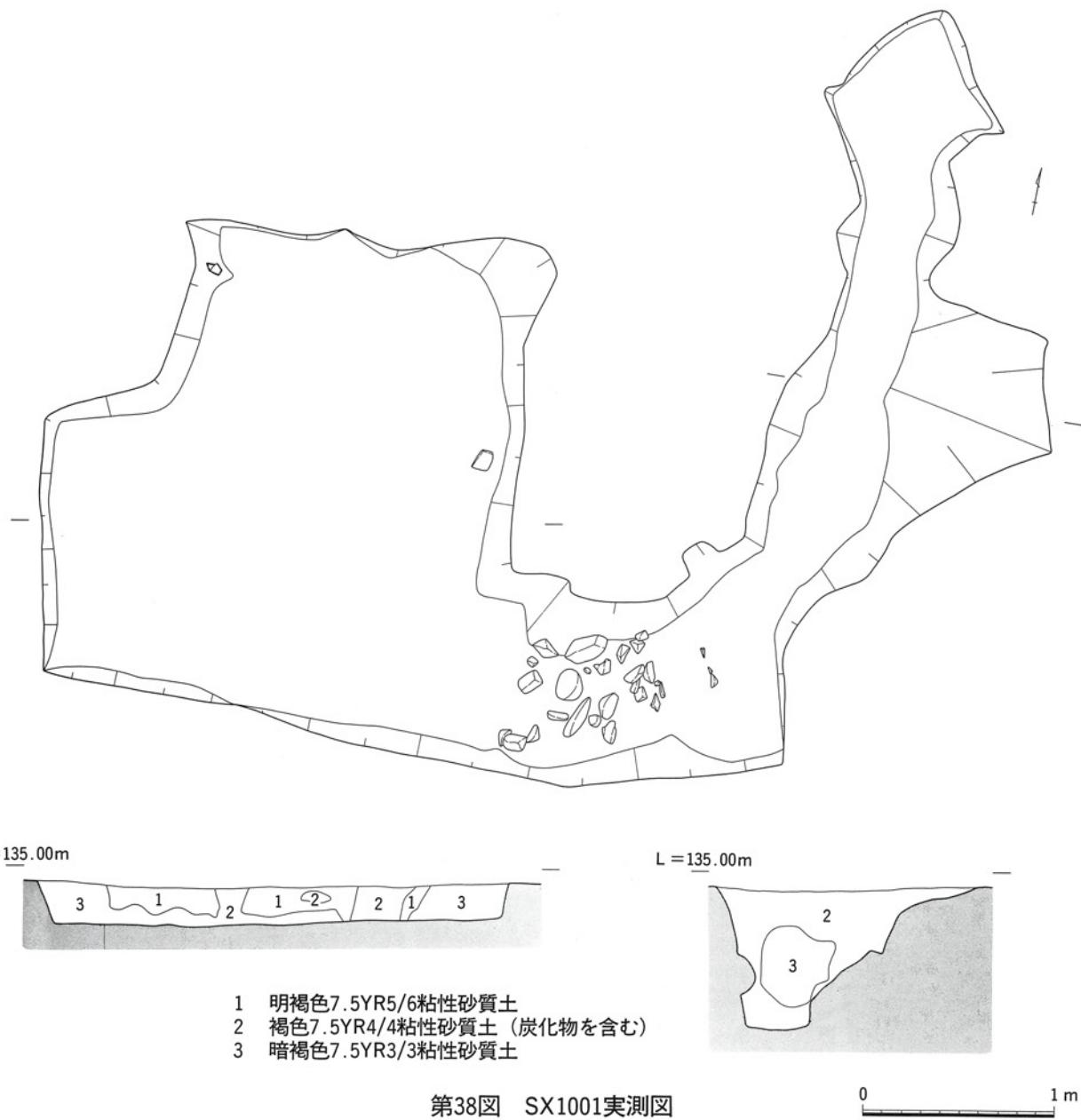
134～136は壺型土器または甕型土器の底部で、いずれも平底を呈する。また調整方法も外面はタテハケ、内面はヘラケズリである。137は直線的にたちあがる鉢型土器の口縁部で、端部に1条の凹線が施されている。138・139は「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ甕型土器で、ともに外面はタテハケ、内面はヘラケズリが認められる。

包含層遺物 (第40図～第44図)

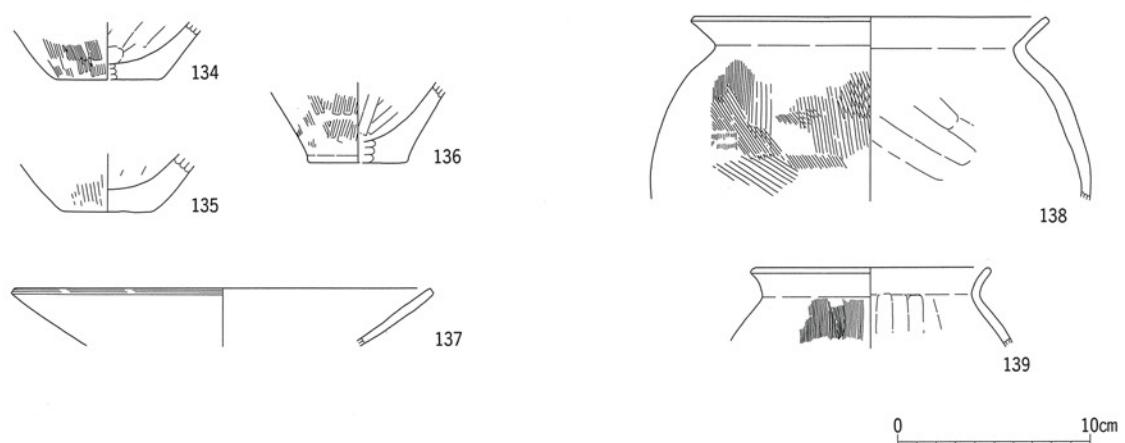
140～156は壺型土器である。140・141は外反する口縁部をもち、142は「く」の字状にたちあがる口縁



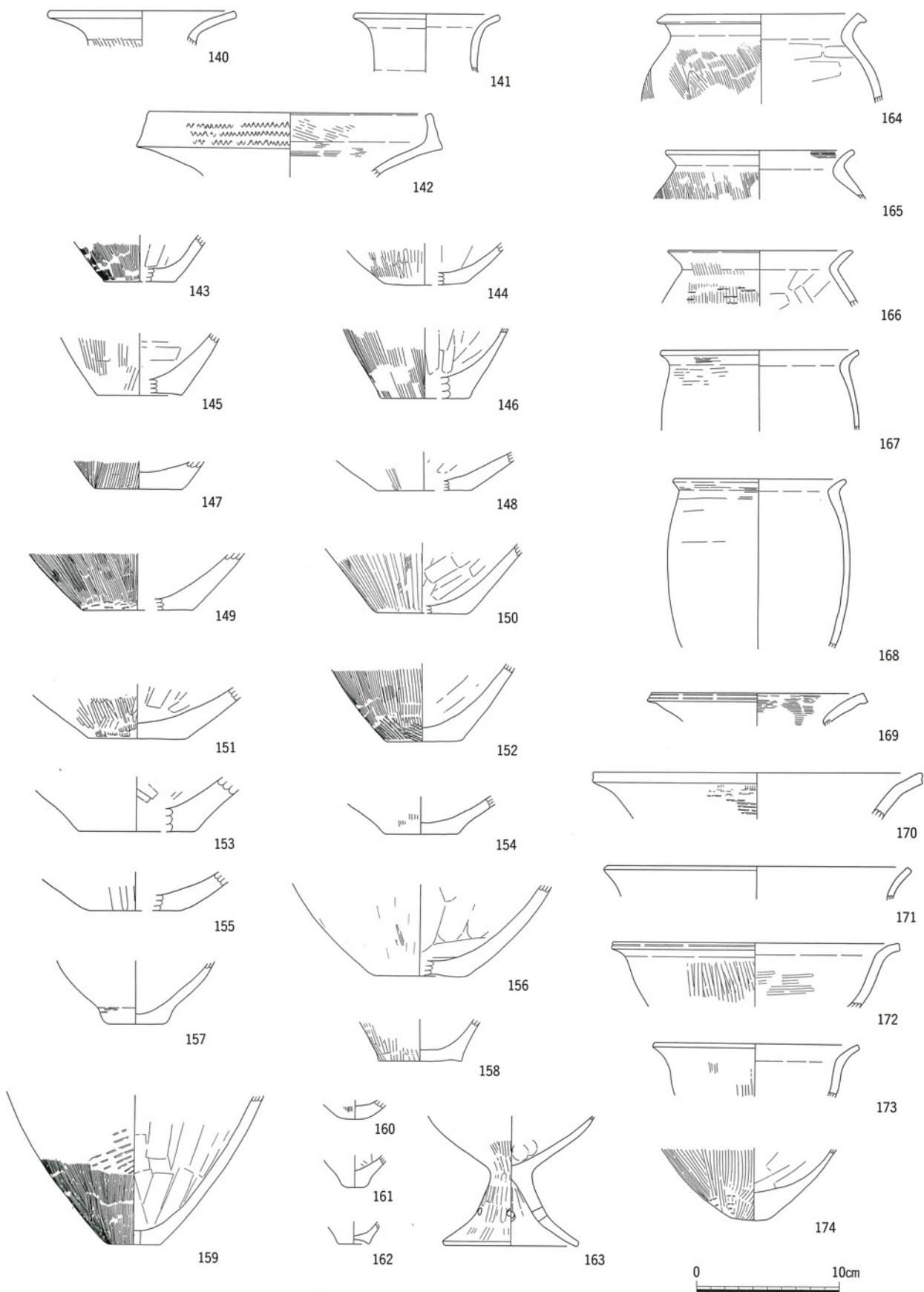
第37図 SP1141出土遺物実測図



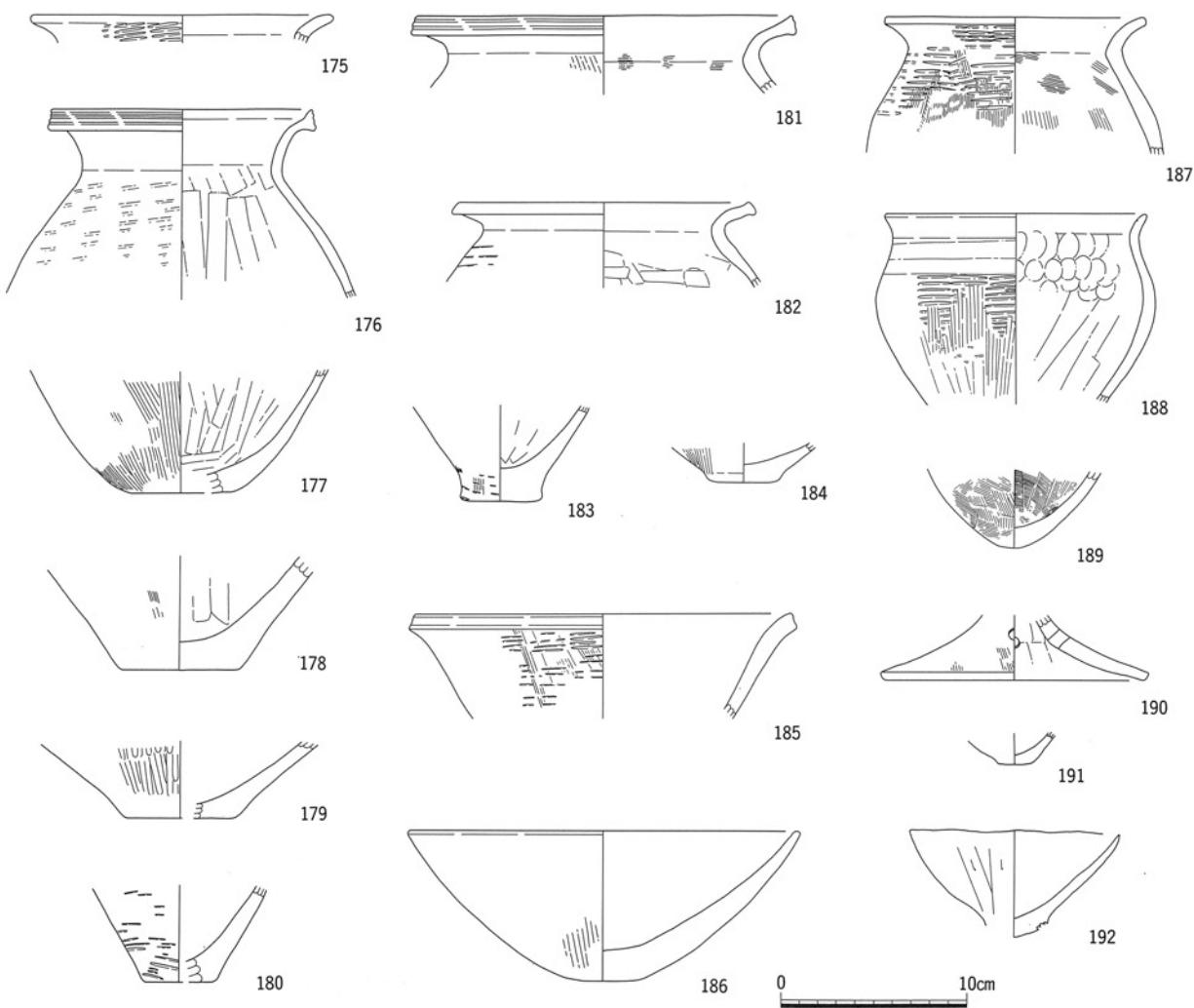
第38図 SX1001実測図



第39図 SX1001出土遺物実測図

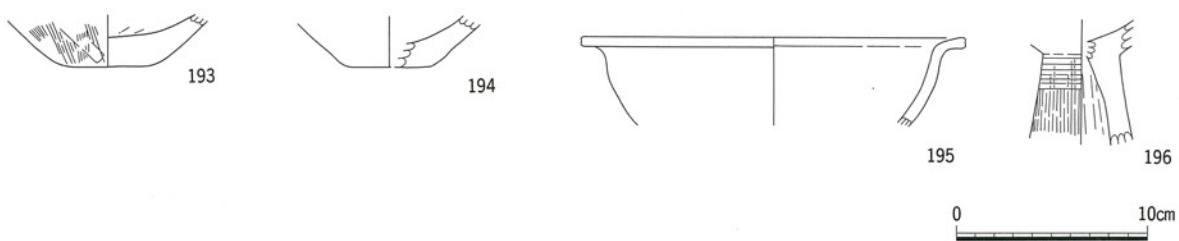


第40図 包含層出土遺物実測図 (1)

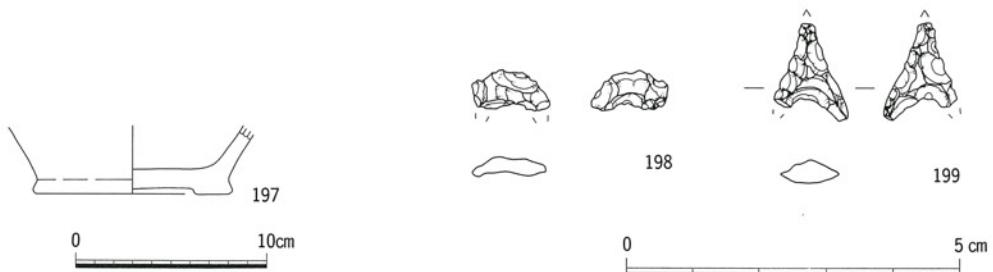


第41図 包含層出土遺物実測図 (2)

部である。142は口縁部外面に波状文が描かれている。内面にはハケメが認められる。143～156はいずれも底部であり、いずれも平底形態を呈する。調整技法も観察できるものは、外面タテハケ、内面ヘラケズリである。157・158は甕型土器の底部で、159は有孔鉢の底部である。底部中央に孔をもち、外面下方にタテハケ、その上部にタタキ、内面はヘラケズリが施されている。160～162はミニチュア土器の底部である。163は高杯で、杯部外面はヘラミガキとハケ、杯部内面はユビオサエ痕が認められる。脚部外面は上方ヘラケズリ、下方ハケメ、内面ヘラケズリである。164～169は甕型土器で、164は外反する頸部に端部を下方に拡張した口縁部をもつ。外面はハケメ、内面はヨコ方向のヘラケズリが施されている。165も外反する口縁部をもち、外面はタテハケが施されている。166も外反する口縁部に、外面タテハケ、内面ヘラケズリの体部をもつ。167・168は外反する口縁部にゆるやかに内彎する体部をもつ。169は端部を下方に拡張した口縁部で、端面に2条の凹線が施されている。170～174は鉢型土器で、170～173はいずれもゆるやかに外反する口縁部をもつ。170の外面にはタタキ痕が、172・173の外面にはハケメ痕、172の内面にはヨコ方向のヘラミガキが認められる。174は外面タテハケ、内面ヘラケズリの施された底部である。



第42図 包含層出土遺物実測図 (3)



第43図 包含層出土遺物実測図 (4)

第44図 包含層出土遺物実測図 (5)

175～181は壺型土器である。175は口縁端部のみの残存であるが、外面にタタキ痕が認められる。176はゆるやかに外反する頸部に端部を上下に拡張した口縁部をもつもので、端面には3条の凹線が認められる。また体部外面はタタキ後ナデ、内面はヘラケズリが施されている。177は平底を呈する底部で、外面はタテハケ、内面はヘラケズリが施されている。178も平底の底部で、外面タテハケ、内面ヘラケズリである。179も平底の底部で、外面にヘラミガキが認められる。180は外面にタタキ痕の認められる平底の底部である。181は広口長頸壺と思われる口縁部で、口径は20.0cmを測る。口縁端部には2条の凹線が施されている。182は甕型土器の口縁部で、端部はわずかに上下に拡張されている。体部外面はヨコ方向のタタキ、内面はヨコ方向のヘラケズリが見られる。183・184は平底を呈する底部である。185・186は鉢型土器で、185の口縁端部は平坦に仕上げられており、2条の凹線が認められる。また外面はタタキ痕が認められる。186は口径20.6cmを測るもので、外面下方にタテハケ痕が認められるほかはナデによる調整が施されている。187・188は甕型土器で、ともに外反した口縁部とタタキ痕の残る体部をもつ。188の内面は上方にユビオサエ、下方にヘラケズリが認められる。189は鉢型土器の底部で、丸底を呈する。190は高杯の脚部、191はミニチュア土器の底部、192は高杯の杯部である。192の外面にはヘラケズリが認められる。

193・194は壺型土器の底部である。ともに平底を呈している。195は口径20.0cmを測る鉢型土器で、口縁部はゆるやかに外反する。196は高杯の脚部である。外面はハケメ、内面はヘラケズリが施されている。197は深鉢の底部で、やや上げ底状を呈している。

198・199はサヌカイト片の石鎌で、ともに凹基無茎である。198は先端を欠損しており、残存部分は長さ1.6cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、重量0.39gである。199も先端基部を欠損しており、残存部分は長さ2.0cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重量0.61gである。

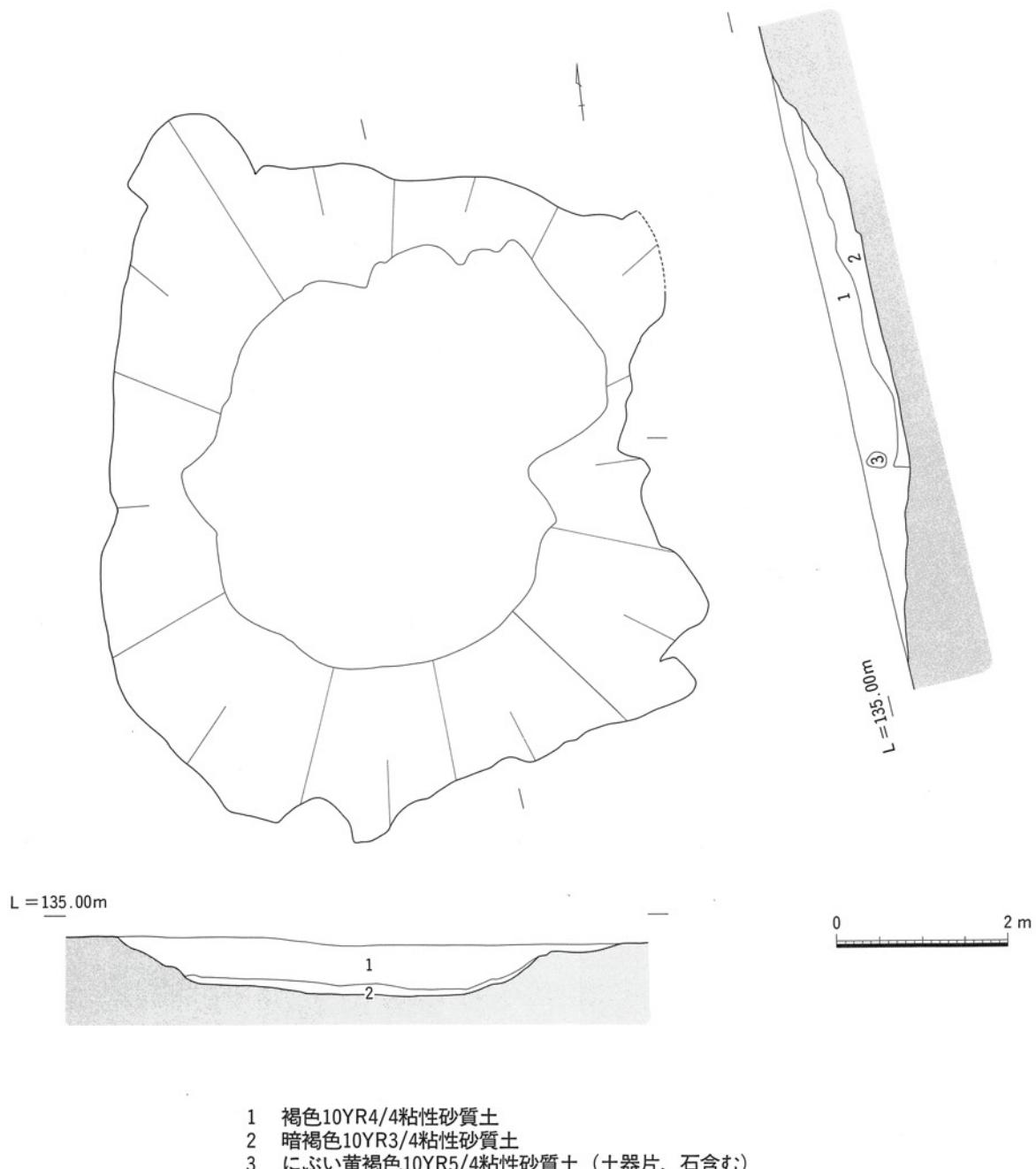
(2) 室町時代

柵列 (SG1001) (第3図 遺構配置図参照)

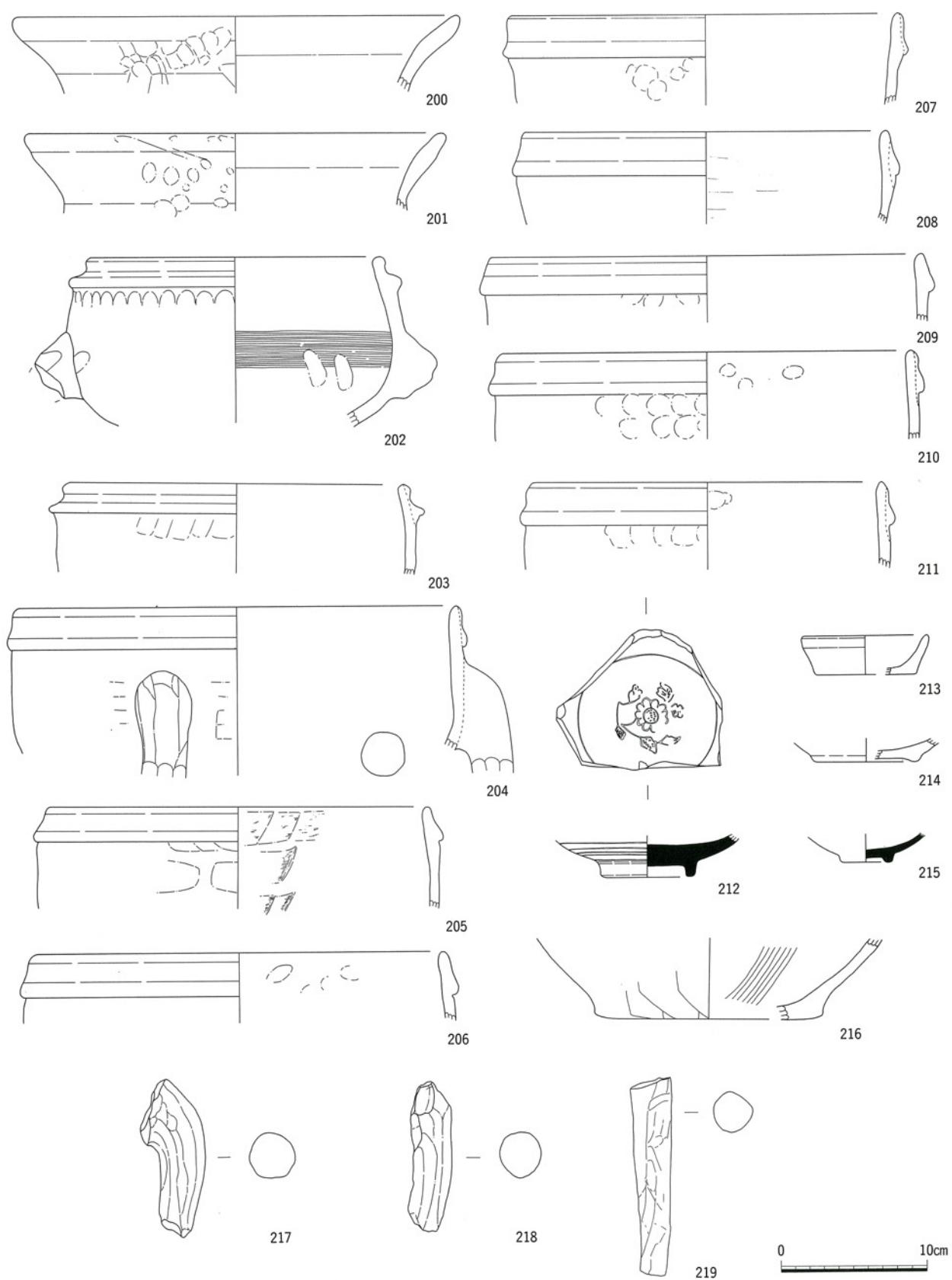
調査区東端で検出された10数基の柱穴から構成される南北方向の柵列である。室町時代、上野台地に構築されていたと伝えられる大西城に伴う遺構とも想定されるが、詳細については不詳である。

土坑1 (SK1001) (第45図)

調査区南東隅のJ・K-2・3グリッドで検出された不整形な大型の土坑である。南北方向には8mを越え、東西方向も6mに近い。深さは中央部で約60cmである。



第45図 SK1001実測図



第46図 SK1001出土遺物実測図

出土遺物（第46図）

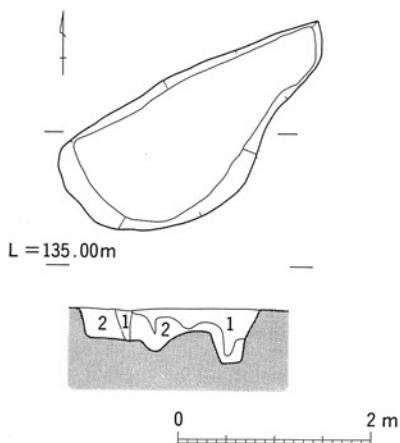
200～211は土師質の鍋または釜である。200・201は「く」の字状にやや外反する口縁部をもち、外面にはユビオサエが顕著に残る。202は口縁部直下に断面三角形の短い鍔がつく。欠損しているが、脚部も認められる。203からは体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものである。いずれも口縁部は肥厚しており、短い鍔の名残とも思われる。204は脚部の認められるものである。212は高台径6.0cmを測る龍泉窯系青磁碗の底部で、見込み部分にスタンプ印が認められる。213は口径8.4cm、214は底径7.4cmの土師質杯である。215は白磁碗の底部、216は土師質の擂鉢の底部である。217～219は土師質鍋の脚部で、219は特に煤の付着が顕著である。

土坑2（SK1018）（第47図）

SK1001の南側、J-1・2グリッドで検出された土坑で、南西-北東の主軸方向で、長軸は3mを越える。

出土遺物（第48図）

いずれも土師質の鍋または釜の口縁部である。220・221は「く」の字状に外反する。222～224は体部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がり、端部は肥厚する。いずれも外面にはユビオサエが顕著に残る。

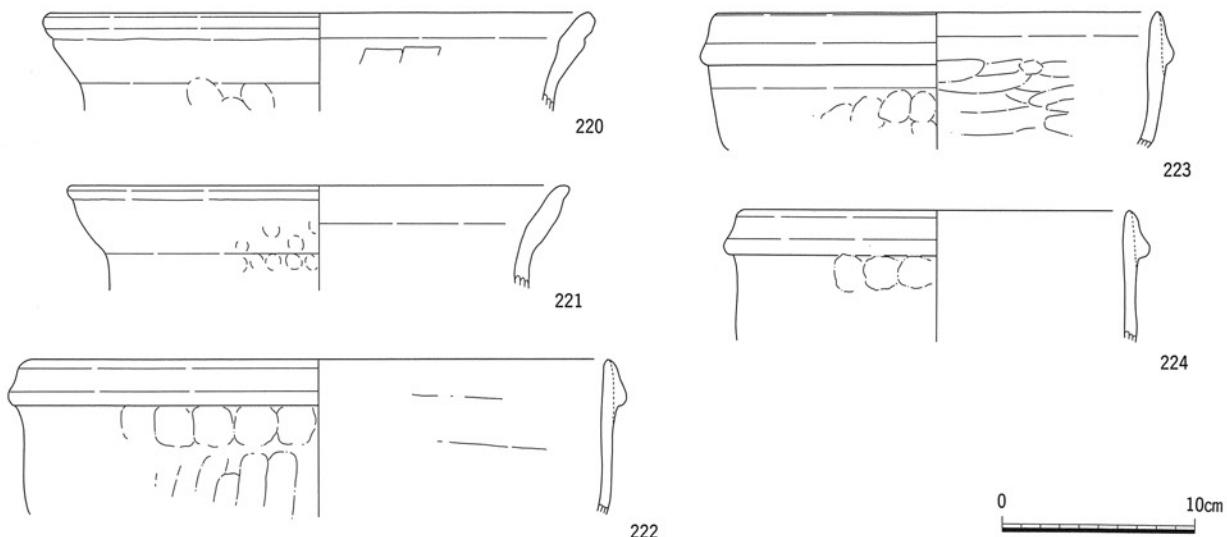


柱穴1（SP1217）（第49図）

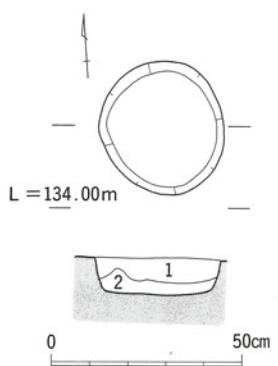
K-5グリッドで検出された柱穴で、SG1001のすぐ西側に位置する。平面形ほぼ円形で、直径約35cm・深さ約10cmである。褐色の埋土から土師質の杯が出土している。

1 褐色10YR4/4粘性砂質土
2 黄褐色10YR5/6粘性砂質土

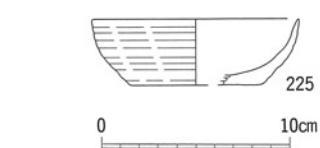
第47図 SK1018実測図



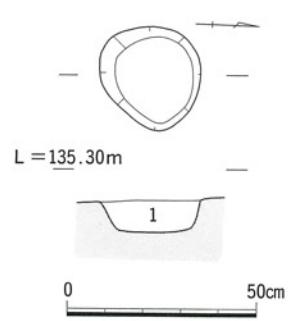
第48図 SK1018出土遺物実測図



第49図 SP1217実測図

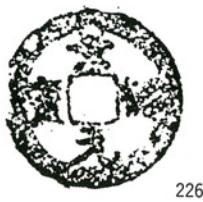


第50図 SP1217出土遺物実測図



1 褐色10YR4/4粘性砂質土

第51図 SP1218実測図



第52図 SP1218出土銅錢



1 褐色10YR4/6粘性砂質土
2 褐色10YR4/4粘性砂質土
3 褐色7.5YR4/6粘性砂質土

第53図 SP1221実測図

出土遺物（第50図）

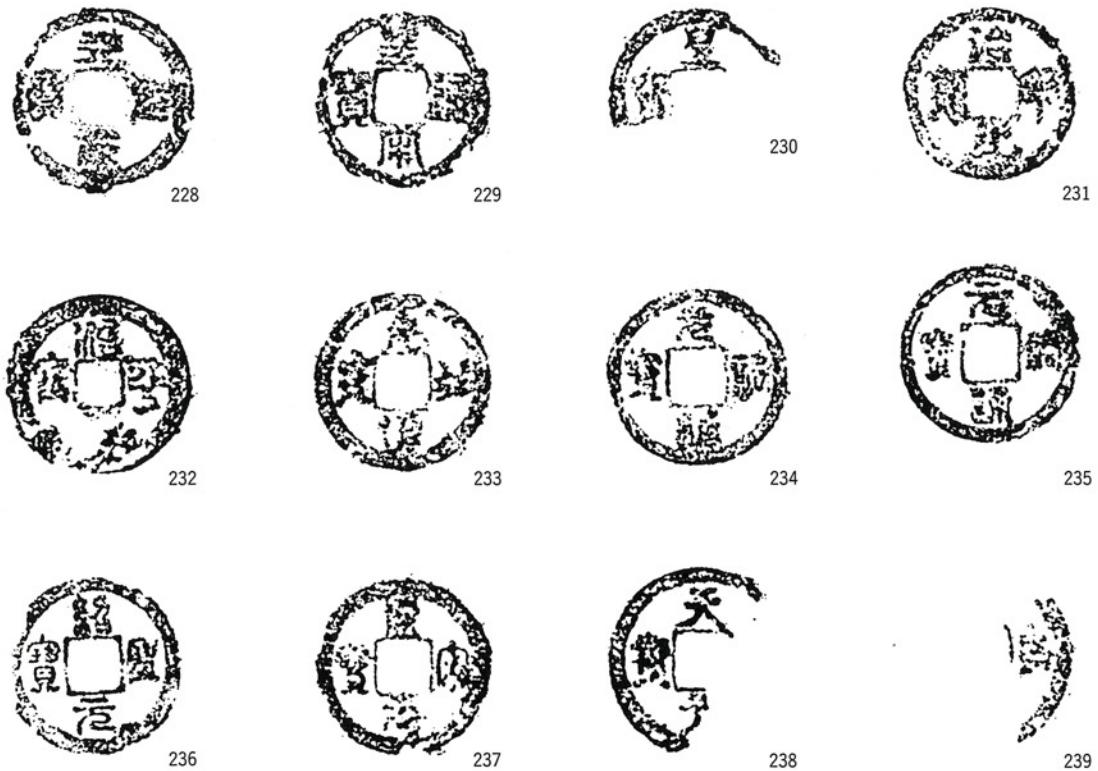
225は口径11.0cmを測る土師質の杯で、内彎みに立ち上がる体部の外面にナデによる調整痕が明瞭に残る。

柱穴2（SP1218）（第51図）

K-5グリッドで、SP1217のすぐ北側で隣り合うように検出された柱穴である。平面形ほぼ円形で直径約30cmを測り、3枚の銭貨が出土している。

出土遺物（第52図）

226は「景祐元宝」、227は「元豊通宝」である。227は2枚が鏽着した状態で、「元豊通宝」の下に付着している銭貨については銭名の判読はできていない。



第54図 SP1221出土銅錢

柱穴3 (SP1221) (第53図)

J-5グリッドで検出された柱穴で、直径約30cmのほぼ円形の平面形をもつ遺構である。SG1001の西側に位置し、12枚の銭貨が出土した。同じく銭貨が出土しているSP1218などとあわせて、SG1001の西側に何らかの構造物のあったことを想定すべきかも知れないが、今のところ不詳である。

出土遺物 (第54図)

228は「天聖元宝」、229は「皇宋通宝」、230は欠損しており「皇□□宝」しか見えないが、229同様「皇宋通宝」である。231は「治平元宝」、232は「熙寧元宝」、233~235は「元祐通宝」、236は「紹聖元宝」、237は「聖宋元宝」である。238・239は欠損しており、銭種は不明である。238は「天□□宝」と判読できるが銭種の特定はできない。

(注)

- (1) 岡本健児 1974 「弥生土器—四国5—」『考古学ジャーナル』93号

IV ま と め

2年間にわたる調査によって、弥生時代後期から終末期にかけてと、室町時代の2時期の遺物が出土した。

まず、弥生時代に関わるものとしては、かつて岡本健児氏によって上野式と命名された土器群⁽¹⁾が検出された。口縁端部に鋸歯文を施した広口壺に象徴される上野式土器は、考察でも述べるように吉備・讃岐との関係を抜きにして考えることのできないものであり、より広域的な交流の歴史を考えていかなければならぬであろう。

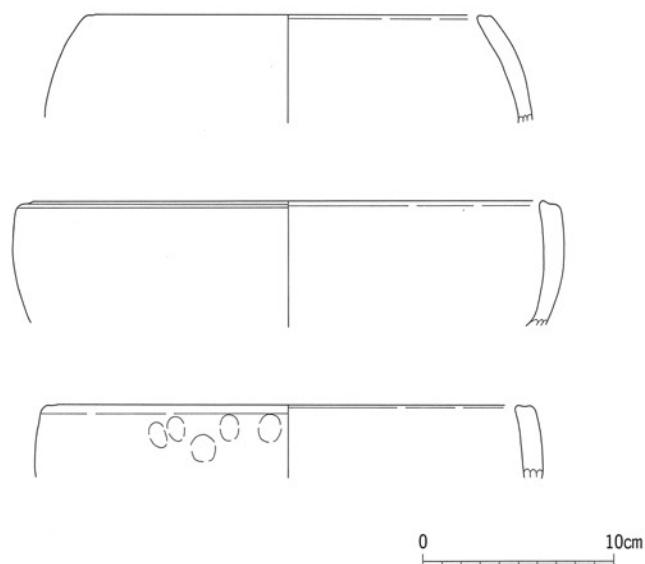
また、弥生時代の遺構で注目される点は、吉野川上流域で検出された竪穴住居址のなかにあって直径10mを越える大型のものが目立つことである。

一方、大西城が上野台地の東端に築かれたことを象徴するかのように室町時代の遺構・遺物が出土している。大西城は、現在の池田幼稚園の発掘調査によって石垣が検出されているが⁽²⁾、その構築技法より織豊期以降のものであると考えられる。今回の調査では調査区の東端から棚列(SG1001)が検出され、大西城との関わりが想定される遺構として注目される。またSG1001の西側からは銭貨の埋納された柱穴群が検出されており、ここに何らかの構造物の存在したことが想定される。

遺物としては、土坑群より出土した土師質鍋群が注目される。口縁部を「く」の字状に外反させるものと、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものに類別できるが、口縁部を内彎ぎみにおさめる阿波南方の鍋（第55図）とは様相を異にする吉野川上流域特有の煮沸具と見ることもできよう。

いずれにせよ、弥生時代・室町時代に関わらず、これまで吉野川上流域での調査事例が乏しかったこと、しかも少ない調査事例のその多くが調査報告書の刊行にまで至っていないこともあって土器様相が必ずしも明らかではなかった。それが、現在四国縦貫道の建設に伴って大規模な発掘調査が進められており、いずれそれらの整理作業が進めば吉野川上流域の土器様相も具体的になっていくものと期待される。

したがって、本報告書では吉野川上流域での様相の一端を示し得たにすぎず、今後の成果に期待しなければならない。



第55図 立善寺跡遺跡出土土師質鍋実測図
(石尾1997より)

(注)

- (1) 岡本健児「弥生土器－四国 5－」『考古学ジャーナル』93号 1974
- (2) 池田城跡発掘調査団編『池田城跡発掘調査報告書』 徳島県池田町教育委員会 1979

(参考文献)

石尾 和仁 1997 『立善寺跡遺跡－阿南工業高校電子機械科第2棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター

V 考 察

鋸歯文土器の分布と上野式土器

1 はじめに

吉野川上流域にあたる三好郡内については、これまで調査事例が必ずしも多くはなく、したがてまとまった形での弥生土器に関する研究成果には乏しい。大正時代の旧制池田中学校建設に際して出土した遺物をもとに「上野式」として整理された岡本健児氏の成果や次に紹介する菅原康夫氏の成果がある程度であり、いくつか行われた発掘調査についてもその調査報告書の刊行は進んでいない状況にある。近年は四国縦貫自動車道の建設に伴う大規模調査が数多くなされており、今後それらの整理作業が進展することによって多くの成果が公けにされるものと思われる。

なお、菅原康夫氏は、吉野川下流域の、いわゆる東阿波型土器群の広がる文化圏と対比する形で上流域の三好郡を中心とした地域における弥生時代終末期の文化相を検討され、次のように指摘されている⁽¹⁾。

吉野川下流域は、胎土中に結晶片岩粗粒を含み、叩き目を細かいハケで消す技法によって作られた壺形土器・甕形土器に特徴を有する。また内面は上半ユビオサエ、下半にケズリを施す。なお、広口壺形土器は畿内周辺に搬出されていたことも指摘されている⁽²⁾。そして、東阿波型土器の成立する段階に、胎土中に金雲母・黒雲母を含む硬質の土器が出土するが、これらは讃岐系であると考えられている。

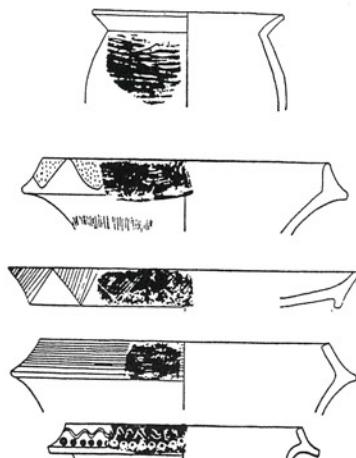
これに対し、吉野川上流域においては、東阿波型壺に見られるような口縁端部のつまみ上げはほとんど認められず、ケズリも粗い場合が多い。V様式後半（上野II式）の段階の甕形土器は水平タタキをもち、丸みをもった平底が多いと指摘されている。

また、あわせて弧帶文の施された土器の検討を通して吉備型祭式の阿讚地域への波及についても言及され、吉野川下流域である鳴門市大麻町の萩原墳墓群には変容した吉備型祭祀の様相がうかがえるのに対して、上流域の三好町足代の足代東原遺跡積石墓群は「壺・甕を主体とするもので、在地性の強い土器群による祭祀」であったと指摘し、吉備の影響が阿波の社会全体に及んだわけではないと述べられている⁽³⁾。

小稿では以上のような菅原氏の成果に学びつつ、ウエノ遺跡の置かれた歴史的位置を確認する作業として、当遺跡から出土した鋸歯文土器を中心に当該期の社会状況を概観してみたい。

2 いわゆる「上野式土器」について

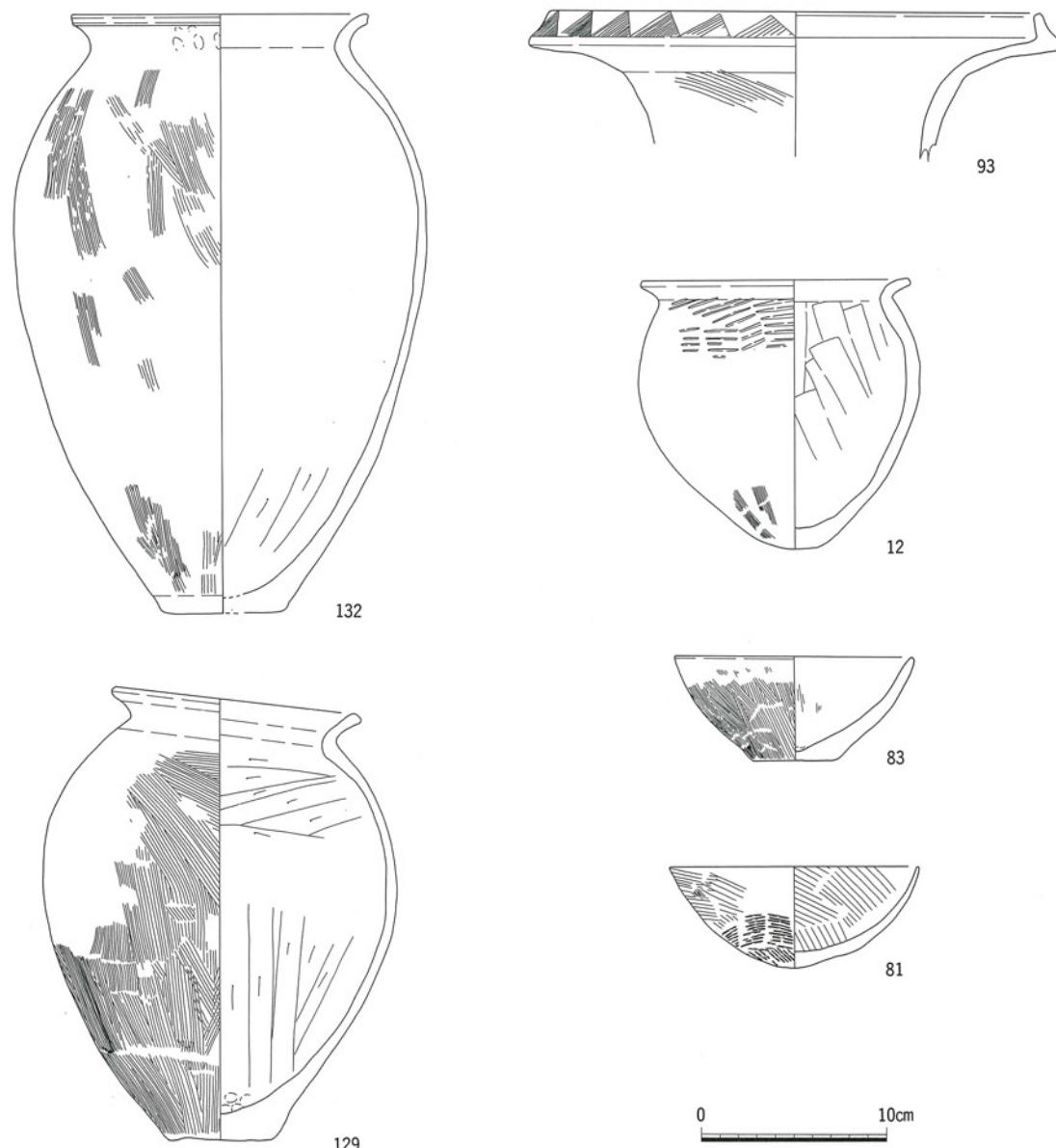
池田町上野台地では、大正10年(1921)～11年(1922)にかけて旧制池田中学校が建設された際に、岡本健児氏が岡山県笠岡市の津雲貝塚出土の津雲A式に比定されるとした縄文時代後期中葉の土器と並んで⁽⁴⁾、同じ



第56図 上野式土器実測図
(注5 岡本論文より)

く岡本氏が「上野式」として整理された弥生時代後期から末期にかけての遺物が出土した（第56図）⁽⁵⁾。

岡本健児氏は「上野I式」「上野II式」について次のように整理されている。「上野I式」について、「壺は胴部に垂直の短い頸部のついたもので、口縁は外反する。口縁端は、かなり拡張され、凹線が三～四条つけられている。この凹線上と上胴部に竹管文を押した円形浮文がある。口縁端に凹線が一条で頸部と胴部の境に刺突文のあるものもある。甕は、胴の張った「く」の字の頸部をもち、口縁端に二条の沈線を持つ、口縁端に沈線を持たないものもある」と指摘されている。一方、「上野II式」については、「壺は、二重口頸のものが主体で、その施文部にゆるやかな波状文のなす三角形状のところに刺突文、櫛描直線を配したものやそのほかに波状文と竹管文を配したもの、三角形を描きそのなかに斜線文を入れたもの、あるいはただの直線文を描いたものなど各種の文様が見られる。甕は、するどい「く」の字

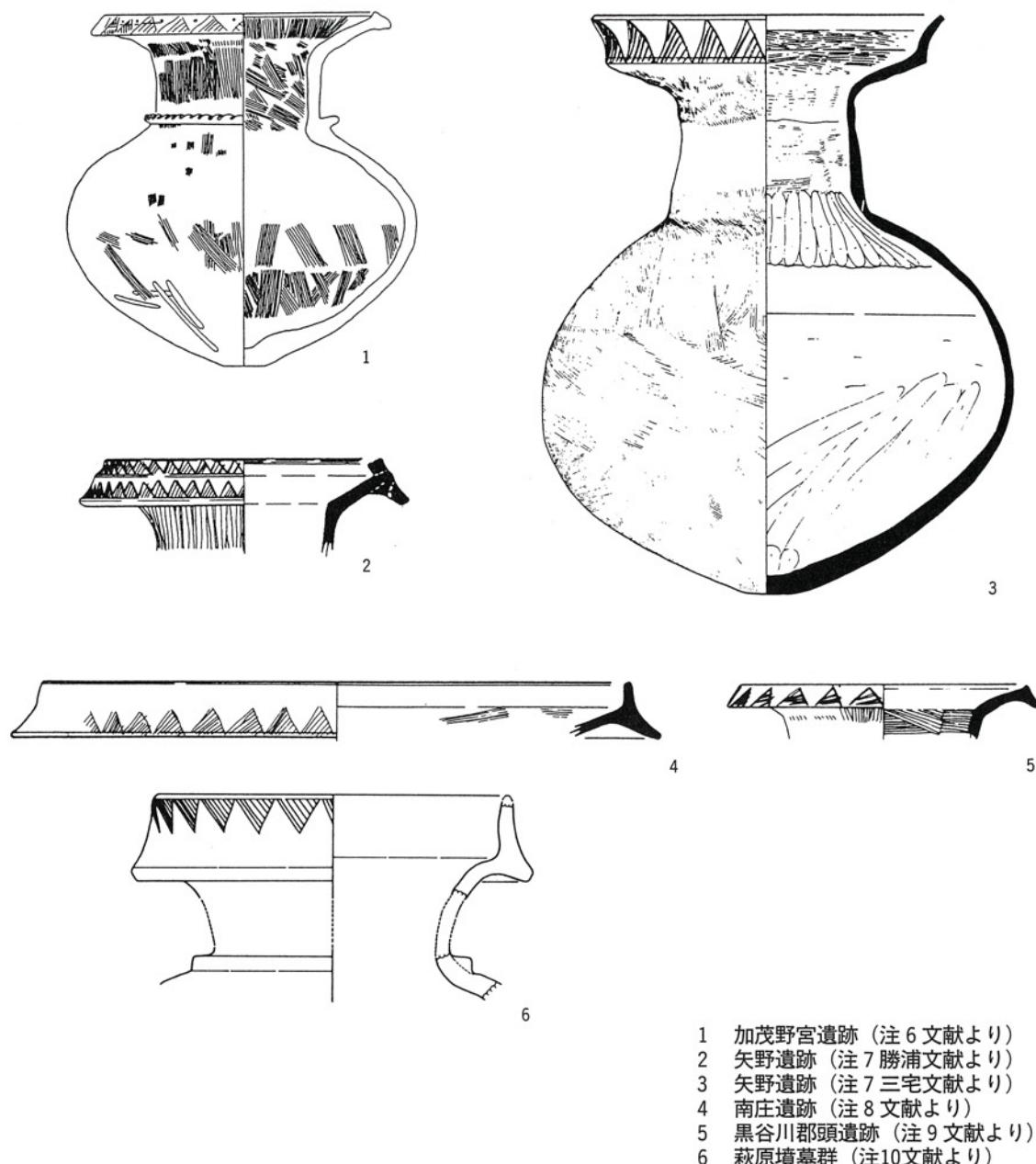


第57図 ウエノ遺跡出土弥生土器

状の頸部をなし、やや胴の張ったものでたたき目痕がある。高壺には壺に稜があり、脚台の裾の張ったものである。壺・甕の底には丸みを持った平底が多い」と指摘される。

この指摘を踏まえつつ、池田警察署新築工事に伴う当遺跡（ウエノ遺跡）から出土した弥生時代後期から終末期の土器のいくつかを概観すると、第57図93のように、口縁端部に鋸歯文をもつもの、するどい「く」の字状の頸部をもつ129など、岡本氏が分類に活用された旧制池田中学校出土弥生土器との共通点が看取される。

それでは、このようないわゆる「上野式」の弥生土器が周辺のどの地域・遺跡から出土しているのか



第58図 徳島県内出土の鋸歯文土器

を概観してみよう。こうした作業を通して弥生時代後期から終末期にかけての吉野川上流域における文化相を把握していく材料を提供することができるであろう。ただし、「はじめに」でも記したように三好郡内の成果がこれまでに決して多いとはいえない状況下にあり、十分な検討は今後に委ねなければならない。そこで小稿では「はじめに」でも記したように鋸歯文土器の広がりを確認することによって、その一端を垣間見ることにしたい。

3 徳島県出土の鋸歯文土器とその時期

徳島県内での鋸歯文土器の出土については、ウエノ遺跡の他、同じ吉野川上流域の加茂野宮遺跡⁽⁶⁾、そして下流域の矢野遺跡⁽⁷⁾や南庄遺跡⁽⁸⁾・黒谷川郡頭遺跡⁽⁹⁾の事例、さらに「はじめに」でも記したように菅原康夫氏によって変容した形の吉備型祭式が伝播したとされる鳴門市大麻町の萩原墳墓群⁽¹⁰⁾でも出土が報告されている（第58図）。

ウエノ遺跡についてはすでにふれているように弥生時代後半に相当する土器群とともに出土している。加茂野宮遺跡のものも弥生時代後半、矢野遺跡も吉備産甕・吉備産把手付鉢・讃岐産高壺などの搬入土器が多数を占める弥生時代後葉の住居址からの出土である。同じく黒谷川郡頭遺跡出土の鋸歯文土器も弥生時代後半から庄内併行に限定される時期のものであり、萩原墳墓群の事例とあわせて、徳島県内における鋸歯文土器の出現期は弥生時代後期（とくに後半）の時期であると想定される。

4 鋸歯文土器の分布

前節で徳島県内の事例を示したが、その他県外の事例を収集すると以下のようなものが知られる。

まず第一に挙げなければならないものに、古墳時代の埴輪に系譜的につながると捉えられる特殊器台形土器・特殊壺形土器の事例がある⁽¹¹⁾。第59図は岡山県内の矢掛町芋岡山遺跡⁽¹²⁾・真備町黒宮遺跡⁽¹³⁾・落合町中山遺跡⁽¹⁴⁾から出土したもので、いずれも弥生時代後期の墳丘墓から出土したものである。その他、主なものを摘記する。

・百間川原尾島遺跡（岡山市）⁽¹⁵⁾

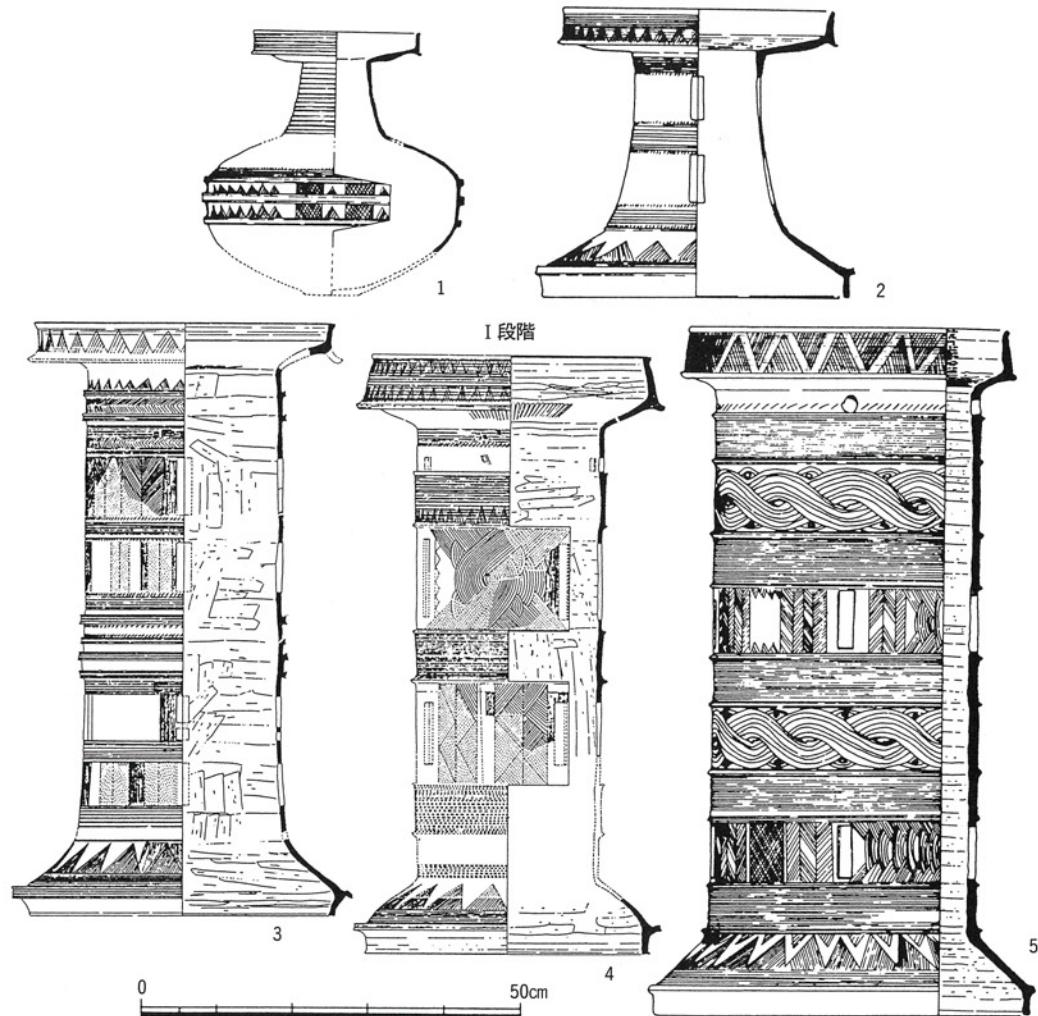
岡山市原尾島に所在する百間川原尾島遺跡は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴って調査されたもので、百間川河川敷に位置する。百間川は岡山城下への流水量を緩和するため藩政期に掘削されたものといわれている。第60図～第62図に示した9点の鋸歯文土器は井戸や土壙などから出土したもので、弥生時代後期に相当する百間川後期II～III期頃に年代比定される遺物群である。

・百間川兼基遺跡（岡山市）⁽¹⁶⁾

岡山市兼基に所在する百間川兼基遺跡も、先述の百間川原尾島遺跡と同様、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い調査されたものである。弥生時代から中世にわたる遺構を検出しているが、弥生時代後期に比定される溝（第63図1）や祭祀が執り行われたのではないかと考えられている土器溜まりから弥生時代後期の土器とともに第63図2・3の鋸歯文土器が出土している。

・津寺遺跡（岡山市）⁽¹⁷⁾

岡山市津寺の足守川左岸に所在する津寺遺跡は山陽自動車道建設に伴い調査されたもので、弥生～近



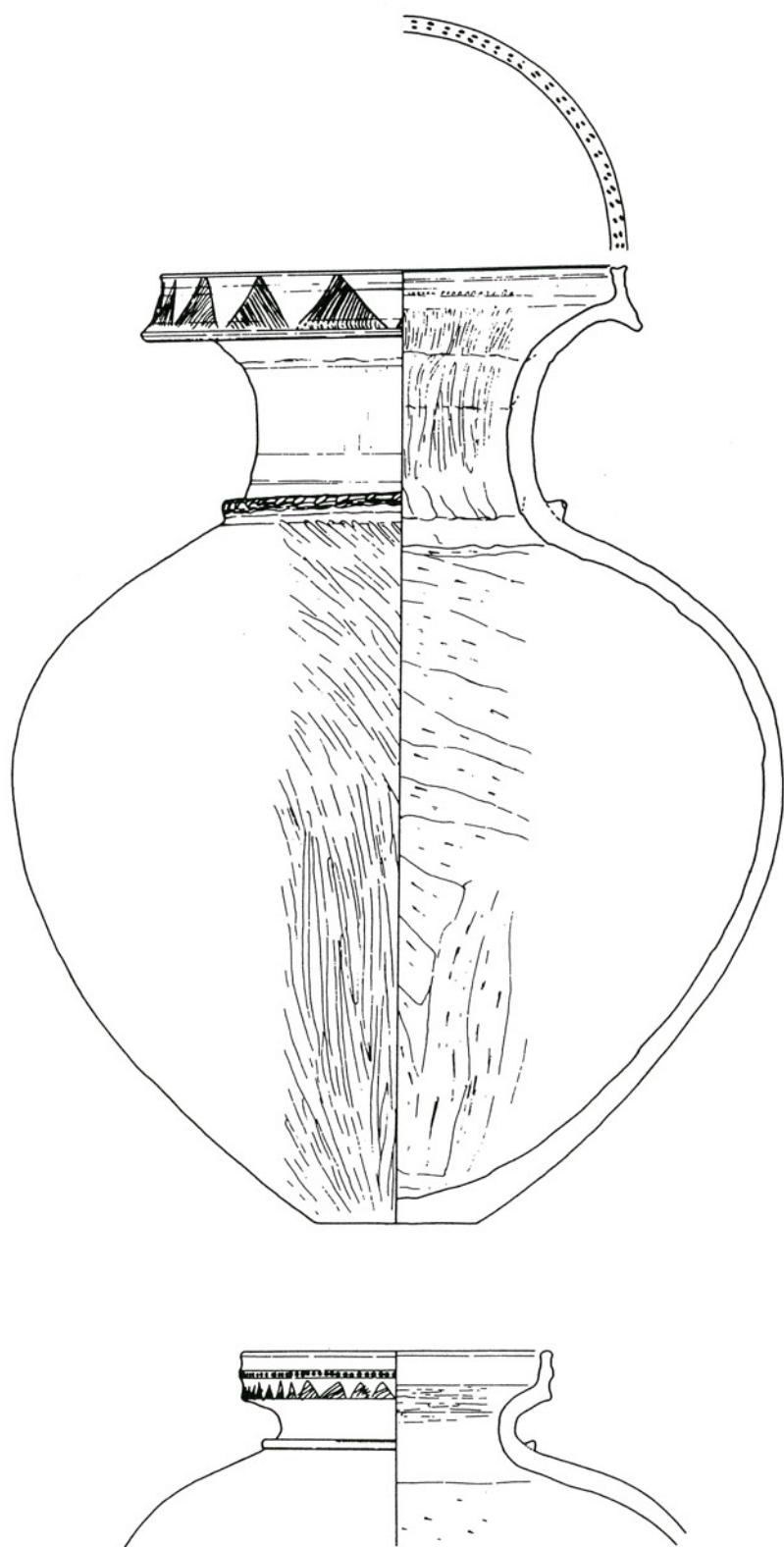
1・2 芋岡山遺跡 3・4 黒宮遺跡 5 中山遺跡

第59図 特殊器台実測図（藤田・柳瀬1987より）

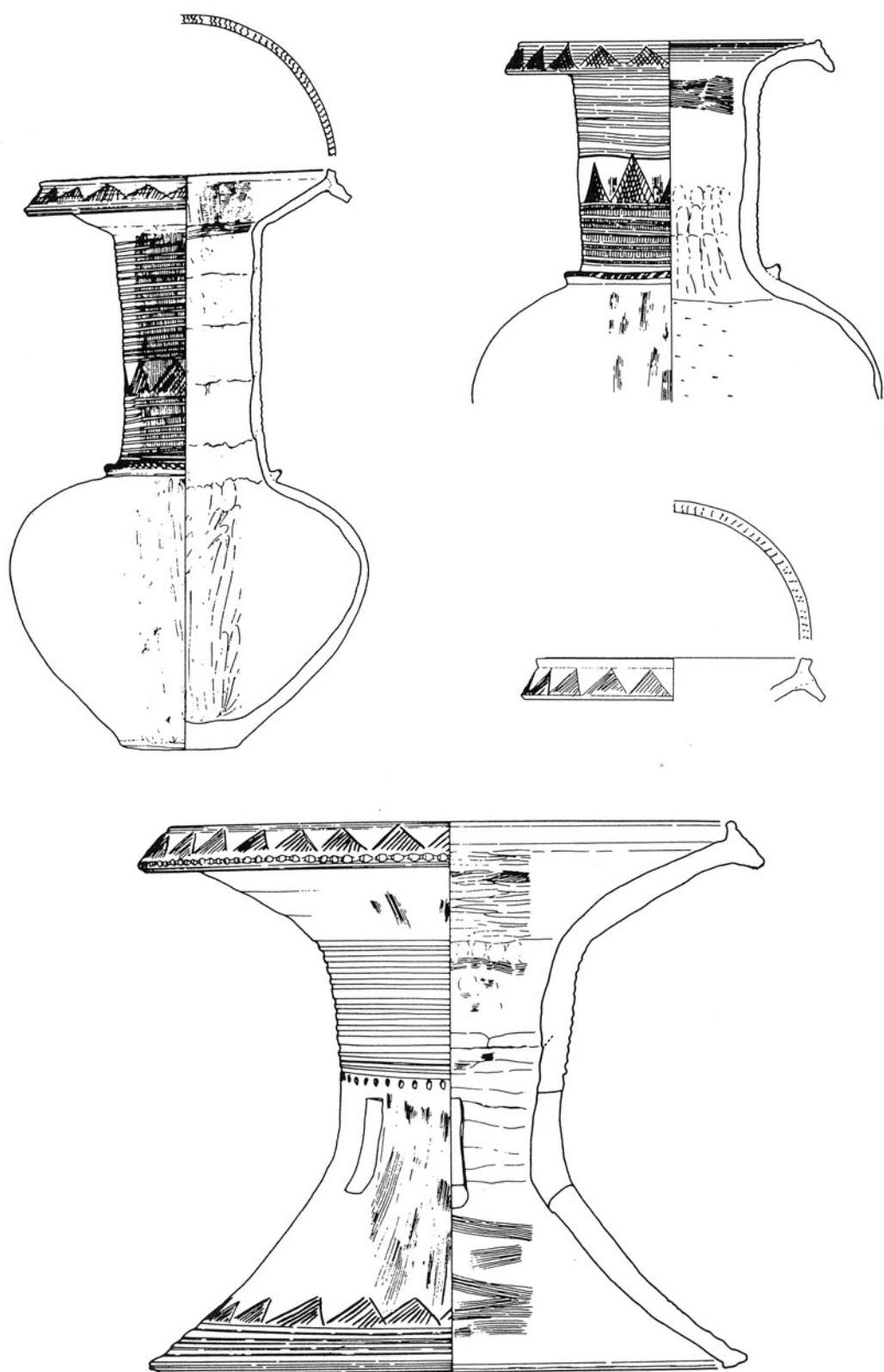
世にわたる複合遺跡である。このうち、弥生時代後期の袋状土壙より鋸歯文を施した短頸壺(第63図5)が出土している他、包含層からも鋸歯文土器の出土が報告されている(第63図4・6)。

・みそのお遺跡(岡山県御津町)⁽¹⁸⁾

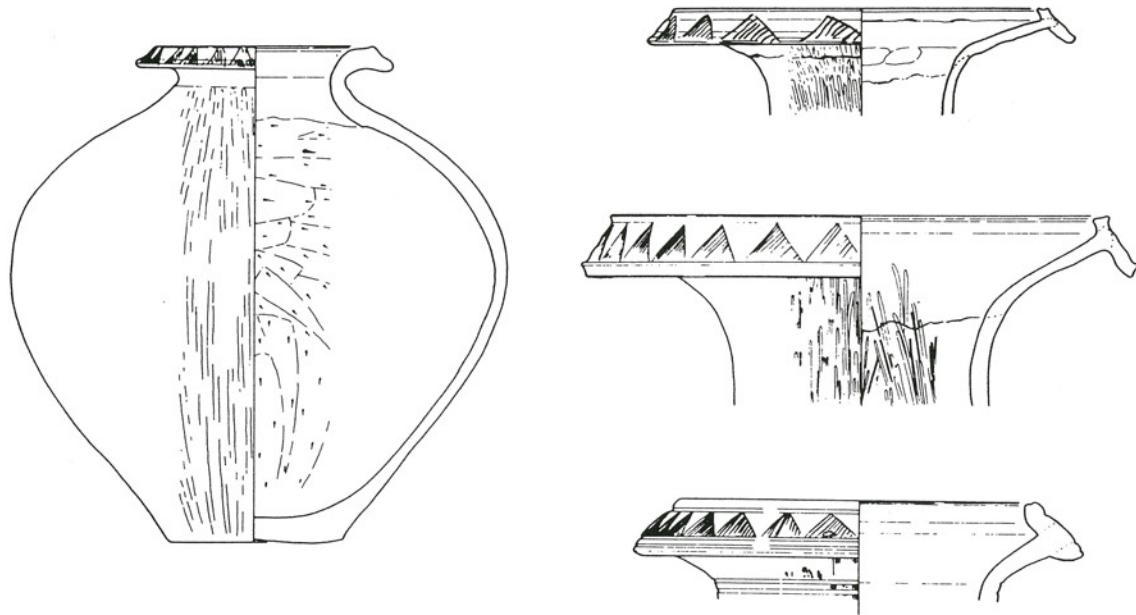
旭川中流域の山間部に位置する岡山県御津郡御津町高津に所在するみそのお遺跡は、「みその古墳群」として周知されていた尾根上に立地する。県営御津工業団地造成工事に伴い調査されたもので、弥生時代の墳墓や製鉄遺構もあわせて検出されたことから遺跡名の変更がなされたものである。第64図2は木棺を納めていたと考えられる6基の墓壙で構成される26号墳墓から、また第64図3・第65図1~5は同じく木棺を納めていたと考えられる15基以上の墓壙で構成される27号墳墓からそれぞれ出土した鋸歯文土器である。その他、いくつかの墳墓からも鋸歯文土器の出土が報告されている(第64図1~29号



第60図 鋸齒文土器の類例 (1)
(百間川原尾島遺跡 その1)



第61図 鋸歯文土器の類例 (2)
(百間川原尾島遺跡 その2)



第62図 鋸歯文土器の類例 (3)
(百間川原尾島遺跡 その3)

墳墓、4—24号墳墓)。

・前山遺跡（岡山県山手村）⁽¹⁹⁾

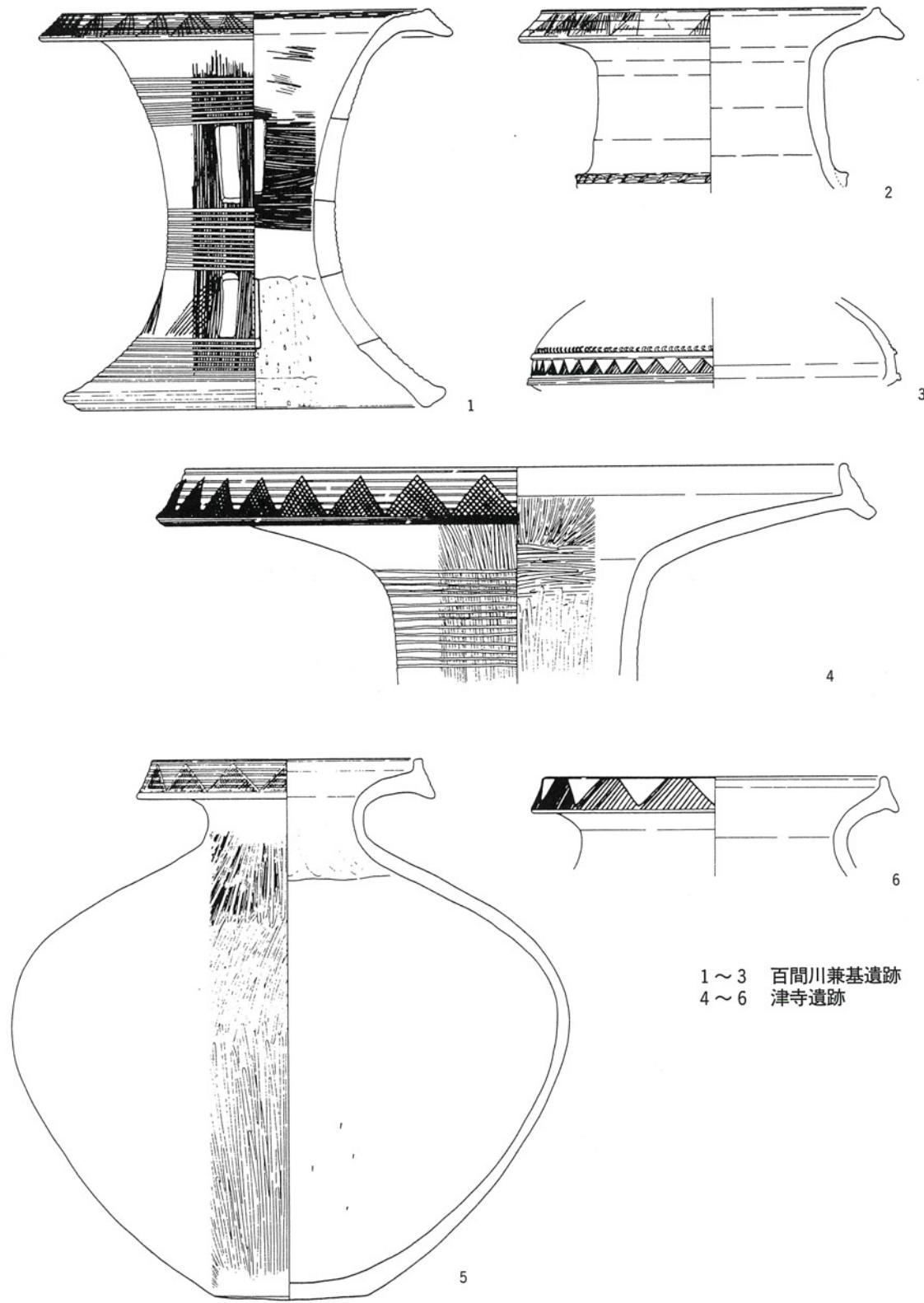
岡山県都窪郡山手村に所在する前山遺跡は国道429号線改良工事に伴って調査されたもので、備中国分寺跡やこうもり塚古墳などのある総社平野の南縁、狸岩山の北麓に位置する。当遺跡からも鋸歯文土器の出土が報告されている（第66図1～3）。

・川津一ノ又遺跡（香川県坂出市）⁽²⁰⁾

坂出市川津町一ノ又に所在する川津一ノ又遺跡は、大東川改修事業に伴って調査されたもので、弥生時代から中世にわたる遺構が検出されている。第66図4は弥生時代中期のものと想定されている溝出土のもの、5は自然河道から出土したものである。この自然河道も弥生土器が出土遺物のほとんど大部分を占めている。また、同様の地理的環境にある川津元結木遺跡や下川津遺跡でも鋸歯文土器の出土が報告されている⁽²¹⁾。

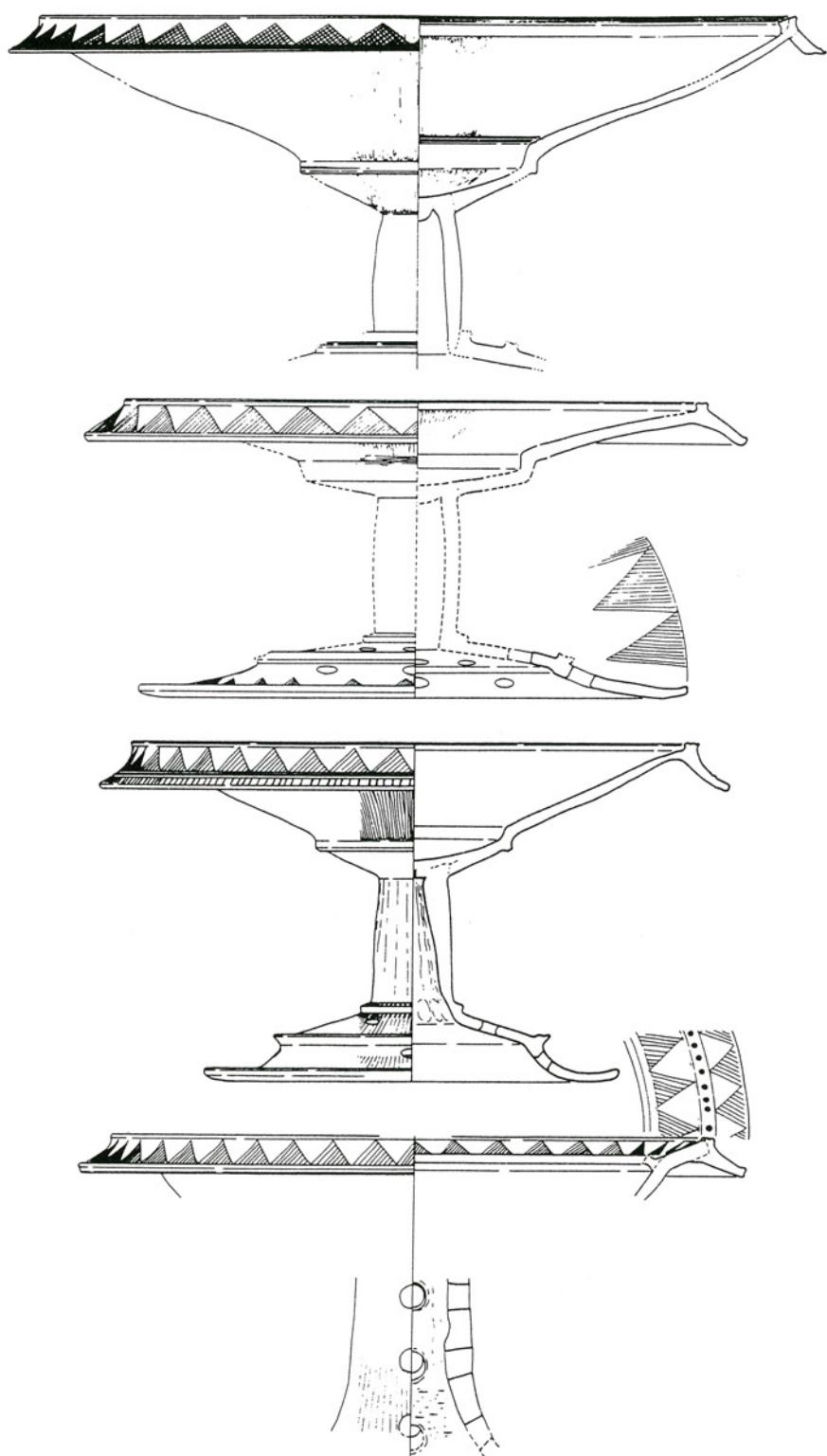
・谷町筋遺跡（兵庫県西淡町）⁽²²⁾

西淡町志知鉄に所在する谷町筋遺跡は山麓から張り出してくる台地の末端から沖積地にかけて位置する。本四連絡橋明石鳴門ルート建設工事の淡路縦貫自動車道建設に伴って調査されたもので、主に古墳時代前期と室町時代の遺構が検出されている。特に室町時代の大型建物を中心として、その周囲に小規

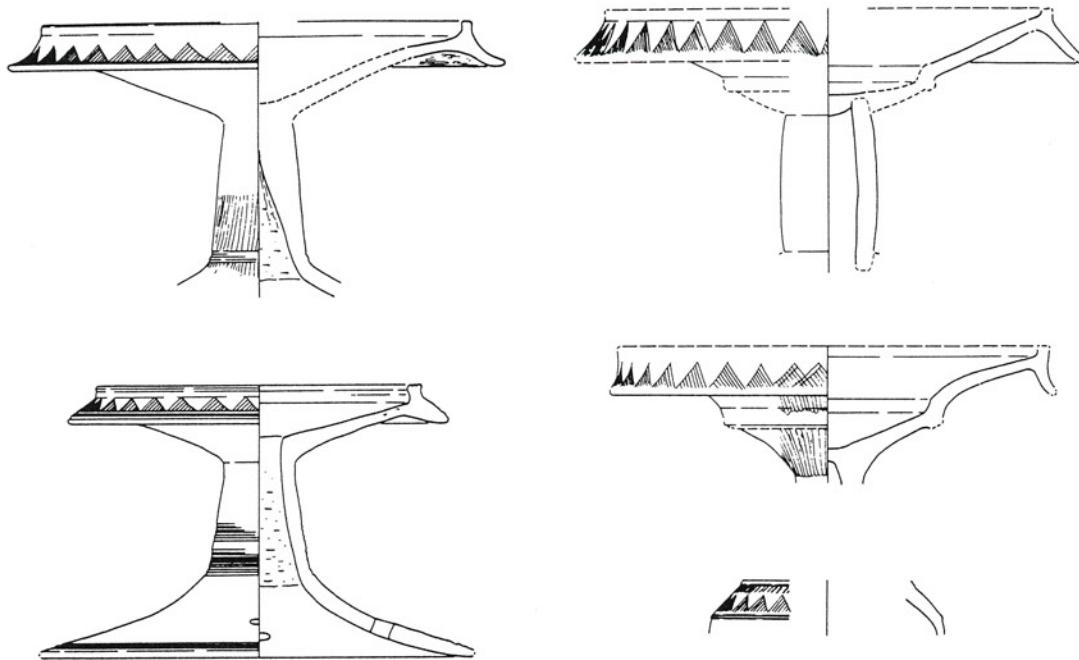


1～3 百間川兼基遺跡
4～6 津寺遺跡

第63図 鋸歯文土器の類例 (4)



第64図 鋸齒文土器の類例 (5)
(みそのお遺跡 その1)



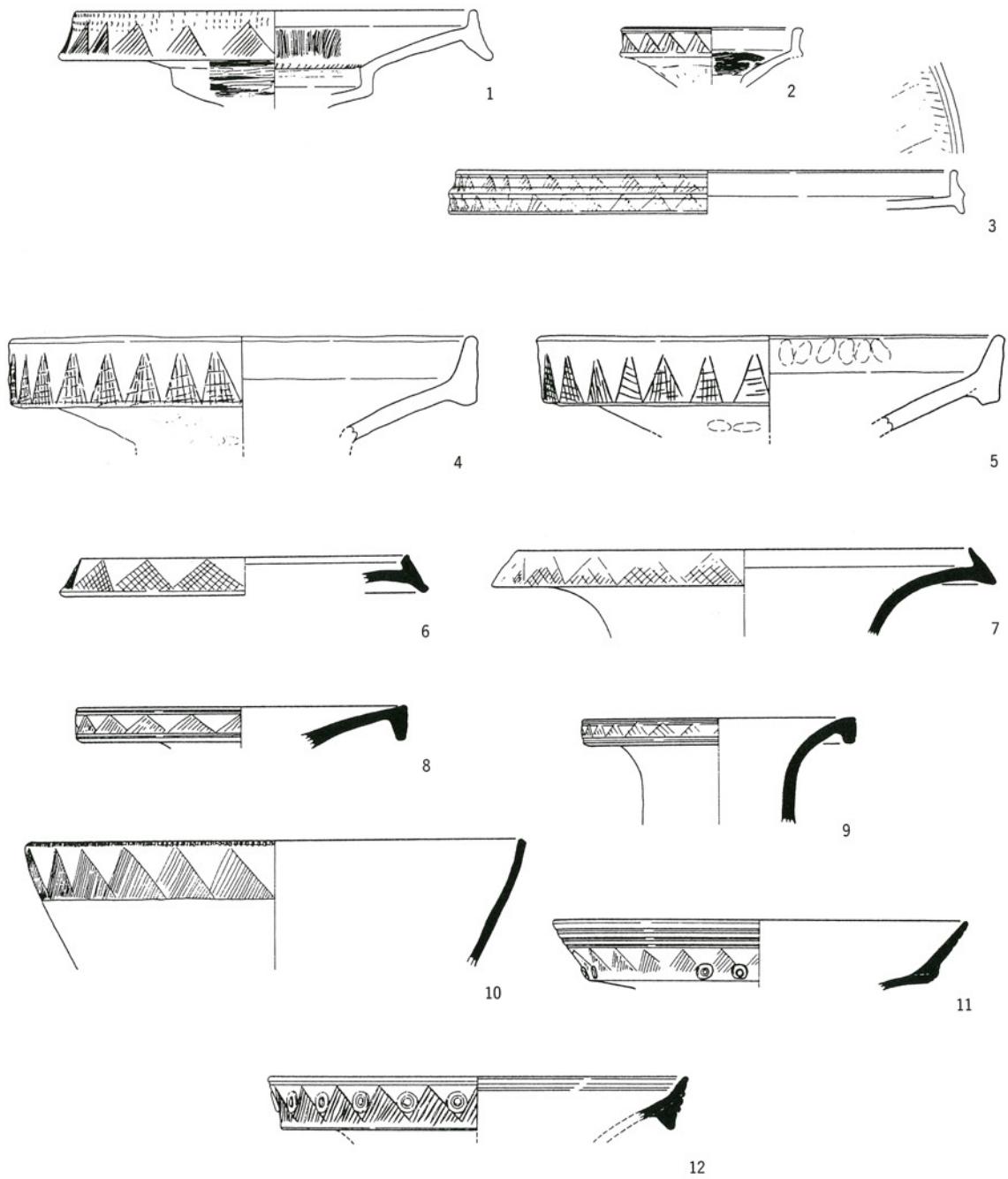
第65図 鋸歯文土器の類例 (6)
(みその遺跡 その2)

模な建物とで構成される建物址群は区画溝によって区切られており、当該期の屋敷地のあり様を明示しており注目される。また柱痕内より20枚に及ぶ銅錢が出土しており、建物廃絶時の地鎮行為が伺われる。これに対し、弥生時代から古墳時代前期の遺構は竪穴住居や溝なども検出されたが、出土遺物は包含層からのものが多い。第66図11は溝からの出土遺物である。また10は包含層出土遺物で、口縁部外面に鋸歯文を施した鉢である。その他、当該期の土器様相は四国系土器の影響下にあることが指摘されており、胎土の状況から明らかに四国からの搬入土器も認められることが報告されている。

・森遺跡（兵庫県洲本市）⁽²³⁾

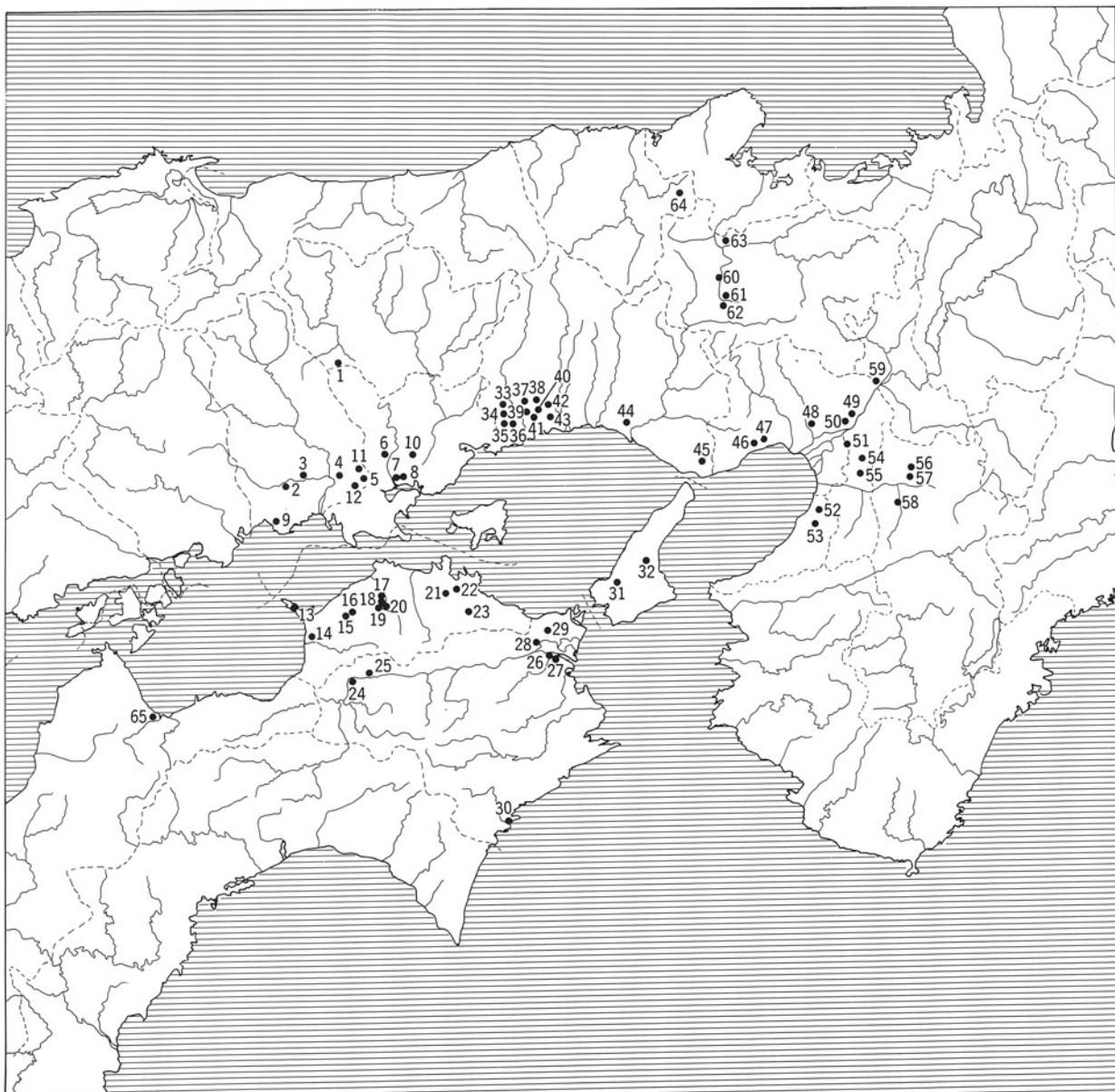
洲本市上内膳里の段丘上に位置する森遺跡も淡路縦貫自動車道建設に伴って調査されたもので、弥生・古墳・中世の各時期の遺構が検出されている。第66図12は事前の確認調査で出土したもので、口縁端面に鋸歯文と竹管円形浮文が施されている。

この他にも香川県奥10号墓⁽²⁴⁾や七日市遺跡⁽²⁵⁾などをはじめとして多数の事例が知られており、必ずしも網羅的な収集をなし得たわけではないが、鋸歯文土器分布の一般的な傾向を確認するため、鋸歯文土器出土遺跡を地図上にドットで示したのが第67図である⁽²⁶⁾。それによると吉備地方を中心に瀬戸内海中・東部地域に集中して見られることが確かめられる⁽²⁷⁾。特に旭川下流域にその中心を想定することも許されよう。こうした鋸歯文土器は、いずれも弥生時代後期から終末期にかけての時期のもので、当該



1～3 前山遺跡
 4・5 川津一ノ又遺跡
 6～11 谷町筋遺跡
 12 森遺跡

第66図 鋸齒文土器の類例 (7)



1 中山遺跡	2 芦岡山遺跡	3 黒宮遺跡	4 前山遺跡
5 津寺遺跡	6 みそのお遺跡	7 百間川原尾島遺跡	8 百間川兼基遺跡
9 城遺跡	10 用木山遺跡	11 矢部大塙遺跡	12 矢部堀越遺跡
13 紫雲出遺跡	14 矢ノ塚遺跡	15 九頭神遺跡	16 稲木遺跡
17 下川津遺跡	18 下川津一ノ又遺跡	19 下川津元結木遺跡	20 川津二代取遺跡
21 渋・長池遺跡	22 奥10号墳	23 森広遺跡	24 ウエノ遺跡
25 加茂野宮遺跡	26 矢野遺跡	27 南庄遺跡	28 黒谷川郡頭遺跡
29 萩原墳墓群	30 大里松原遺跡	31 谷町筋遺跡	32 森遺跡
33 野田Ⅳ遺跡	34 野田Ⅰ遺跡	35 畑田遺跡	36 原田中遺跡
37 小犬丸遺跡	38 北山遺跡	39 尾崎遺跡	40 養久・谷遺跡
41 龍子向イ山遺跡	42 福田天神遺跡	43 鶴遺跡	44 溝ノ口遺跡
45 玉津田中遺跡	46 楠荒田遺跡	47 伯母野山遺跡	48 垂水遺跡
49 安満遺跡	50 東奈良遺跡	51 森小路遺跡	52 四ツ池遺跡
53 池上遺跡	54 西ノ辻遺跡	55 亀井遺跡	56 唐古・鍵遺跡
57 多遺跡	58 鴨都波遺跡	59 神足遺跡	60 七日市遺跡
61 藤岡山遺跡	62 谷山A遺跡	63 奥野部遺跡	64 仲田遺跡
65 中寺馬之遺跡			

第67図 鋸齒文土器出土遺跡分布図

期にこの地方が吉備の文化的影響下におかれたものという推測が成り立つであろう。しかも、1遺跡から多量に出土していることはなく、いずれも1点から数点の出土であること、またみそのお遺跡をはじめとして墳丘墓上での祭祀に使われた器台に多く用いられていることなどを考慮すれば祭祀に関わる土器であったと判断することも許されよう。

この点については、①芋岡山遺跡や黒宮遺跡（黒宮大塚墳丘墓）などに見られるように、吉備において墳丘墓上での祭式に用いられた特殊器台にこの文様が多く用いられていること⁽²⁸⁾、②その特殊器台に強い礼教性を認めることができること⁽²⁹⁾、③菅原氏の検討された吉備型祭式の伝播した範囲が鋸歯文土器の分布域に重なること、などからも推察されるのである。

なお、鋸歯文土器と扁平鉗式袈裟襷紋銅鐸の関係を中心に論じた篠宮正氏は、鋸歯文土器の分布が弥生時代中期後半を中心に尾張から伯耆・備後にわたる地域で見られること、また、なかでも西播磨が個体数の46%を占めることから、鋸歯文土器の出現は西播磨地域での扁平鉗式袈裟襷紋銅鐸の鋳造に起因していると述べ、その消滅する背景についても銅鐸製造中止に起因すると指摘する⁽³⁰⁾。しかし、第67図に示したように、西播磨に加え吉備・讃岐を中心とする瀬戸内海沿岸部にその類例を多く見ることができること（したがって個体数の46%を西播磨が占めるというのは誤り）、またその主体となる時期も弥生時代後半であることなどより西播磨を中心とした銅鐸鋳造との関連で説明するには矛盾が生じよう。

それでは、当該期において、瀬戸内海中・東部地域はいかなる社会的状況下にあったのか、先行研究に導かれながら概観しておこう。それによってウエノ遺跡から鋸歯文土器の出土した意味を確認してみたい。

弥生時代後期、瀬戸内海地域においては、各所で吉備系土器の影響の及んでいたことが旧来より指摘されてきた。例えば、胎土に雲母を含んだ四国系土器の播磨地域への搬出を指摘された岩崎直也氏も、その四国系土器の系譜を吉備の上東式土器に求めることができると述べられる⁽³¹⁾。また、菅原康夫氏は弥生後期中葉以降、土器製作技法上の視点からも、「当該期に顕在化する備讃地域の広口壺の親縁性、東四国土器群の類同など、土器様相の類似は保持具の使用による技術の共有を示すものといえる」指摘される⁽³²⁾。そして、その保持具の祖形を吉備・播磨に主体的に分布する「作業台」⁽³³⁾としての土製品に求められる。また、結果として内面上半に指頭圧痕をとどめる甕の分布域が吉備・讃岐・阿波地域に限定されることを確認される。さらに、香川県下川津遺跡出土の倒卵形の器形で口縁部を大きく外反させた甕は吉備からの影響を受けたものであるという指摘もある⁽³⁴⁾。こうした吉備系土器の影響は河内地域でも認めることができることも前田佳久氏によって指摘されている⁽³⁵⁾。前田氏によれば、吉備系土器の河内での出土は弥生中期末から後期前半の時期と古墳時代前半の2時期があるとのことであり、前者については巨摩廃寺遺跡の遺物や吉備系の分銅型土製品の出土した亀井遺跡の土器様相からそのことが知られることがある。なお、分銅型土製品については、東潮氏によれば、吉備を中心に瀬戸内海地方に分布し、河内が東限であること、初現は弥生中期中葉にあり、後期になると分布は吉備に縮小する傾向にあることである⁽³⁶⁾。分銅型土製品については、徳島県でも西長峰遺跡などからの出土が知られており⁽³⁷⁾、吉備とのつながりを想起せしめる。

さらに、土器の表面に描かれた弧帶文の性格を分析された豊岡卓之氏によれば、弧帶文は近畿地方においては穀靈にまつわる農耕祭祀に伴って用いられていたが、吉備地方では葬送儀礼に用いられたと指摘される⁽³⁸⁾。確かに、特殊器台形土器にこの文様が描かれていることからも首肯できることであるが、これを受けて、先にも触れたように徳島県内の弧帶文の事例をも加えて検討された菅原康夫氏は吉備型

祭式の阿波への伝播を確認されている⁽³⁹⁾。

以上のように、鋸歯文土器の出土する弥生時代後期から終末期にかけての時期は、吉備系土器の影響が広く瀬戸内中・東部地方に及んでいた時期であり、鋸歯文土器もこの影響下にあったものと思われる。前述したように、その中心は旭川下流域地方に求めることができるとともに、各遺跡から1点ないしは数点の出土量しか認められること、墳丘墓上での祭式に用いられた特殊器台が多く用いられていたことなどから祭祀土器の1つであったことなどが想定されるのである。さらに付言すれば、当該期における鋸歯文使用の契機は葬送儀礼にあった—そこに易の思想を見ることも可能か—と思われる。

5 おわりに

小稿では、ウエノ遺跡出土の鋸歯文土器を足掛かりに吉野川上流域の弥生土器の様相をさぐる一助を得ようと試みた。鋸歯文のもつ祭祀土器的性格を確認するとともにその広がりを確かめたところ、瀬戸内海中・東部に集中的に見られることが看取できた。このことは、ウエノ遺跡の位置する吉野川上流域も吉備系祭祀の文化圏に含まれていたことを暗示しているようにも考えられる。吉野川下流域については、菅原康夫氏の一連の研究によって吉備との関わりが指摘されているが、この上流域においてもその可能性のあったことを確認しておきたい。ただ、土器調整技法の差異や墓制のあり方の相違などから、吉野川下流域を第1次受容地帯、上流域を第2次受容地帯と整理できるかもしれない。詳細は今後の課題としたい。

吉野川上流域の弥生土器の検討を行うにはあまりに拙いものになってしまったが、今後四国縦貫自動車道建設に伴う大規模調査の成果が公けにされるにしたがい、活発に議論が展開されるものと思われる。今後の成果に期待して、小稿を閉じたい。

(注)

- (1) 菅原康夫「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」森浩一編『考古学と地域文化』同志社大学 1987
- (2) 岩崎直也「四国系土器群の搬出」『大阪文化誌』17号 1984
- (3) 菅原康夫「吉備型祭式の波及と変容」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』2号 1993。なお、「墳頂部主体上面で行われた祭式に、細頸壺・脚台付壺（鉢）・高壺の小型精製土器、器台を整備し、特殊壺・弧帶文を配した特殊器台を用いた葬送祭式」を吉備型祭式と規定される。
- (4) 『池田町史 上巻』（池田町 1983）に岡本健児氏の言説が転載されている。
- (5) 岡本健児「弥生土器—四国5—」『考古学ジャーナル』93号 1974
- (6) 『加茂野宮遺跡—四国電力株式会社三野変電所新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』三野町教育委員会 1997
- (7) 勝浦康守『矢野遺跡発掘調査概要—四国電力応神東線鉄塔建替工事に伴う発掘調査—』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会 1991、三宅良明「矢野遺跡発掘調査概要—変電設備増設工事に伴う発掘調査—」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要4』徳島市教育委員会 1994、栗林誠治「矢野遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』5号 1994
- (8) 三宅良明「南庄遺跡発掘調査概要—」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要5』徳島市教育委員会 1996
- (9) 菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡I』徳島県教育委員会 1986
- (10) 菅原康夫『萩原墳墓群』徳島県教育委員会 1983

- (11) 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』13巻3号 1967
- (12) 間壁忠彦・間壁葭子「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報』3号 1967
- (13) 間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』13号 1977
- (14) 奥和之・山磨康平『中山遺跡』岡山県落合町教育委員会 1978
- (15) 宇垣匡雅他『百間川原尾島遺跡3』岡山県教育委員会 1994
- (16) 弘田和司他『百間川兼基遺跡3・百間川今谷遺跡3・百間川沢田遺跡4』岡山県教育委員会 1997
- (17) 亀山行雄他『津寺遺跡4』岡山県教育委員会 1997
- (18) 椿真治他『みそのお遺跡』岡山県教育委員会 1993
- (19) 物部茂樹他『前山遺跡・鎌戸原遺跡』岡山県教育委員会 1997
- (20) 片桐孝浩『川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター 1997
- (21) 『川津元結木遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター 1992、『下川津遺跡』同前 1990
- (22) 吉讃雅人他『谷町筋遺跡』兵庫県教育委員会 1990
- (23) 吉讃雅人他『森遺跡』兵庫県教育委員会 1988
- (24) 古瀬清秀「原始・古代の寒川町」『香川県大川郡寒川町史』 1985
- (25) 種定淳介『七日市遺跡(I)』兵庫県教育委員会 1990
- (26) 第67図で示したものの他、篠宮正氏も鋸歯文土器の類例を集成しているので、あわせて参照願いたい。
(篠宮正「鋸歯紋土器と播磨の銅鐸鋳造」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994)
- (27) 古墳時代前期には千葉県長平台遺跡の出土例も知られる(『古墳時代の研究第6巻 土師器と須恵器』雄山閣 1991)、弥生時代後期から終末期にかけての時期については、一般的な動向として本節でのような理解をしておきたい。
- (28) 高橋護氏は特殊器台の用いられた背景に首長権継承儀礼(日繼行事)が存在したことを指摘されている(「三輪山墳墓群の調査から」『岡山県総合文化センター館報』39号 1963)。また特殊器台の成立・展開地域の分布圏を検証された宇垣匡雅氏は、その舞台が備中南部にあったことを確認されている(「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する形式学的研究」『考古学研究』108号 1981、「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学 上』1992)。
- (29) 前掲注(3)菅原論文
- (30) 前掲注(26)篠宮論文
- (31) 前掲注(2)岩崎論文
- (32) 菅原康夫「保持具から型へ—東四国土器群の成形技法—」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』創刊号 1992
- (33) 山本利博・秋枝芳「姫路市文化財調査報告VI 八代深田遺跡」姫路市文化財保護協会 1977
- (34) 松下勝「播磨のなかの四国系土器」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』 1990
- (35) 前田佳久「吉備系遺物の検討—弥生時代、河内を中心にして—」『網干善教先生華甲記念考古学論集』1988
- (36) 東潮「分銅形土製品の研究(1)」『古代吉備』7号 1971、同「分銅形土製品とその祭祀」『古代の顔』福岡市立歴史資料館 1982
- (37) 「西長峰遺跡」『埋蔵文化財資料展 掘ったでよ阿波』徳島県教育委員会 1992
- (38) 豊岡卓之「弧帶文の性格とその分布」森浩一編『考古学と移住・移動』 同志社大学 1985

(39) 前掲注（3）菅原論文

[参考文献]

- 菅原 康夫 1983 「徳島における発生期積石塚の一様相」『考古学ジャーナル』225号
〃 1985 「徳島県足代東原遺跡」『日本考古学年報』35号
〃 1993 「弥生時代終末期の阿波の社会と文化」『鳴門史学』7集
- 藤田憲司・柳瀬昭彦 1987 「弥生時代」近藤義郎編『岡山県の考古学』 吉川弘文館

(石尾 和仁)

第1表 遺構一覧表（竪穴住居）

遺構名	出土地點	規模(cm)			特徵・備考
		長軸	短軸	深さ	
SB2001	F・G・H-5・6・7	1060	1030		
SB2002	D・E-1・2・3	(1075)	475		
SB2003	D・E-7・8	690	625		
SB2004	A・B・C-1・2・3	950	850		
SB2005	B・C-6・7	308	230		
SB2006	F・G・H-8・9・10	1040	1000		
SB2007	C・D・E-10.11.12	960	910		
SB2008	Y・Z-9・10	580	(460)		

第2表 遺構一覧表（溝）

遺構名	出土地點	規模(cm)			特徵・備考
		長さ	幅	深さ	
SD1001	Y・Z-5・6	355	85	49	
SD1002	W・X-1	425	120	49	
SD1003	A・B-13	(360)	130	67	

第3表 遺構一覧表（土坑）

遺構名	出土地點	規模(cm)			特徵・備考
		長軸	短軸	深さ	
SK1001	J・K-2・3	800	705	95	
SK1002	K-1	134	125	33	
SK1003	J-1・2	183	135	38	

第4表 遺構一覧表（土坑）

遺構名	出土地点	規模(cm)			特徴・備考
		長軸	短軸	深さ	
SK1004	J-2	(124)	(90)	31	
SK1005	I・J-2	150	88	15	
SK1006	I-1・2	190	94	14	
SK1007	I・H-1・2	180	136	37	
SK1008	I-2	200	90	61	
SK1009	I-2・3	120	50	12	
SK1010	I-3	200	120	54	
SK1011	H-4	326	180	64	
SK1012	H-3	250	125	41	
SK1013	H-3	140	120	49	
SK1014	H-3	92	80	27	
SK1015	K-1・2	160	84	21	
SK1016	K-4	122	74	30	
SK1017	J-4・5	240	130	29	
SK1018	J-1・2	305	140	29	
SK1019	J-1	158	70	29	
SK1020	A-12・13	210	(163)	20	
SK1021	B-13	380	138	63	

第5表 遺構一覧表（土坑）

遺構名	出土地点	規模(cm)			特徴・備考
		長軸	短軸	深さ	
SK1022	B-13	190	70	23	
SK1023	B-12・13	165	60	35	
SK1024	B-12	132	60	33	
SK1025	B・C-12	204	100	36	
SK1026	D・E-10	294	128	86	
SK1027	F-12・13	300	130	67	
SK1028	K・L-13	(260)	(215)	15	
SK1029	K-12	148	138	8	
SK1030	K・L-12	158	158	37	
SK1031	K-12	150	86	15	
SK1032	E-1	108	72	—	
SK1033	D・E-7	175	85	52	
SK1034	E-4	(164)	64	29	
SK1035	H-8	190	115	—	
SK1036	H-7・8	165	65	15	
SK1037	H・I-7	313	313	—	
SK1038	J-8	(325)	125	22	
SK1039	K-6・7	230	165	—	
SK1040	K-5・6	215	135	81	

第6表 遺構一覧表（土坑）

遺構名	出土地点	規模(cm)			特徴・備考
		長軸	短軸	深さ	
SK1041	F・G-9	158	110	—	
SK1042	Z-3	90	54	11	
SK1043	Z-4	114	76	24	
SK1044	Z-4	70	48	27	
SK1045	Z-5	90	41	13	
SK1046	Z-5	219	80	18	
SK1047	Y・Z-6	108	70	22	
SK1048	Z-7	85	68	18	
SK1049	Z-8	148	70	11	
SK1050	Z-9	74	70	11	
SK1051	Y-9・10	245	90	49	
SK1052	Y-1	265	138	49	
SK1053	Y-1	69	43	7	
SK1054	X・Y-1	(170)	(220)	38	
SK1055	X・Y-1	65	108	40	
SK1056	Z-3・4	188	75	11	
SK1057	Y-7	198	85	25	
SK1058	Y-5	112	80	32	
SK1059	E-4	234	76	42	

第7表 遺構一覧表（土坑）

遺構名	出土地点	規模(cm)			特徴・備考
		長軸	短軸	深さ	
SK1060	C-10・11	258	110	42	
SK1061	H・I-2	203	150	29	

第8表 遺構一覧表（不明遺構）

遺構名	出土地点	規模(cm)			特徴・備考
		長軸	短軸	深さ	
SX1001	I-1	520	385	65	
SX1002	Z-7	318	183	—	
SX1003	Y-6・7	320	127	—	
SX1004	Y-1	98	95	—	
SX1005	A・Z-4	287	(270)	—	

第9表 SB1001 出土遺物観察表 (1)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
1	弥生土器 壺	G-5 SB1001	頸径 15.0	頸部は内彎する体部から屈曲して直立する。	頸部外面はタテハケ。 内面は剥離のため不明。		橙	
2	弥生土器 甕	SB1001	口径 24.0	「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	内外面ともに剥離のため不明。		橙	
3	弥生土器 甕	SB1001	口径 12.7	「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	口縁から頸部にかけてヨコナデ。 体部外面の一部にハケ。 内面はユビオサエ。		橙	
4	弥生土器 甕	F-6 SB1001	口径 11.1	「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面ヨコナデ。	砂疊合	にぶい橙	
5	弥生土器 壺	SB1001	口径 10.4	緩やかに屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部に2条の擬凹線を施す。	内外面ともにナデ。		橙	
6	弥生土器 壺	F-6 SB1001	口径 13.7	緩やかに外反する口縁部をもつ 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部内面はヨコナデ。		橙	
7	弥生土器 壺	G-5 SB1001	底径 4.0 胴部最大径 14.9	底面は僅かに上げ底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面タテハケ。 内面ヘラケズリ。		(内) 黒 (外) 橙	
8	弥生土器 壺	SB1001	底径 5.0	底面は平底を呈す。 体部は大きく外方にたちあがる。	体部外面タテハケ。		橙	
9	弥生土器 壺	G-5 SB1001	底径 4.0	底面はやや丸みをおびた平底で 体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面タテハケ。 内面は剥離のため不明。		橙	
10	弥生土器 壺	SB1001	底径 7.0	底面は丸みをおびた平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面はタタキ後ハケ。 内面タテヘラケズリ。		(内) 黒褐 (外) 橙	
11	弥生土器 甕	G-6 SB1001	口径 11.1	内彎する体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	体部外面水平タタキ。 内面タテヘラケズリ。		橙	
12	弥生土器 甕	SB1001	口径 14.4 器高 14.6	底面は丸底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。 口縁端部はやや丸くおさめる。	体部外面上半水平タタキ 下半タテハケ。 内面はヘラケズリ。 口縁部内面ヨコナデ。		(内) にぶい橙 (外) 橙	
13	弥生土器 壺	SB1001	底径 7.8	底部は平底を呈す。 体部は内彎気味におおきく外方にたちあがる。	内外面ともに剥離のため不明。		(内) 黄橙 (外) 橙	
14	弥生土器 壺	SB1001	底径 5.0	底部は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	内外面ともにナデ。		にぶい黄橙	
15	弥生土器 甕	G-6 SB1001	底径 6.4	底面は僅かに上げ底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	内外面ともにナデ。		にぶい黄橙	
16	弥生土器 壺	SB1001	底径 3.6	底面は平底を呈す。 体部は、大きく外方にたちあがる。	内外面ともに剥離のため不明。		橙	

第10表 SB1001 出土遺物観察表 (2)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
17	弥生土器 壺	SB1001	底径 5.2	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面一部にミガキ。		橙	
18	弥生土器 壺	SB1001	底径 2.0	底面は平底を呈し、体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面はタタキ。 内面は剥離のため不明。		橙	
19	弥生土器 鉢	SB1001	口径 12.7 器高 6.6	底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがり、 口縁端部は丸くおさめる。	体部外面にタテハケの痕跡。 内面ナデ。		橙	
20	弥生土器 鉢	SB1001	口径 14.4 器高 9.3	底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがり、 口縁端部は丸くおさめる。	体部外面はタタキ。 内面は剥離のため不明。	砂礫含	橙	
21	弥生土器 鉢	SB1001	底径 3.8	底面はやや丸みをおびた平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面タテハケ。 内面は剥離のため不明。		にぶい橙	
22	弥生土器 鉢	SB1001	底径 2.8	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面タタキ。 内面タテハケ。		橙	
23	弥生土器 鉢	H - 6 SB1001	底径 3.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎して外方にたちあがる。	体部外面右上がりのタタキ。 内面はタテハケ。		橙	
24	弥生土器 鉢	H - 6 SB1001	底径 1.6	底面はやや丸みをおびた平底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面右上がりのタタキ。 内面はタテハケ。		橙	
25	弥生土器 鉢	G - 6 SB1001	底径 3.1	底面はやや丸みをおびた平底を呈し、体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面に一部タタキ。 内面ヨコハケ。		橙	
26	弥生土器 鉢	G - 5 SB1001	底径 2.1	底面は丸底に近い平底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	体部外面はタタキ。 内面は剥離のため不明。		橙	
27	弥生土器 鉢	F - 5 SB1001	底径 7.1	底部は僅かに上げ底で分厚い。 体部は内彎して、大きく外方にたちあがる。	内外面ともに剥離のため不明。		橙	
28	弥生土器 鉢	SB1001	底径 2.3 器高 7.9	底面はやや丸みをおびた平底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。 口縁端部は尖り気味におさめる。	体部外面剥離のため不明。 内面タテハケ。		橙	
29	弥生土器 鉢	G - 5 SB1001	口径 19.5 器高 8.0	底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。 口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともに剥離が激しく不明。		橙	
30	弥生土器 高杯	F - 5 SB1001	脚径 15.0	脚部は外下方に拡張する。 端部はやや丸くおさめる。	内外面ともに剥離のため不明。		暗灰黄	
31	弥生土器 高杯	SB1001	脚径 13.8	内彎気味にたちあがる。	脚端部外面一部にハケ。		にぶい黄橙	

第11表 SB1001 出土遺物観察表 (3)

番号	器種	地点層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石材	特徴・備考
32	石臼	SB1001	37.2	36.8	10.2	22900	完存	砂岩	円礫を利用。 中央部に擦痕。

第12表 SB1002 出土遺物観察表 (1)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
33	弥生土器 壺	SB1002	口径 12.0	頸部から緩やかに屈曲して外反する短い口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	内外面とも剥離のため不明。		(内) 青灰 (外) 橙	
34	弥生土器 壺	SB1002	口径 12.5	口縁端部上端をつまみあげる。 口縁端部に3条の擬凹線を施す。	口縁部内外面はヨコナデ。	石英含	にぶい橙	
35	弥生土器 甕	SB1002	口径 17.0	内彎する体部から「く」の字状に屈曲し、外反する口縁部をもつ。 口縁端部はやや丸くおさめる。	体部外面ハケ、内面はヘラケズリ。 口縁部内面ユビオサエ後ヘラケズリ。		橙	
36	弥生土器 壺	SB1002	底径 6.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。		(内) 灰 (外) 橙	
37	弥生土器 甕	SB1002	口径 15.1	内彎する体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面はヨコナデ。 内面にヘラケズリの痕跡。	結晶片岩 含	にぶい橙	
38	弥生土器 甕	SB1002	口径 11.7	内彎気味にたちあがる体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部内外面ともヨコナデ。 体部外面はタテハケ。		にぶい橙	
39	弥生土器 甕	SB1002	胴部最大径 11.2	体部は内彎気味にたちあがる。	口縁部内外面ともヨコナデ。 体部外面タテハケ、内面ヘラケズリ。		橙	
40	弥生土器 壺	SB1002	底径 6.4	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ。		橙	
41	弥生土器 壺	SB1002	底径 7.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面は剥離のため不明。 内面はヘラケズリ。		(内) にぶい黄 (外) 橙	
42	弥生土器 壺	SB1002	底径 6.6	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はタテヘラミガキ。 内面はヘラケズリ。		(内) にぶい橙 (外) 灰褐	
43	弥生土器 壺	SB1002	底径 6.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。		橙	
44	弥生土器 壺	SB1002	底径 7.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	外面はナデ。 内面はハケ。		(内) 黒 (外) 橙	
45	弥生土器 壺	SB1002	底径 6.5	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はナデ。 内面はヘラケズリ。		(内) 褐灰 (外) にぶい橙	
46	弥生土器 壺	SB1002	底径 5.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ。		橙	

第13表 SB1002 出土遺物観察表 (2)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
47	弥生土器 壺	SB1002	底径 2.6	底部は平底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	体部外面は剥離のため不明。内面はヘラケズリ。 底部内面にユビオサエ痕。	石英含	橙	
48	弥生土器 壺	SB1002	底径 3.2	底面は丸底に近い平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部・底部内面にユビオサエ痕をのこす。		橙	
49	弥生土器 壺	SB1002	底径 7.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	内外面ともナデ。	石英含	褐灰	
50	弥生土器 壺	SB1002	底径 6.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリとユビオサエ痕をのこす。		にぶい橙	
51	弥生土器 壺	SB1002	底径 4.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ。		にぶい褐	
52	弥生土器 甕	SB1002 炉	底径 4.0	底面は突出する平底を呈す。 体部は僅かに内彎気味にたちあがる。	体部内面はナデでユビオサエ痕をのこす。		(内) 黒褐 (外) 橙	
53	弥生土器 甕	SB1002	口径 28.4	内彎気味にたちあがる体部から緩やかに外反する口縁部をもつ。	口縁部外面はヨコナデ。		橙	
54	弥生土器 甕	SB1002	口径 23.8	内彎してたちあがる体部から屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部外面はヨコナデ。 体部外面はタタキ後ハケ。 内面は剥離が激しく不明。		橙	
55	弥生土器 甕	SB1002	口径 15.0	体部は内彎してたちあがり、口縁部は緩く屈曲して外反する。 口縁端部は平坦におさめる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ後ナデ。 口縁部内面はヨコナデ。		(内) 黒褐 (外) 橙	
56	弥生土器 鉢	SB1002	口径 22.5 器高 8.8	底面は丸底を呈す。 体部は僅かに内彎気味にたちあがる。 口縁部は平坦におさめる。	体部外面にタタキの痕跡あり。 内面はヘラケズリ。口縁部内面はヨコナデ。		にぶい橙	
57	弥生土器 鉢	SB1002	口径 8.4 底径 3.0 器高 4.8	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがり、屈曲して小さく外反する口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	体部外面はタテヘラミガキ。 内面はヘラケズリ。		橙	
58	弥生土器 ミニチュア 土器	SB1002	口径 5.0 底径 2.8	底面は平底を呈す。 体部は内彎して外方にたちあがる。 口縁部で屈曲して内傾し、端部は丸くおさめる。	体部内外面ともナデ。		にぶい黄橙	
59	弥生土器 高杯	SB1002		杯部は直線的にたちあがり、口縁部は屈曲して外反する。	口縁部外面はハケ、ミガキのちナデ。 内面はハケのちミガキ。	結晶片岩 長石 含	橙	
60	弥生土器 高杯	SB1002	脚径 16.2	脚台部は直線的に下外方にのびる。 脚端部に1条の凹線を施す。	脚台部外面ハケのちヨコナデ。 内面はハケ。	石英 長石 含	橙	
61	弥生土器 高杯	SB1002	脚径 14.0	脚台部は外反気味に下外方にのびる。	内外面とも剥離のため不明。		橙	

第14表 SB1002 出土遺物観察表 (3)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
62	弥生土器 高杯	SB1002		脚柱部は僅かに内傾してたちあがる。	脚柱部外面タテヘラミガキ。内面ヘラケズリのちナデ。裾部内面ヨコハケ。	石英 結晶片岩 含	橙	
63	弥生土器 高杯	SB1002	脚径 18.0	脚部は緩やかに屈曲して外下方にのび、脚端を方形状におさめる。	脚柱部外面タテハケ。内面はユビオサエ。		橙	

第15表 SB1003 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
64	弥生土器 壺	SB1003	口径 18.6	緩やかに屈曲して大きく外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	内外面とも剥離のため不明。	長石 雲母 含	橙	
65	弥生土器 壺	SB1003	底径 8.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。		灰	
66	弥生土器 壺	SB1003	底径 5.4	底面は僅かに上げ底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	内外面とも剥離が激しく不明。	(内) 黄橙 (外) にぶい橙		
67	弥生土器 甕	SB1003	口径 13.8	「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は下方にやや拡張し、端面は平坦におさめる。	体部外面はナデ。 内面は剥離のため不明。	結晶片岩 含	橙	
68	弥生土器 甕	SB1003	口径 15.0	外反する口縁部をもつ。 口縁端部は上方に拡張し、端面に2条の凹線を施す。	内外面とも剥離のため不明。		橙	
69	弥生土器 鉢	SB1003	口径 30.0	内彎気味にたちあがる体部から屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は僅かに下方に拡張し端面は平坦におさめる。	口縁部内外面ともにヨコナデ。 体部外面ハケのちナデ。 内面ヘラケズリのちヘラミガキ。		にぶい橙	
70	弥生土器 高杯	SB1003	口径 28.8	杯部は直線的に外方に広がる。 「S」字状に屈曲して外反する複合口縁をもつ。 口縁端部は僅かに下方に拡張し端面に1条の擬凹線を施す。	杯部外面上半はナデ、下半はタテヘラミガキ。 内面は剥離のため不明。	結晶片岩 石英 長石 含	橙	
71	弥生土器 鉢	SB1003	底径 4.4	底面は僅かに突出した上げ底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面はナデ。 内面はヘラミガキ。	(内) 黒 (外) 橙		
72	弥生土器 鉢	SB1003	口径 13.8	緩やかに外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	内外面とも剥離のため不明。	石英 含	橙	
73	弥生土器 高杯	E - 7 SB1003		脚柱部は僅かに内傾してたちあがる。	脚柱部外面タテヘラミガキ。内面はヘラケズリ。	石英 含	橙	
74	弥生土器 高杯	SB1003	脚径 13.6	脚台部は緩やかに下外方にのび脚端は平坦におさめる。	脚台部内外面ともにハケ。		橙	

第16表 SB1004 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
75	弥生土器 壺	SB1004	口径 15.0	外反する口縁部をもつ。 端部を上方に拡張させ、端面に 2条の凹線を施す。	口縁部内外面ともにヨコ ナデ。	結晶片岩 含	橙	
76	弥生土器 壺	SB1004	底径 6.2	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあが る。	体部外面はタテハケ。 内面はタテ方向を中心と するナデ。	石英 含	(内) 褐灰 (外) 橙	
77	弥生土器 壺	SB1004	底径 6.4	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあが る。	体部外面ハケのちナデ。 内面剥離のため不明。	石英含	(内) 黒 (外) 橙	
78	弥生土器 壺	SB1004	底径 7.6	底面は僅かに上げ底を呈す。 体部は直線的に大きく外方にた ちあがる。	体部外面はヨコナデ。 内面は剥離のため不明。	結晶片岩 石英 赤色斑粒 含	にぶい橙 にぶい橙	
79	弥生土器 壺	SB1004	底径 4.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に大きく外方にた ちあがる。	体部外面はハケ。 内面はヘラケズリのちヘ ラミガキのちナデ。	石英含	橙	
80	弥生土器 甕	SB1004	口径 16.0	内彎する体部から緩く屈曲して 外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部内外面ともにヨコ ナデ。 体部外面ハケ、内面ナデ。		にぶい橙	
81	弥生土器 鉢	SB1004	口径 13.6 器高 4.9	底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあ がる。 口縁端部は丸くおさめる。	体部外面上半はタテハ ケ。下半はタタキ。 体部内面はハケ。	石英含	橙	
82	弥生土器 鉢	SB1004	口径 11.9 底径 2.5 器高 6.5	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあ がる。 口縁部は緩く屈曲して外反す る。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面タタキ後ナ デ。 内面はハケ後ナデ。 体部外面タタキのちナ デ。 内面はハケのちナデ。	石英含	橙	
83	弥生土器 鉢	SB1004	口径 12.8 底径 4.4 器高 5.6	底面は平底を呈す。 体部は内彎して大きく外方にた ちあがる。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともハケ後 ナデ。 体部外面ハケ。内面ハケ のちナデ。		にぶい橙	
84	弥生土器 鉢	SB1004	底径 3.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にた ちあがる。	体部外面はナデ。 内面はイタナデ。		(内) 橙 (外) にぶい褐	
85	弥生土器 鉢	SB1004	底径 3.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあが る。	体部内外面ともにヘラミ ガキ。 内面の底面近くにハケ。		橙	
86	弥生土器 高杯	SB1004	脚径 20.0	脚台部は直線的に下外方にのび る。 脚端は僅かに上方に拡張する。	脚台部外面はタテハケ。 内面はハケ。脚端部内外 面ともにヨコナデ。		橙	

第17表 SB1005 出土遺物観察表 (1)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
87	弥生土器 壺	SB1005	口径 16.8	外反する口縁部をもつ。 口縁端部は上下に拡張し、端面 に2条の凹線を施す。	口縁部内外ともにヨコナ デ。		にぶい橙	

第18表 SB1005 出土遺物観察表 (2)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
88	弥生土器壺	SB1005	底径 5.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はナデ。		にぶい赤褐	
89	弥生土器甕	SB1005	口径 16.0	「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	内外面とも剥離のため不明。		明赤褐	
90	弥生土器壺	SB1005	底径 6.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面は剥離のため不明。 内面はヘラケズリ。		(内) 赤橙 (外) 橙	
91	弥生土器ミニチュア土器	SB1005	胴部最大径 7.6 頸部径 4.6	体部は内彎してたちあがり、中位で最大径部が張る。	剥離のため不明。		橙	
92	弥生土器甕	SB1005	口径 15.0	屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は僅かに下方に拡張し端面は丸みを帯びた平坦面に仕上げる。	口縁部外面にタテハケ。 内面はヨコナデ。		橙	

第19表 SB1006 出土遺物観察表 (1)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
93	弥生土器壺	SB1006	口径 26.6	やや外方にたちあがる頸部から大きく外反する口縁部をもつ。	口縁端部に三角形を描きその中に斜線を入れている。 頸部外面はハケ後ナデ。		黄褐色	
94	弥生土器壺	G-8 SB1006	口径 9.5	やや開き気味にたちあがる頸部から屈曲し外反する口縁部をもつ。 端部を上方に拡張させ、端面は平坦におさめる。	内外面とも剥離のため不明。	結晶片岩 石英 含	橙	
95	弥生土器壺	G-9 SB1006	口径 11.6	内彎気味にたちあがる頸部から緩やかに屈曲して内彎する口縁部をもつ。	口縁部外面は剥離のため明。 内面はハケ。		橙	
96	弥生土器壺	G-9 SB1006	口径 14.0	やや開き気味にたちあがる頸部から屈曲し外反する口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	内外面とも剥離のため不明。		赤橙	
97	弥生土器壺	SB1006	底径 3.7	底面は平底を呈す。 体部は直線的に大きく外方にたちあがる。	体部外面はハケ。 内面はヘラケズリ。		にぶい橙	
98	弥生土器壺	G-9 SB1006	底径 3.2	底面は僅かに突出した平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	外面は水平タタキ。 内面は剥離のため不明。		橙	
99	弥生土器壺	G-9 SB1006	底径 2.9	高台状の上げ底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。		(内) 橙 (外) 赤橙	
100	弥生土器壺	SB1006	底径 3.8	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	外面はイタナデ。 内面はヘラケズリ。	結晶片岩 石英 長石 含	(内) 黄灰 (外) 明赤褐	

第20表 SB1006 出土遺物観察表 (2)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
101	弥生土器 甕	SB1006	口径 15.0	「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は下方に僅かに拡張し平坦におさめる。	外面は剥離のため不明。		にぶい橙	
102	弥生土器 鉢	SB1006 炉		底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	外面は剥離のため不明。 内面はハケ。		橙	
103	弥生土器 鉢	SB1006		底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	外面はハケ。 内面はハケ後ナデ。	結晶片岩 石英 含	(内) 橙 (外) にぶい橙	
104	弥生土器 鉢	SB1006	口径 13.8 器高 6.0	底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。 口縁端部は丸くおさめる。	体部外面はナデ。 内面にハケの痕跡。		橙	
105	弥生土器 鉢	SB1006	底径 3.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	外面はタタキ後ハケ。 内面は剥離のため不明。		橙	
106	弥生土器 鉢	SB1006		底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面はタタキ後ナデ。 内面はケズリ後ナデ。	結晶片岩 含	橙	
107	弥生土器 鉢	SB1006	口径 16.8 器高 5.5	底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。 口縁端部は丸くおさめる。	体部外面タタキ後ナデ。 内面はハケ。		赤橙	

第21表 SB1006 出土遺物観察表 (3)

番号	器種	地点層位	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	胎土	色調	特徴・備考
108	土製紡錘車	SB1006	6.2	5.9	1.3	0.8	37.4	石英含	明赤褐	

第22表 SB1006 出土遺物観察表 (4)

番号	器種	地点層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石材	特徴・備考
109	敲打痕のある石	SB1006	16.8	10.2	6.0	1990	完存	緑色変岩	円礫を利用。縁辺一部中央に敲打痕。

第23表 SB1007 出土遺物観察表 (1)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
110	弥生土器 壺	SB1007	底径 3.6	底面は平底を呈す。 体部は直線的に大きく外方にたちあがる。	外面は水平タタキ。 内面は剥離のため不明。		(内) 灰褐 (外) 橙	
111	弥生土器 壺	D-10 SB1007	底径 5.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ。		(内) にぶい橙 (外) 赤	
112	弥生土器 鉢	SB1007	口径 13.4 底径 2.9 器高 6.8	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。	外面はヘラケズリ。 内面はタテハケ。	結晶片岩 石英 長石含	橙	

第24表 SB1007 出土遺物観察表 (2)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
113	弥生土器 鉢	SB1007	底径 3.0 器高 4.6	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。 口縁端部は丸くおさめる。	外面はハケ後ナデ。 内面は底部にユビオサエ痕をのこす。		橙	
114	弥生土器 甕	F-10 SB1007	底径 3.2	底面は僅かに突出した平底を呈し、体部は内彎気味に外方にたちあがる。	内外面とも剝離のため不明。		赤	
115	弥生土器 鉢	SB1007	底径 9.0	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	外面はタテハケ。 内面はナデ。		(内) 褐灰 (外) 橙	
116	弥生土器 鉢	SB1007	口径 12.8 底径 3.6 器高 4.4	底面は僅かに上げ底を呈す。 体部は直線的に大きく外方にたちあがる。 口縁端部は丸くおさめる。	外面はケズリのあとタタキを入れてナデ。 内面はナデ。	石英含	明赤褐	
117	弥生土器 鉢	SB1007	底径 2.8	底面は僅かに突出した平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	外面は底部にユビオサエ痕をのこす。 内面はナデ。	結晶片岩 含	橙	
118	弥生土器 鉢	SB1007	口径 12.2 底径 4.6 器高 9.0	底面は平底を呈す。 直線的に外方にたちあがる体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	内外面とも剝離のため不明。		橙	
119	弥生土器 鉢	SB1007	口径 14.2	内彎気味にたちあがる体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともハケ。	結晶片岩 含	赤橙	
120	弥生土器 高杯	SB1007	口径 23.0	口縁部は屈曲して大きく外反する。口縁端部は丸くおさめる。	内外面とも剝離が激しく不明。		橙	
121	弥生土器 鉢	SB1007	口径 19.2 底径 3.6 器高 9.0	底面は突出した平底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。 口縁端部は丸くおさめる。	体部外面はタテハケ。 内面はハケ。		橙	
122	弥生土器 高杯	SB1007		杯部は直線的に外方にたちあがる。 脚台部はくびれて直線的に下外方にのびる。	杯部外面はヘラミガキ。 内面は細かな格子目状のヘラミガキを施す。		褐	讃岐系

第25表 SB1007 出土遺物観察表 (3)

番号	器種	地点層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石材	特徴・備考
123	スクレイパー	SB1007	8.5	4.0	0.4	20.5	欠損	サヌカイト	両面形成により刃部形成。 抉り加工を施す。
124	スクレイパー	SB1007	5.3	2.3	0.7	6.82	欠損	サヌカイト	裏面からの平坦な剝離により刃部形成。

第26表 SB1008 出土遺物観察表 (1)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
125	弥生土器 鉢	G-5 SB1008		底部は丸底を呈す。 体部は内彎気味に外上方にたちあがる。	内外面とも剝離のため不明。	石英 結晶片岩 含	橙	

第27表 SB1008 出土遺物観察表 (2)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
126	弥生土器 鉢	G-5 SB1008		底部は丸底を呈す。 体部は内彎気味に外上方にたちあがる。	内外面とも磨耗のため不明。	石英 結晶片岩 含	橙	
127	弥生土器 鉢	SB1008	口径 10.9	内彎する体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は僅かに丸みをもたせ平坦におさめる。	口縁部外面タタキ。内面ナデ。 体部外面はナデ。内面上部にハケ目、下部はナデ。	石英含	にぶい橙	
128	弥生土器 甕	SB1008	底径 6.0	底部は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがり、体部上位で内彎する。	体部外面ハケ。内面ケズリ、上部に接合痕。 底部外面は回転ヘラケズリ、内面はユビオサエ。	石英含	(内) 橙 (外) にぶい黄橙	

第28表 SD1002 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
129	弥生土器 壺	SD1002	口径 13.0 底径 5.5 器高 24.0	体部は直線的に外上方にたちあがり、中位で最大径をもつ。 内彎する体部から鋭く外方に屈曲して口縁部を形成する。 口縁端部はやや丸くおさめる。	口縁部は内外面ともナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ。 底部内面にユビオサエ痕。外面はハケ。	石英含	にぶい橙	

第29表 SP1007 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
130	弥生土器 甕	SP1007	口径 13.6	内彎気味にたちあがる体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面はタタキのちナデ、内面はハケ。 体部外面タタキ後ナデ、内面はヨコナデ。		橙	
131	弥生土器 壺	K-1 SP1007	底径 2.4	底面は突出した丸底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面はタタキ後ナデ。		橙	

第30表 SP1113 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
132	弥生土器 甕	SP1003	口径 15.9 底径 6.5 器高 32.4	体部は内彎気味に外上方にたちあがり、上位で大きく内彎する 口縁部は体部から「く」の字状に外反して形成する。 口縁端部は平坦におさめ、1条の擬凹線を巡らす。	口縁部外面にユビオサエ痕、内面ナデ。 体部外面ハケ、内面はケズリ。	石英含	(内) にぶい橙 (外) にぶい黄褐	

第31表 SP1141 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
133	弥生土器 甕	F-3～ G-3 SP1141	底径 6.7	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はハケ後ナデ。 内面ナデ。	石英含	橙	

第32表 SX1001 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
134	弥生土器 壺	SX1001	底径 5.6	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ。		(内) 黒 (外) 赤橙	
135	弥生土器 甕	SX1001	底径 4.6	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はハケ。 内面はケズリ。		(内) にぶい橙 (外) 明赤褐	
136	弥生土器 壺	SX1001	底径 5.2	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ。		明赤褐	
137	弥生土器 鉢	SX1001	口径 21.6	体部は直線的にたちあがる。 口縁端部は平坦におさめ、端面に1条の凹線を施す。 口縁端部は丸くおさめる。	内外面ともにナデ。		(内) 明赤褐 (外) にぶい橙	
138	弥生土器 甕	SX1001	口径 18.3	内彎してたちあがる体部から、「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部内外面ともにヨコナデ。 体部外面はハケ。 内面はケズリ後ナデ。		明赤褐	
139	弥生土器 甕	SX1001	口径 12.0	内彎してたちあがる体部から、「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。 体部外面タテハケ後ナデ。 内面はケズリ後ナデ。		(内) 黒褐 (外) にぶい赤褐	

第33表 包含層 出土遺物観察表 (1)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
140	弥生土器 壺	包含層	口径 13.0	緩やかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は平坦におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面にタテハケ。		灰褐	
141	弥生土器 壺	包含層	口径 10.0	直立する頸部から緩やかに屈曲して外反する短い口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。	内外面とも剝離のため不明。		橙	
142	弥生土器 壺	包含層	口径 20.0	直線的に外反してたちあがる頸部から「く」の字状に屈曲して内彎する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部外面に波状文らしきものをのこす。 内面はハケ。		橙	
143	弥生土器 壺	包含層	底径 5.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面タテハケ。 内面ヘラケズリ。		(内) 黒褐 (外) にぶい橙	
144	弥生土器 壺	包含層	底径 5.6	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はハケ後ミガキ。 内面はヘラケズリ。	結晶片岩 石英 含	(内) 黒 (外) にぶい橙	
145	弥生土器 壺	包含層	底径 6.0	底面は僅かに上げ底を呈す。 体部は内彎して外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ後ナデ。		にぶい橙	
146	弥生土器 壺	包含層	底径 6.2	底面は平底を呈す。 体部は僅かに内彎しながら外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ。		橙	

第34表 包含層 出土遺物観察表 (2)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
147	弥生土器壺	包含層	底径 6.0	底面は平底を呈す。 体部は外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ。	結晶片岩 含	にぶい黄橙	
148	弥生土器壺	包含層	底径 6.5	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はタテヘラミガキ。 内面はヘラケズリ。		にぶい黄橙	
149	弥生土器壺	包含層	底径 7.6	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面タテハケ。 内面は剥離のため不明。		にぶい橙	
150	弥生土器壺	包含層	底径 6.4	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はハケ後タテヘラミガキ。 内面はヘラケズリ。		(内) にぶい黄橙 (外) 黒	
151	弥生土器壺	包含層	底径 5.8	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はハケ後ヘラミガキ。 内面はヘラケズリ。		(内) にぶい黄橙 (外) 橙	
152	弥生土器壺	包含層	底径 5.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面はタタキ後タテハケ。 内面はヘラケズリ。		橙	
153	弥生土器壺	包含層	底径 8.2	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面剥離のため不明。 内面はヘラケズリ。		灰褐	
154	弥生土器壺	包含層	底径 5.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎して大きく外方にたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。		橙	
155	弥生土器壺	包含層	底径 6.4	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はヘラミガキ。 内面は剥離のため不明。		橙	
156	弥生土器壺	包含層	底径 6.4	底面は僅かに上げ底を呈す。 体部は直線的に大きく外方にたちあがる。	体部外面ハケ後ナデ。 内面はヘラケズリ。		(内) 褐灰 (外) 橙	
157	弥生土器甕	包含層	底径 3.7	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。		橙	
158	弥生土器甕	包含層	底径 5.8	底面は僅かに上げ底を呈す。 体部は僅かに内彎気味に大きく外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はナデ。		(内) にぶい黄橙 (外) 赤橙	
159	弥生土器有孔鉢	包含層	底径 3.6	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面上半にタタキ、 下半にタテハケ。 内面はヘラケズリ。		橙	
160	弥生土器ミニチュア土器	包含層	底径 2.0	底面は僅かに上げ底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面は剥離のため不明。		橙	
161	弥生土器ミニチュア土器	包含層	底径 1.4	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。		橙	
162	弥生土器ミニチュア土器	包含層	底径 2.2	底面はやや上げ底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	内外面ともナデ。		橙	

第35表 包含層 出土遺物観察表 (3)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
163	弥生土器 高杯	包含層	底径 9.4	杯部は直線的にたちあがる。脚台は外反して下外方に伸び、脚端は丸くおさめる。	杯部外面へラミガキとハケ。内面にユビオサエ痕。脚柱部外面タテヘラミガキ。内面へラケズリ。		橙	
164	弥生土器 甕	包含層	口径 13.4	内彎してたちあがる体部から、「く」の字状に外反する口縁部をもつ。 口縁端部は僅かに拡張する。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ヨコナデ、内面はヘラケズリ。		橙	
165	弥生土器 甕	包含層	口径 13.0	内傾する体部から「く」の字状に屈曲し外反する口縁部をもつ。口縁端部は平坦におさめる。	口縁部外面はヨコナデ。体部外面はタテハケ、内面はヨコハケ。	結晶片岩 石英 含	にぶい橙	
166	弥生土器 甕	包含層	口径 12.8	内彎気味にたちあがる体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともにナデ。体部外面ハケ後タタキ。内面はケズリ後ナデ。	結晶片岩 石英 含	にぶい赤褐	
167	弥生土器 甕	包含層	口径 13.8 胴部最大径 13.8	内彎気味にたちあがる体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。	口縁部外面はハケ。 体部外面はハケ。 内面は剥離のため不明。		橙	
168	弥生土器 甕	包含層	口径 12.0 胴部最大径 12.8	内彎してたちあがる体部から、「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	全面剥離が激しいが、口縁部と体部の外面の一部にハケがみられる。 内面は剥離のため不明。	結晶片岩 石英 含	橙	
169	弥生土器 甕	包含層	口径 14.7	口縁部は外反し、口縁端部は下方に拡張する。 口縁端面に2条の凹線を施す。	口縁部外面はヨコナデ。 内面はハケ後ヨコナデ。		(内) にぶい黄橙 (外) 黒	
170	弥生土器 鉢	包含層	口径 23.0	内彎気味にたちあがる体部から緩やかに外反する口縁部をもつ 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部外面タタキ後ヨコナデ、内面ヨコナデ。 体部外面タタキ後ヨコナデ、内面ナデ。		橙	
171	弥生土器 鉢	包含層	口径 21.0	緩やかに外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	内外面とも剥離のため不明。	石英含	橙	
172	弥生土器 鉢	包含層	口径 20.0	内彎気味にたちあがる体部から屈曲して外反する口縁部をもつ 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部内外面ともヨコナデ。 体部外面タテハケ、内面ヨコヘラミガキ。		(内) 灰褐 (外) 橙	
173	弥生土器 鉢	包含層	口径 14.1	内彎してたちあがる体部から緩やかに屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部内外面ともヨコナデ。 体部外面はハケ後ヨコナデ。		橙	
174	弥生土器 鉢	包含層		底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ。	結晶片岩 含	にぶい黄橙	
175	弥生土器 壺	包含層	口径 16.0	緩やかに屈曲して外反する短い口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面はタタキ。 内面はヨコナデ。		(内) 明赤褐 (外) 赤灰	
176	弥生土器 壺	包含層	口径 14.0	内彎してたちあがる体部から屈曲してやや開き気味の頸部、さらに緩やかに外反する口縁部をもつ。 口縁端部は肥厚させ、3条の凹線を施す。	頸部内面はヨコナデ。 体部外面はタタキ後ナデ。 内面はヘラケズリ。		にぶい褐	

第36表 包含層 出土遺物観察表 (4)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
177	弥生土器 壺	包含層	底径 5.5	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	体部外面はタテハケ。 内面はヘラケズリ。	結晶片岩 含	(内) 黒褐 (外) 橙	
178	弥生土器 壺	包含層	底径 6.4	底面は平底を呈す。 体部は僅かに内彎気味に大きく外方にたちあがる。	体部外面はハケ後ナデ。 内面はヘラケズリ後ナデ。	結晶片岩 石英 含	橙	
179	弥生土器 壺	包含層	底径 6.0	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に大きく外方にたちあがる。	体部外面タテヘラミガキ。 内面はナデ。		(内) にぶい黄橙 (外) 黒	
180	弥生土器 壺	包含層	底径 3.6	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあがる。	体部外面はタタキ後ナデ。 内面は剥離のため不明。		(内) 橙 (外) 赤橙	
181	弥生土器 壺	包含層	口径 20.0	内彎気味にたちあがる体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。	口縁部内外面ともにヨコナデ。 体部外面はタテハケ、内面はヨコハケ。		橙	
182	弥生土器 甕	包含層	底径 15.5	内傾する体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。 口縁端部はわずかに上下に拡張し、端面は平坦におさめる。	口縁部内外面ともにヨコナデ。 体部外面はタタキ後ナデ。 内面はタテ方向にナデの後ヘラケズリ。	結晶片岩 石英 長石 含	(内) にぶい黄褐 (外) 橙	
183	弥生土器 甕	包含層	底径 4.2	底面は平底を呈す。 体部は僅かに内彎気味にたちあがる。	体部外面ハケ後ナデ。 内面はケズリ後ナデ。 底部外面はハケ後タタキとナデ。	結晶片岩 含	赤褐	
184	弥生土器 甕	包含層	底径 3.7	底面はわずかに突出した平底を呈し、体部は内彎気味に外方にたちあがる。	体部外面はハケ後ナデ。 内面はヘラケズリ後ナデ。		橙	
185	弥生土器 鉢	包含層	口径 19.9	体部は内彎してたちあがる。 口縁部は緩やかに外反し、端部は平坦におさめる。 端面に1条の擬凹線を施す。	体部外面はハケ後タタキ。 内面は剥離のため不明。	石英含	橙	
186	弥生土器 鉢	包含層	口径 20.6 底径 3.6 器高 7.8	底面は僅かに平底を呈す。 体部は内彎気味に緩やかにたちあがる。	体部外面ハケ後ナデ。 内面はナデ。		橙	
187	弥生土器 甕	包含層	口径 13.8	内彎してたちあがる体部から、「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。	口縁部外面はタタキ、内面はヨコナデ。 体部外面はタタキ後ハケ。内面はハケ。		(内) 明赤褐 (外) 黒褐	
188	弥生土器 甕	包含層	口径 14.0 胴部最大 14.9	内彎してたちあがる卵形に近い体部から緩やかに外反してたちあがる口縁部をもつ。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面はヨコナデ。 体部外面は水平タタキ後ナデ。内面上半にユビオサエ痕が多数のこる。内面下半はヘラケズリ。		橙	
189	弥生土器 鉢	包含層	底径 1.6	底面は丸底を呈す。 体部は内彎気味にたちあがる。	体部外面ともハケ。		明赤褐	
190	弥生土器 高杯	包含層	底径 13.9	脚台部は直線的に大きく下外方にのび、脚端は平坦におさめる。	脚台部外面はハケ後ナデ。 内面はケズリ後ナデ。 脚端部内外面ともにヨコナデ。		明赤褐	

第37表 包含層 出土遺物観察表 (5)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
191	弥生土器 ミニチュア 土器	包含層	底径 1.9	底面は平底を呈す。 体部は直線的にたちあがる。	内外面とも磨耗のため不明。	結晶片岩 石英 含	(内) 黄灰 (外) にぶい黄橙	
192	弥生土器 高杯	包含層	口径 11.2	体部は直線的にたちあがり、口 縁部で僅かに内彎する。 口縁端部は尖り気味に薄くおさ める。	体部外面はケズリ。	石英含	(内) 橙 (外) にぶい橙	
193	弥生土器 壺	包含層	底径 4.4	底面は平底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあが る。	体部外面タテハケ。 内面はヘラケズリ。		にぶい橙	
194	弥生土器 壺	包含層	底径 4.4	底面は平底を呈す。 体部は内彎気味に外方にたちあ がる。	外面は剥離のため不明。 内面はヘラケズリ。		(内) 灰褐 (外) 橙	
195	弥生土器 鉢	包含層	口径 20.0	内彎気味にたちあがる体部から 緩やかに屈曲して外反する口縁 部をもつ。	内外面とも剥離のため不明。		赤橙	
196	弥生土器 高杯	包含層		脚柱部はほぼ直線的にたちあが る。	脚柱部外面ハケ。 内面ヘラケズリ。		橙	
197	弥生土器 深鉢	包含層	底径 10.5	底面はやや上げ底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあが る。			(内) 褐灰 (外) にぶい黄橙	

第38表 包含層 出土遺物観察表 (6)

番号	器種	地点層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石材	特徴・備考
198	石鎌	包含層	1.6	1.0	0.3	0.39	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎
199	石鎌	包含層	2.0	1.3	0.4	0.61	先端基部欠 損	サヌカイト	凹基無茎

第39表 SX1002 出土遺物観察表 (1)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
200	室町時代 土師質鍋	SX1002	口径 30.0	「く」の字状の口縁部をもち、 端部は広い。	内外面とも磨耗のため不明。		(内) 橙 (外) 暗褐	
201	室町時代 土師質鍋	SX1002	口径 29.0	「く」の字状の口縁をもつ。 口縁部はやや内彎し、端面は丸 い。	口縁部内面ユビオサエ後 ナデ。 内面はヨコナデ。	石英含	橙	
202	室町時代 土師質釜	SX1002	口径 20.0	口縁部は内彎する。体部も内彎 し、断面三角形状の短い鍔がつ く。脚が付く。	口縁部外面ユビオサエ後 ナデ。内面はナデ。 体部外面ユビオサエ後ナ デ。		橙	
203	室町時代 土師質釜	SX1002	口径 23.0	体部口縁部は内彎する。 断面三角形状の小さい鍔がつ く。 口縁端部はやや拡張し、端部は 丸くおさめる。	体部外面ナデ。		(内) にぶい橙 (外) にぶい赤褐	

第40表 SX1002 出土遺物観察表 (2)

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
204	室町時代 土師質釜	SX1002	口径 30.2	体部から口縁部にかけて直線的で、口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ナデ。脚部はヘラケズリ後ナデ。		体部外面に 煤付着	
205	室町時代 土師質釜	SX1002	口径 26.0	体部は直線的で口縁部は僅かに内彎する。 口縁端部は丸くおさめる。 断面三角形の小さな鍔がつく。	口縁部内外面ともヨコナデ。 体部外面ユビオサエ後ナデ。		黄橙	
206	室町時代 土師質釜	SX1002	口径 28.0	体部・口縁部は直線的である。 口縁端部は丸くおさめる。 断面三角形の短い鍔がつく。	体部外面・内面ともにユビオサエ後ナデ。		赤橙	
207	室町時代 土師質釜	SX1002	口径 26.5	体部はやや内彎し、口縁部はやや外反する。 断面三角形の短い鍔がつく。 口縁端部は丸い。	口縁部外面ヨコナデ。 内面はナデ。 体部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。		(内) 橙 (外) 灰褐	
208	室町時代 土師質釜	SX1002	口径 25.0	直立する口縁部に断面三角形の短い鍔がつく。体部は内彎する 口縁端部は平坦におさめる。	口縁部外面ヨコナデ、内面はナデ。 体部内外面ともにナデ。		明赤褐	
209	室町時代 土師質釜	SX1002	口径 29.4	体部口縁部は内彎する。 口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面ともヨコナデ。 体部外面ユビオサエ後ナデ。内面はナデ。		橙	
210	室町時代 土師質釜	SX1002	口径 28.0	体部・口縁部は直線的である。 口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面ヨコナデ、内面はユビオサエ後ヨコナデ。 体部内外面ともヨコナデ。		(内) 浅黄橙 (外) にぶい黄橙	
211	室町時代 土師質釜	SX1002	口径 24.0	体部・口縁部は直線的である。 口縁端部は丸くおさめる。 断面三角形の短い鍔がつく。	口縁部外面ナデ、内面はユビオサエ後ナデ。 体部外面ユビオサエ後ナデ、内面はナデ。		にぶい黄橙	
212	室町時代 磁器碗	SX1002	高台径 6.0	底部の器壁は厚い。 高台断面は方形でやや高めである。 底部内面にスタンプ文を施す。	高台底部外面以外の部分に濃緑色釉を施す。		(素地) 灰白	青磁
213	室町時代 土師質杯	SX1002	口径 8.4 底径 6.8 器高 2.7	体部は直線的にたちあがる。 口縁端部は丸くおさめる。	体部・口縁部内外面ともナデ。	石英 結晶片岩 含	橙	
214	室町時代 土師質杯	SX1002	底径 7.0	底部外面はやや上がる。	体部内外面ナデ。		橙	
215	室町時代 磁器碗	SX1002	高台径 3.6	底部の器壁はうすい。 高台断面は逆台形状で低い。			(素地) 灰白	白磁
216	室町時代 土師質擂鉢	K-3 SX1002	底径 15.3	体部はわずかに外反気味に外方にたちあがる。	体部内面に7条単位の櫛描き条線。		(内) 橙 (外) 赤橙	
217	室町時代 土師質脚部	SX1002	残存長10.9	断面はほぼ円形を呈す。 基部は大きく屈曲する。 身部は直線的である。	全体にユビオサエ後ヘラケズリ、さらにナデ。		赤褐	
218	室町時代 土師質脚部	SX1002	残存長10.2	断面はほぼ円形を呈す。 基部は大きく屈曲する。 身部は直線的である。	全体にヘラケズリ後ナデ。		にぶい黄橙	
219	室町時代 土師質脚部	SX1002	残存長13.5	断面はほぼ円形を呈す。 身部は直線的である。	全体にヘラケズリの後、タテ方向のナデ。		橙	煤付着

第41表 SK1018 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
220	室町時代 土師質鍋	SK1018	口径 28.0	口縁部はやや外反気味で、端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ナデ。内面にケズリ痕、外面にユビオサエ痕。		にぶい黄橙	
221	室町時代 土師質鍋	SK1018	口径 25.8	口縁部はやや外反気味で、肥厚する。	口縁部内外面ナデ。外面にユビオサエ痕。		橙	
222	室町時代 土師質釜	SK1018	口径 29.8	体部から口縁部にかけて直線的 口縁端部は丸くおさめる。 断面三角形状の小さい鍔がつく。	口縁部内外面ナデ。 体部外面ヘラケズリ。 外面にユビオサエ痕。		浅黄	
223	室町時代 土師質釜	SK1018	口径 23.0	体部・口縁部は直線的である。 口縁端部は丸くおさめる。 断面三角形状の小さい鍔がつく。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ユビオサエ後ヨコナデ。内面ヨコナデ。 鍔は貼り付け。		橙	外面に煤付着
224	室町時代 土師質釜	SK1018	口径 20.0	体部・口縁部は直線的である。 口縁端部は丸みをもつ。 断面三角形状の小さい鍔がつく。	全体にヘラケズリの後、タテ方向のナデ。		橙	煤付着

第42表 SP1217 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
225	室町時代 土師質杯	K-1 SP1217	口径 11.0 底径 7.0 器高 3.5	体部は内彎気味にたちあがる。 口縁端部はやや尖る。	体部外面ナデ。		橙	

第43表 SP1218 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	法量				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
226	銅錢	2.47	—	—	3.94	「景祐元宝」(初鑄年 1034年)
227	銅錢	2.44	—	—	5.65	「元豐通宝」2枚付着(初鑄年 1078年)

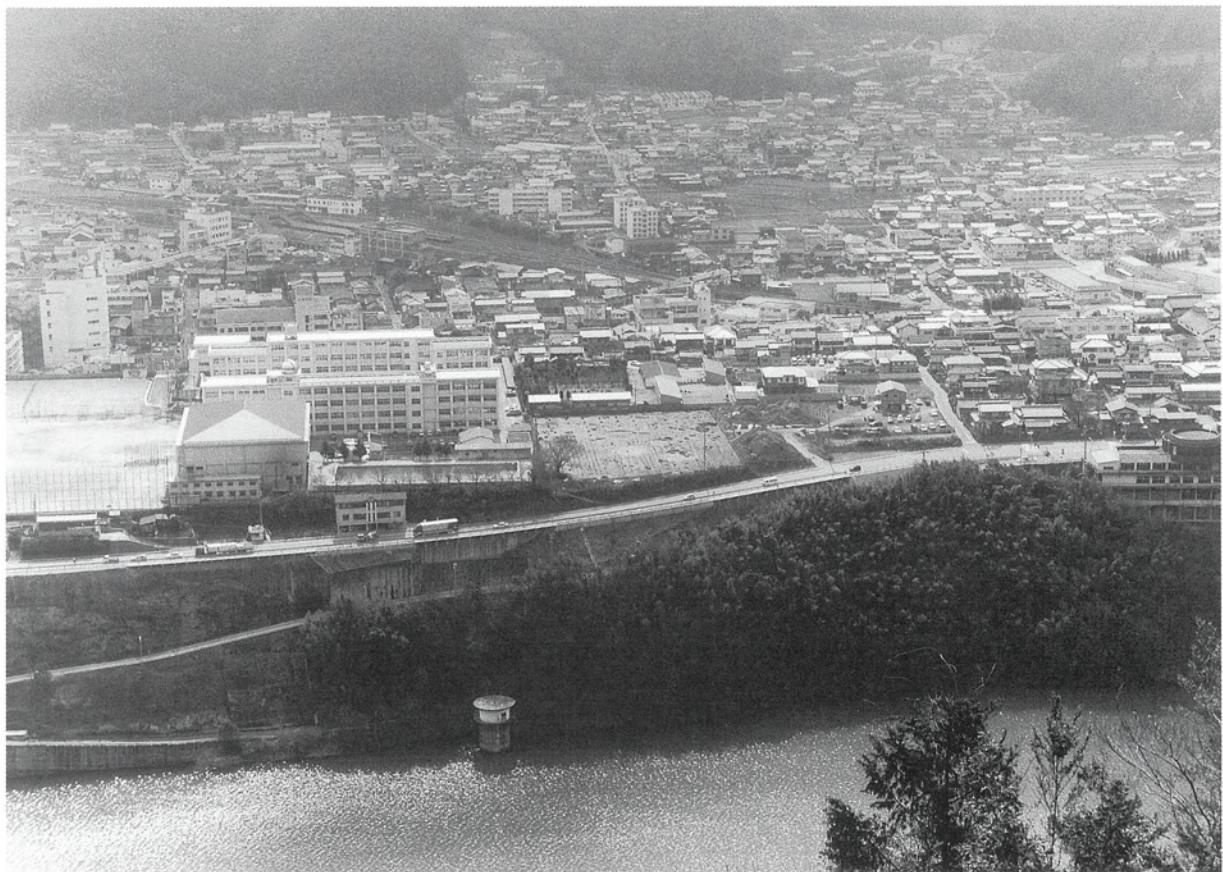
第44表 SP1221 出土遺物観察表 金属製品 (1)

番号	器種	法量				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
228	銅錢	2.48	—	—	1.87	「天聖元宝」(初鑄年 1023年)
229	銅錢	2.40	—	—	2.90	「皇宋通宝」(初鑄年 1038年)
230	銅錢	—	—	—	1.64	「皇宋通宝」欠損(初鑄年 1038年)
231	銅錢	2.38	—	—	3.18	「治平元宝」(初鑄年 1064年)
232	銅錢	2.42	—	—	3.39	「熙寧元宝」(初鑄年 1068年)
233	銅錢	2.42	—	—	2.82	「元祐通宝」(初鑄年 1086年)
234	銅錢	2.45	—	—	3.03	「元祐通宝」(初鑄年 1086年)
235	銅錢	2.43	—	—	2.78	「元祐通宝」(初鑄年 1086年)
236	銅錢	2.40	—	—	2.40	「紹聖元宝」(初鑄年 1094年)

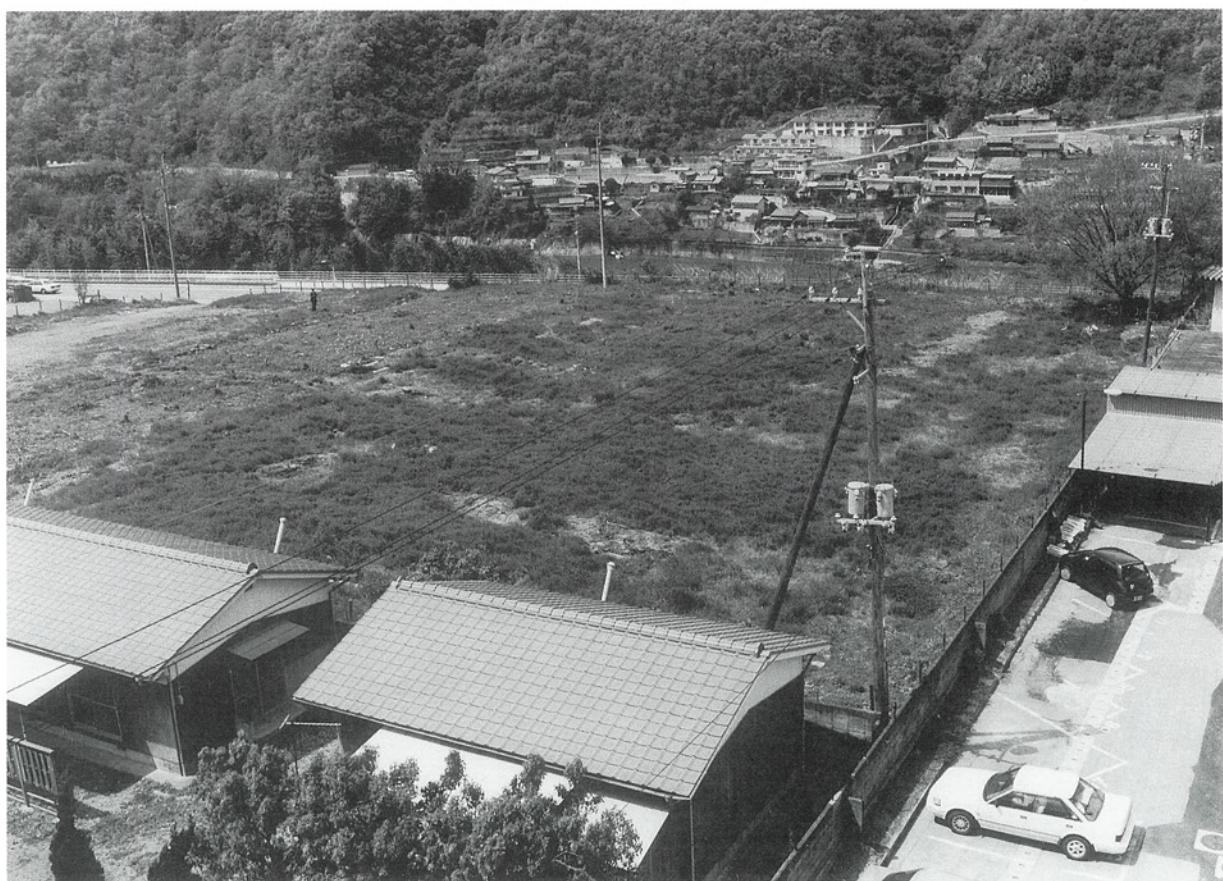
第45表 SP1221 出土遺物觀察表 金属製品 (2)

番号	器種	法量				備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
237	銅錢	2.39	—	—	3.01	「聖宋元宝」(初鑄年 1101年)
238	銅錢	2.53	—	—	1.72	不明 欠損
239	銅錢	—	—	—	0.84	不明 欠損

図 版

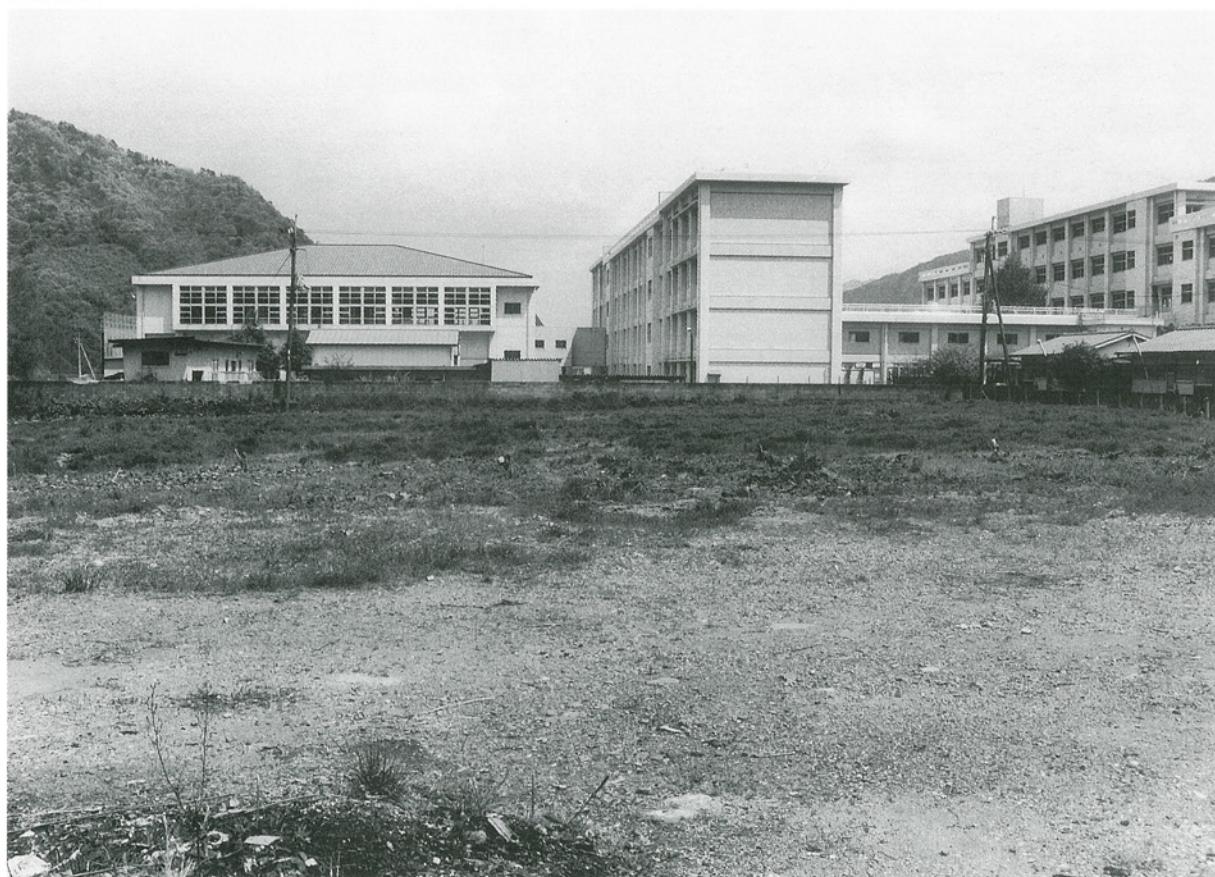


(1) 調査区遠望（北より）



(2) 調査前風景（南東より）

図版2



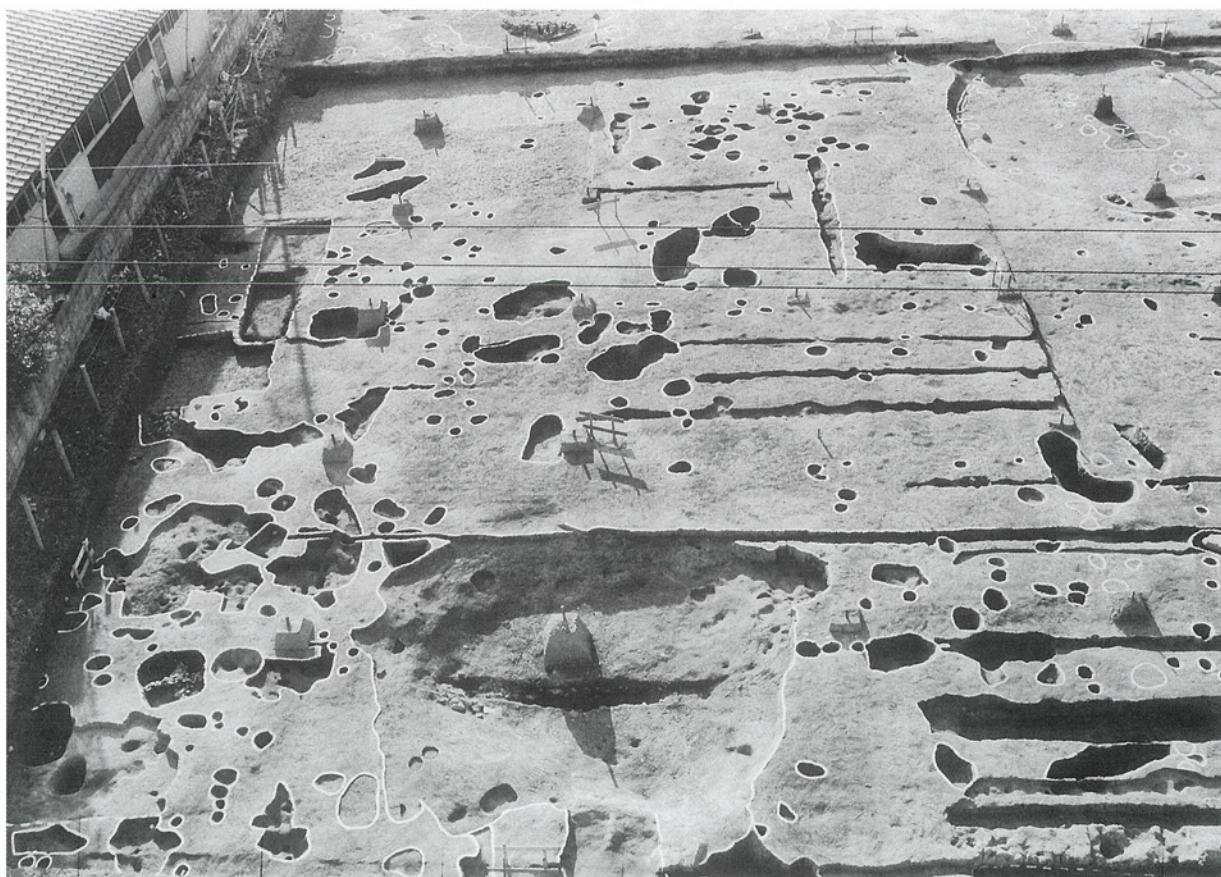
(1) 調査前風景（西より）



(2) 遺構検出状況（北西部）南より



(1) 遺構検出状況（南東部）東より

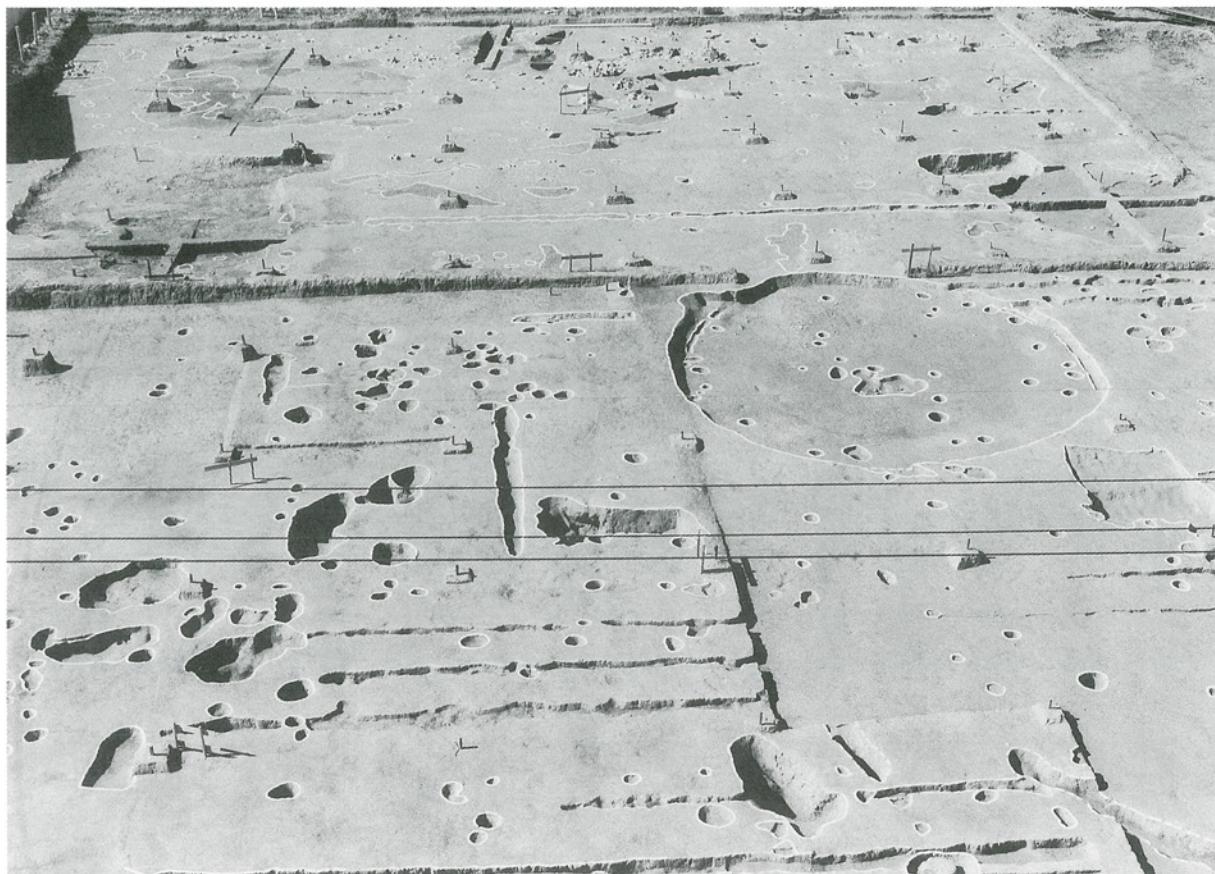


(2) 遺構完掘状況（南東部）東より

図版4



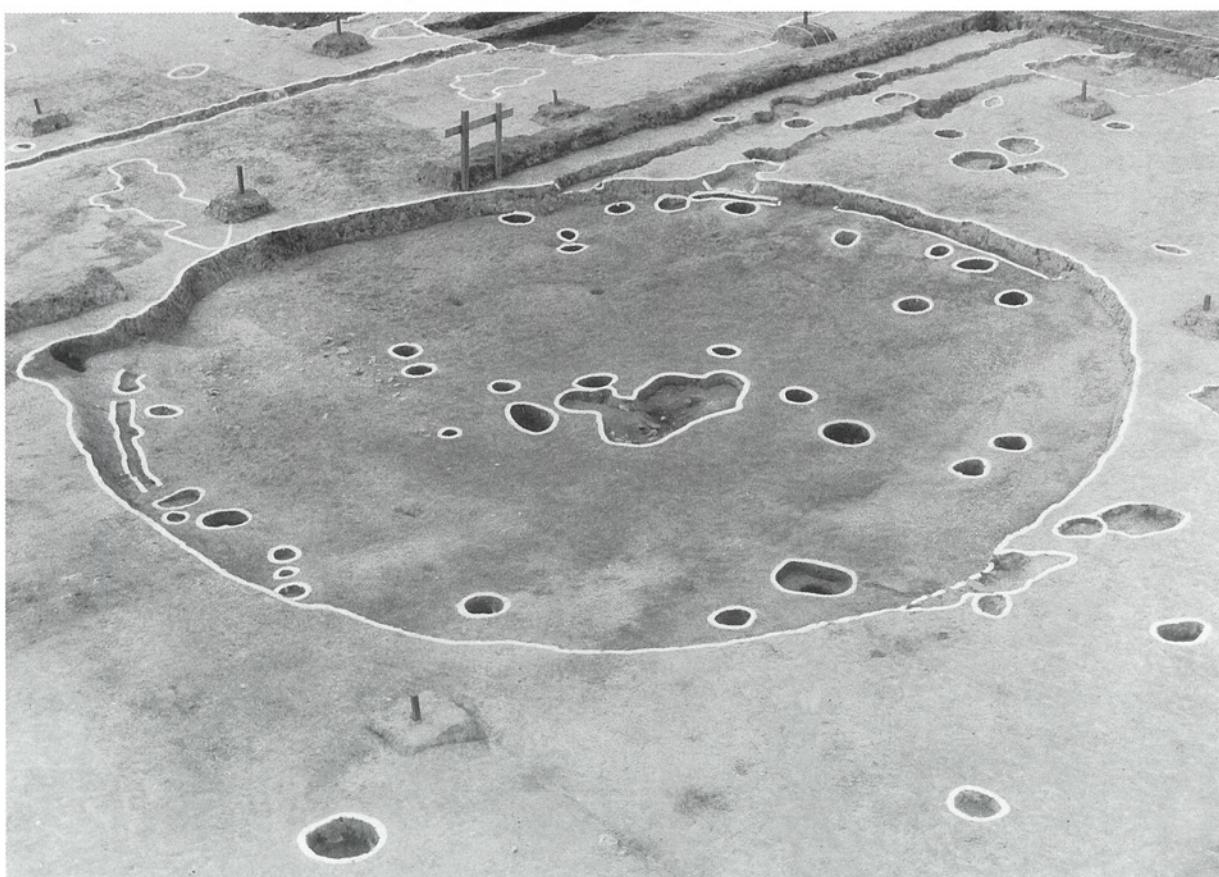
(1) 遺構検出状況（東半部）南より



(2) 遺構完掘状況（南半部）東より

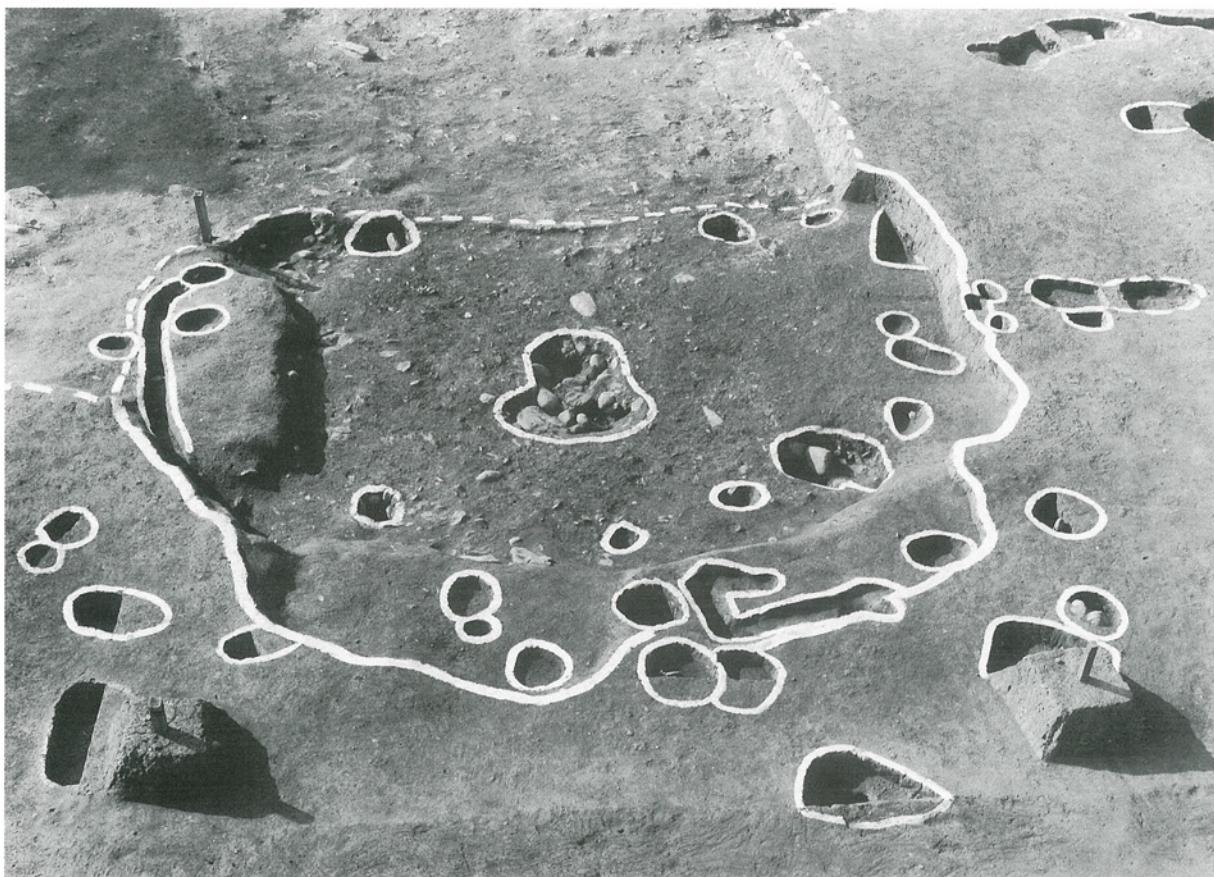


(1) 遺構検出状況（西端部）南より

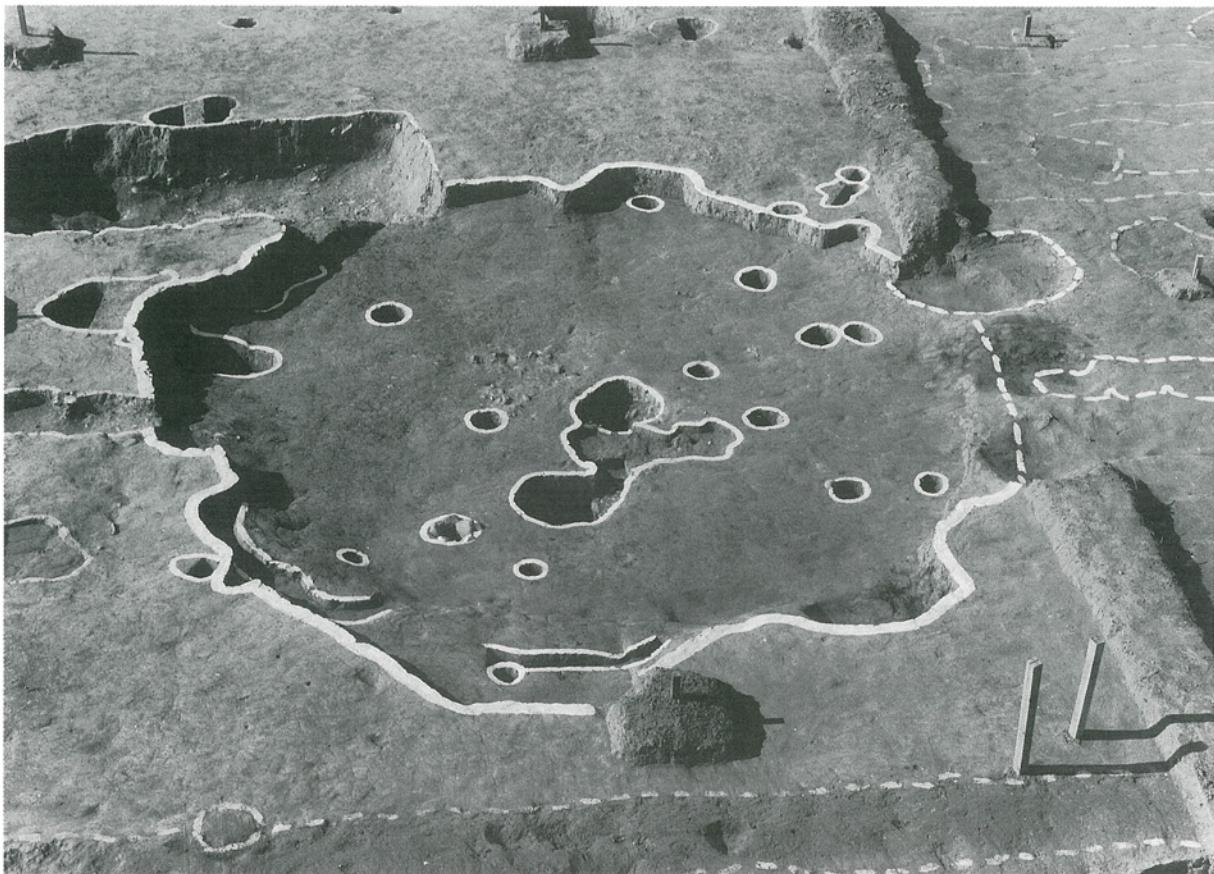


(2) SB1001完掘状況

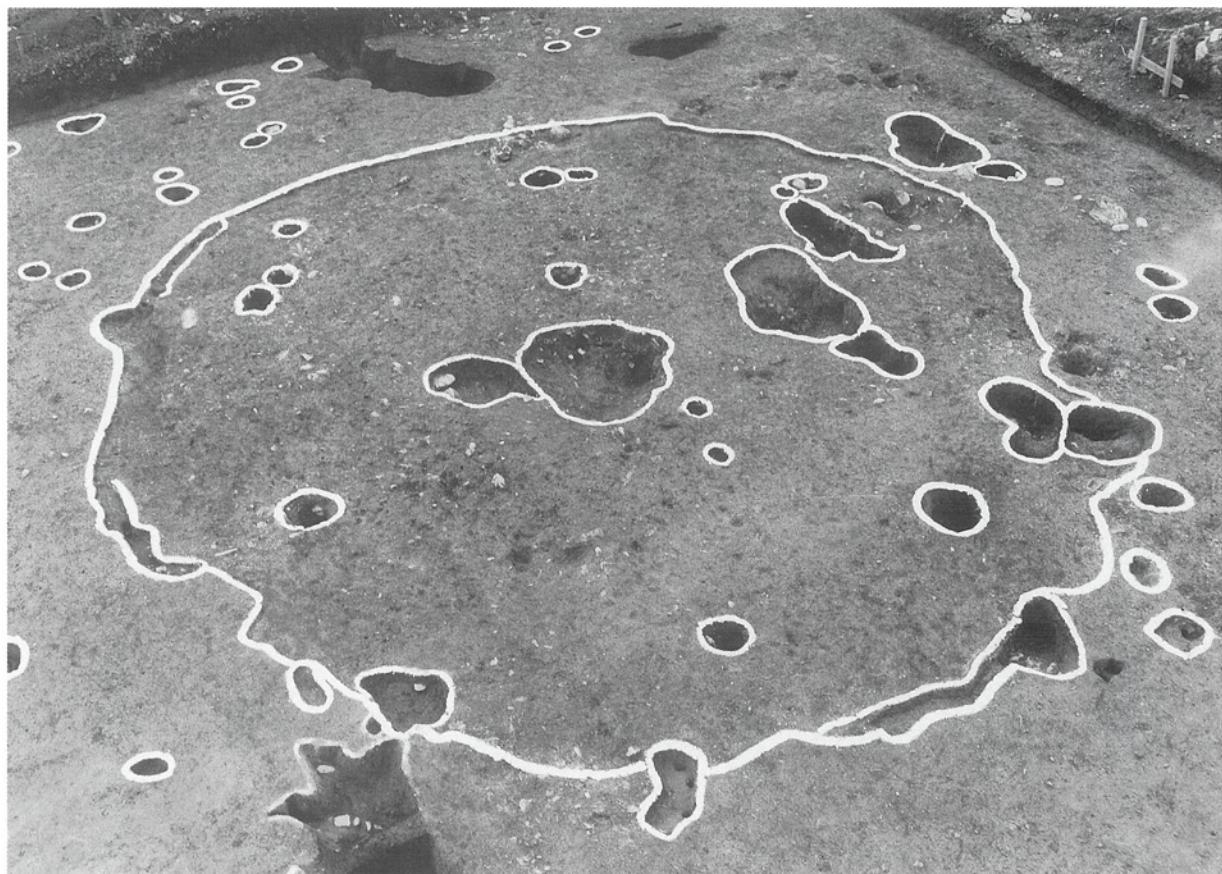
図版6



(1) SB1002完掘状況



(2) SB1003完掘状況



(1) SB1004完掘状況

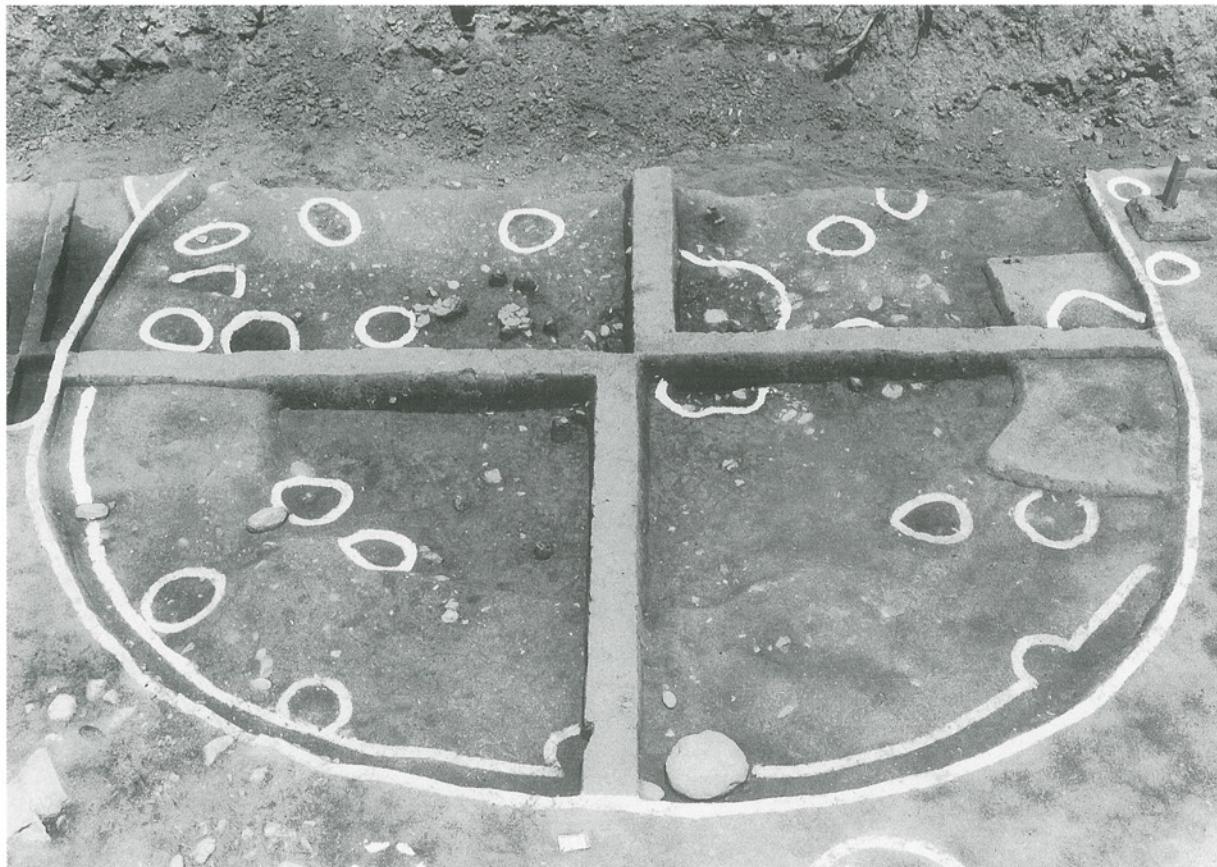


(2) SB1006完掘状況

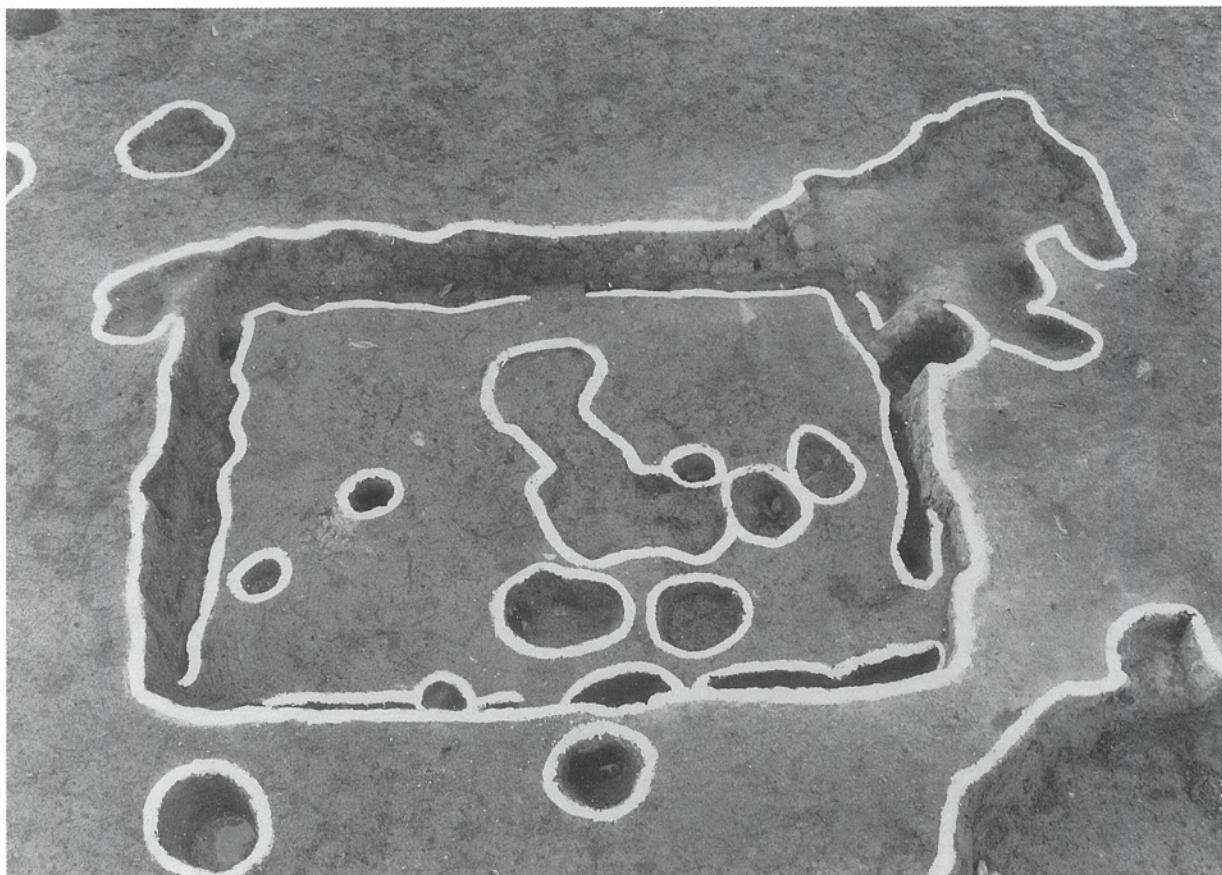
図版8



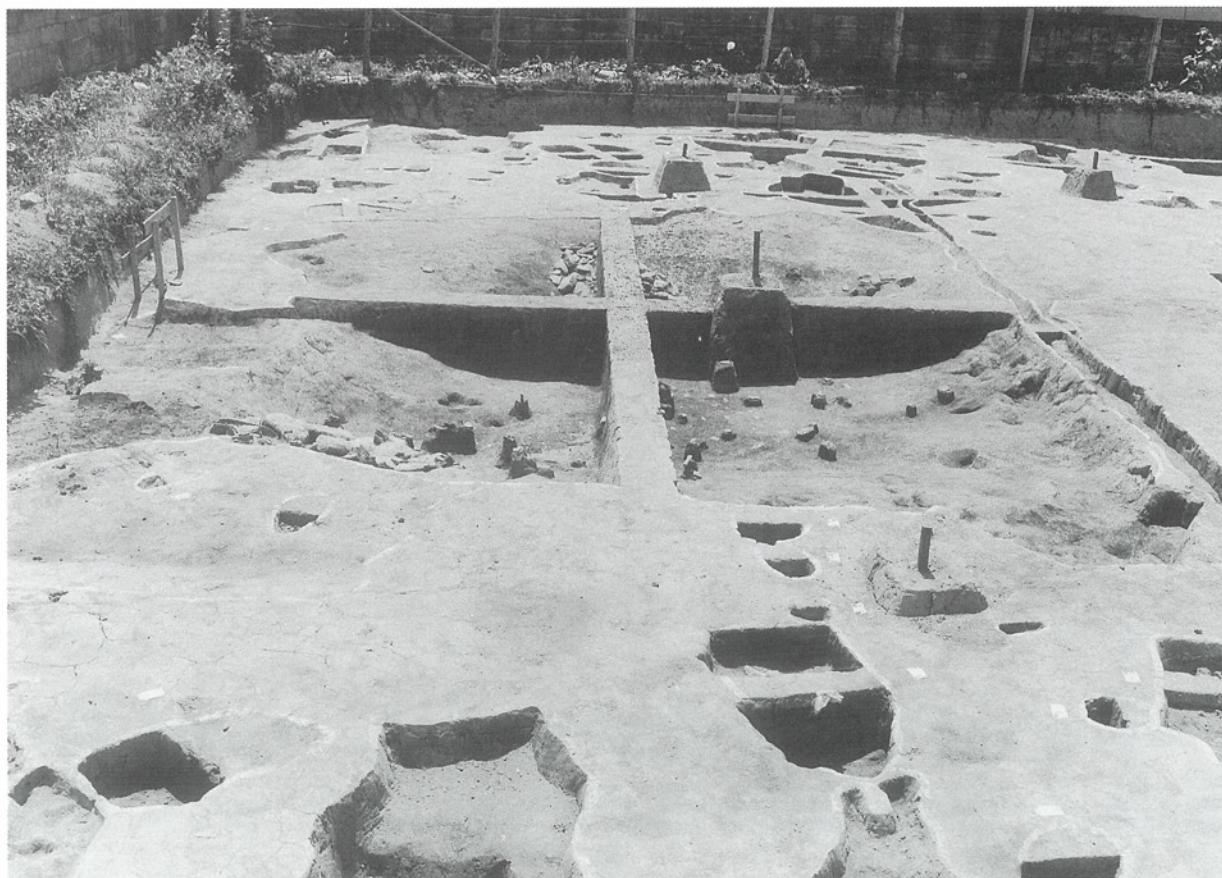
(1) SB1007完掘状況



(2) SB1008完掘状況

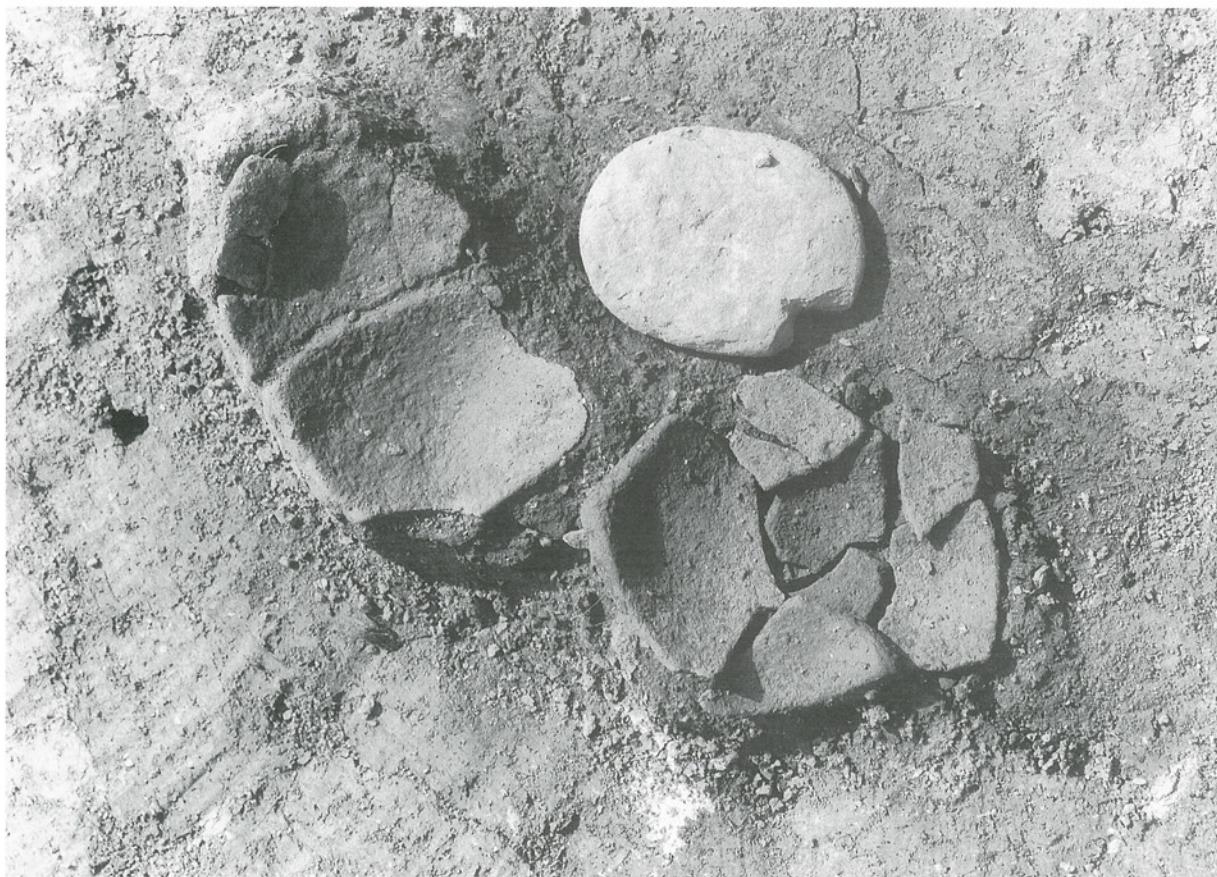


(1) SB1005完掘状況



(2) SK1001完掘状況

図版10



(1) SB1007遺物出土状況



(2) SB1007遺物出土状況

図版11

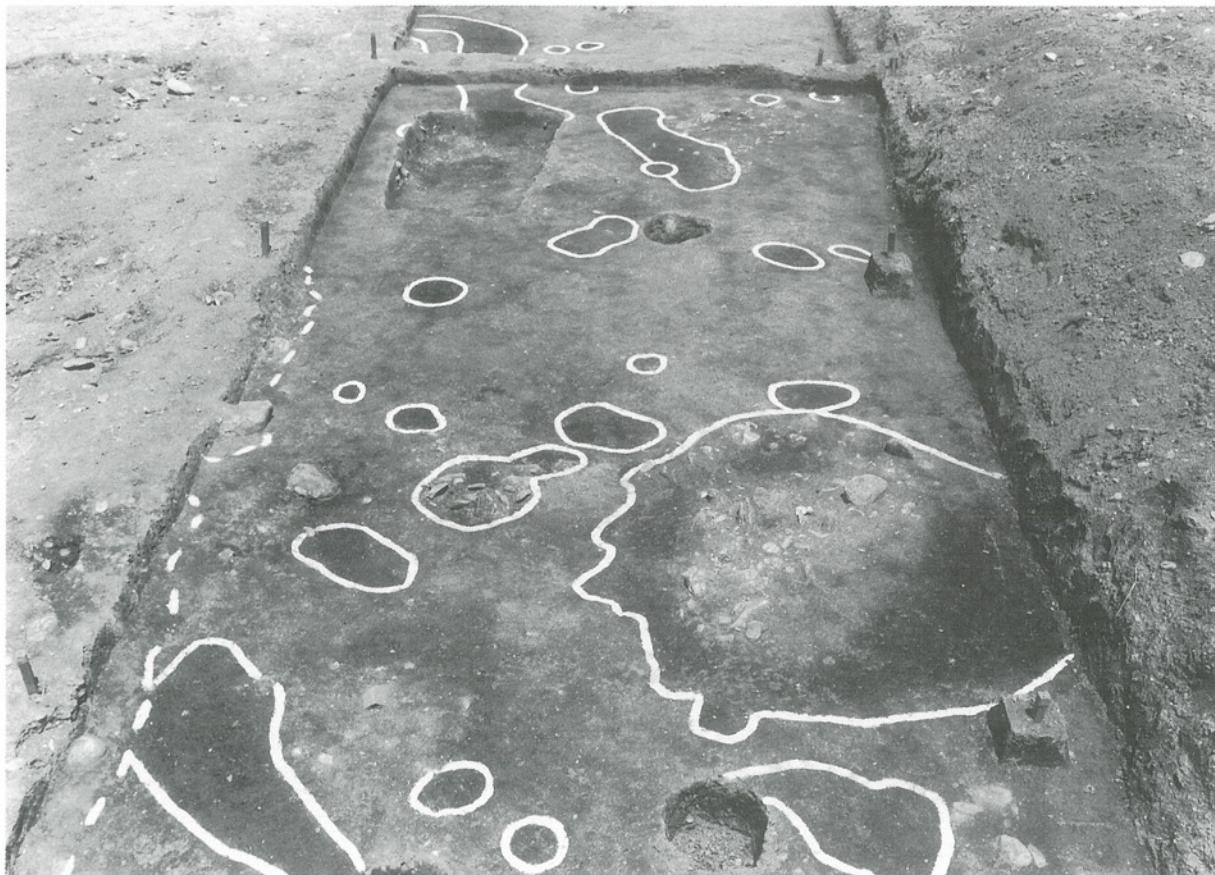


(1) SB1001内土器溜まり



(2) SK1001遺物出土状況

図版12



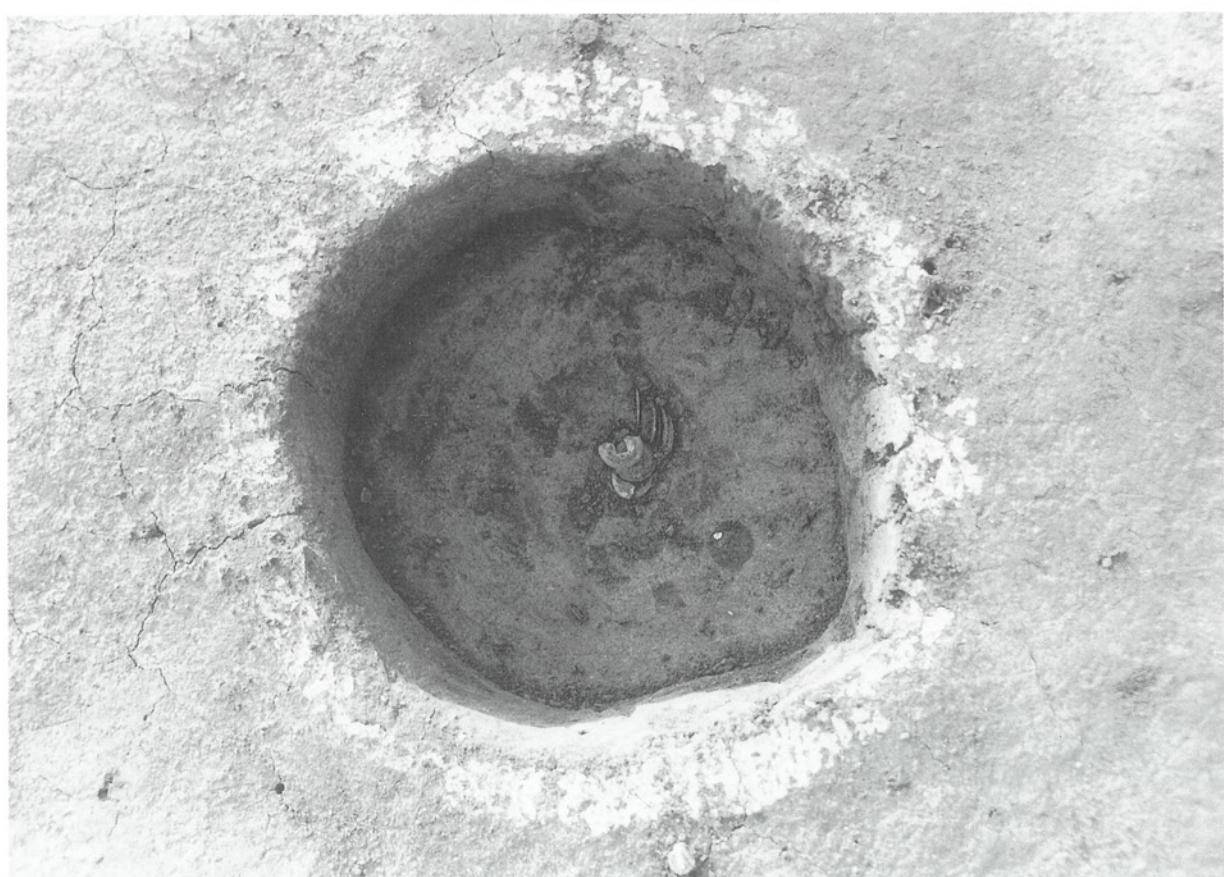
(1) 調査区西端遺構検出状況（2次調査）



(2) SX1002完掘状況



(1) SP1113遺物出土状況



(2) SP1221銅錢出土状況

図版14



(1) 包含層遺物出土状況



(2) 包含層遺物出土状況

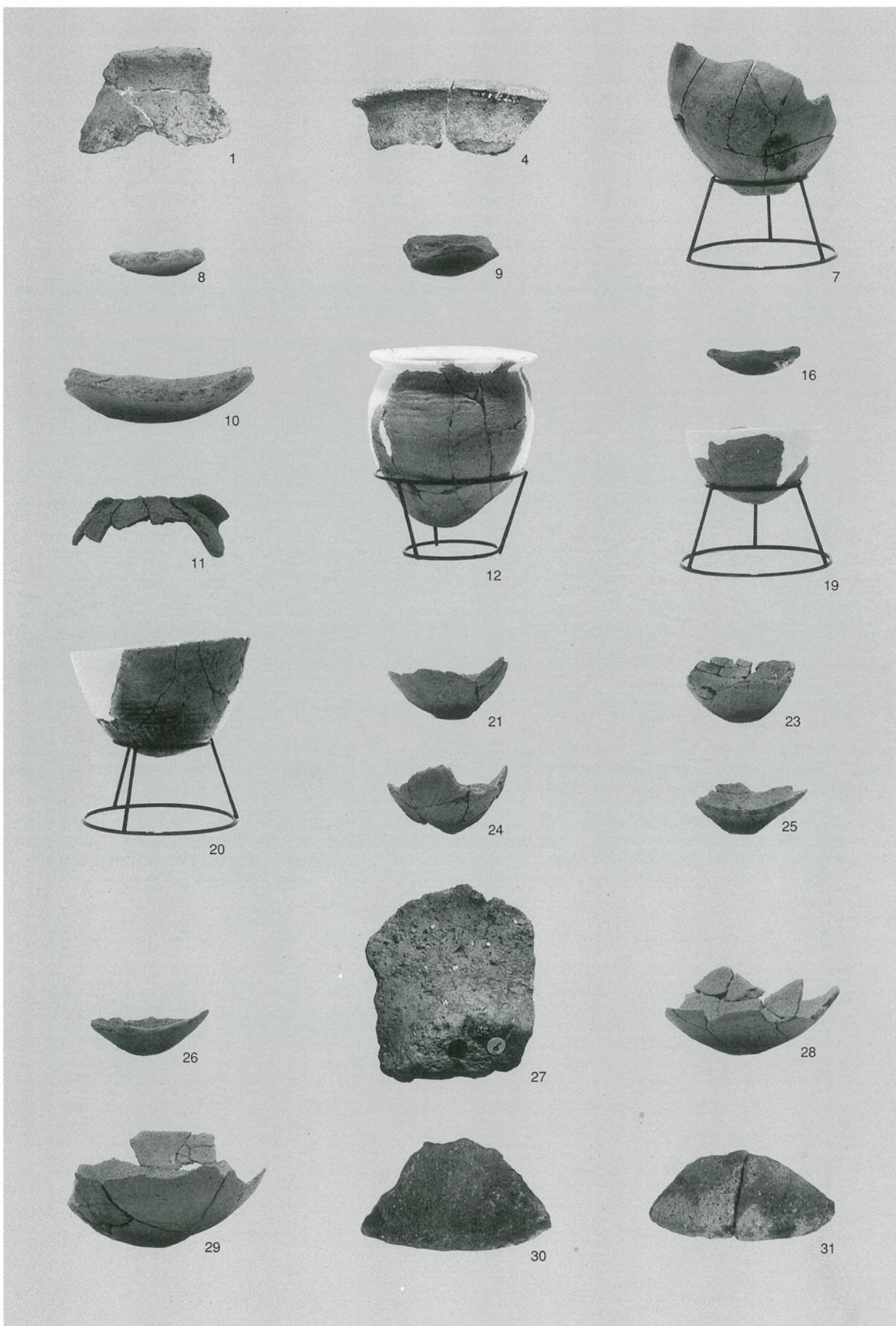


(1) 包含層遺物出土状況



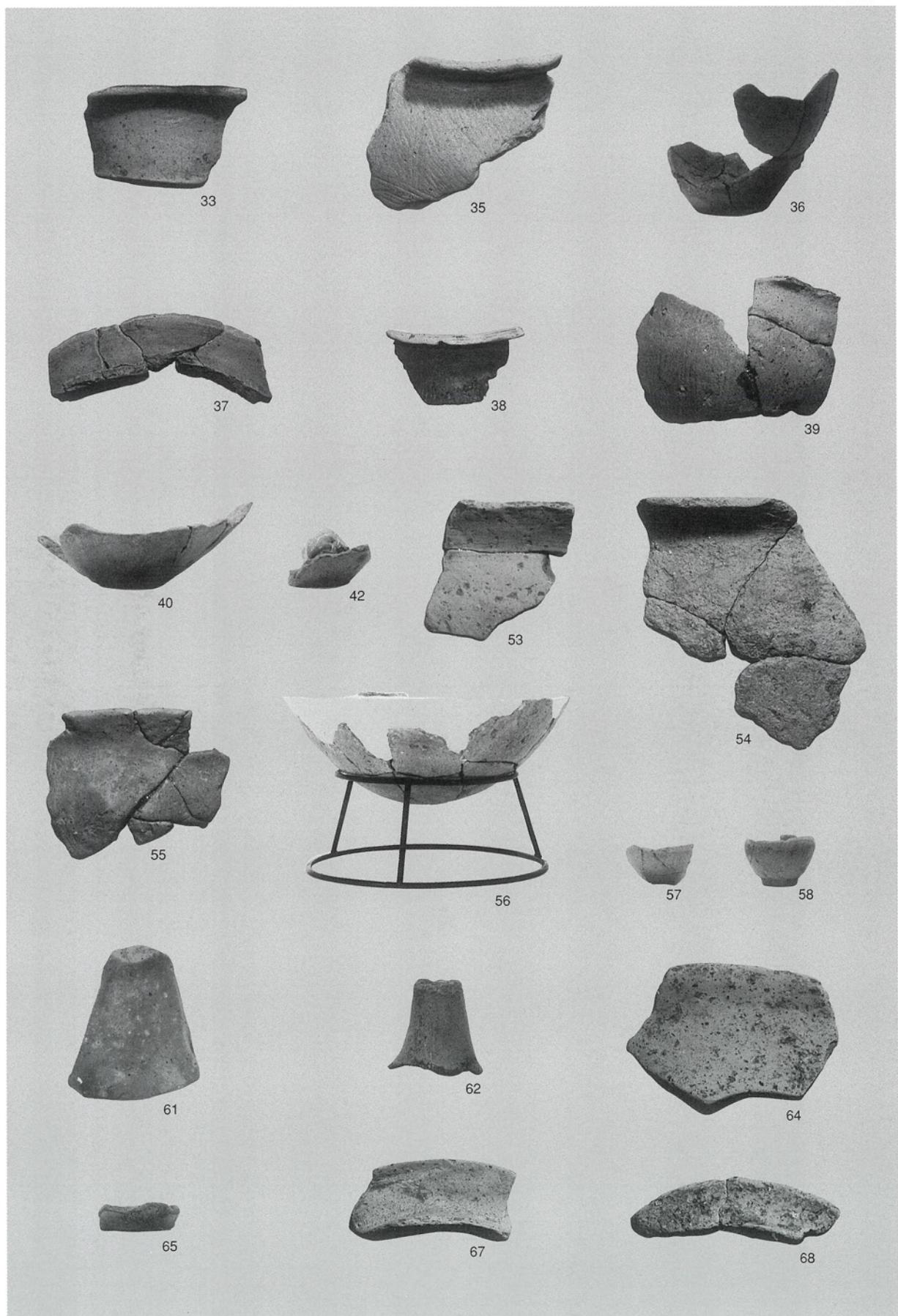
(2) 包含層遺物出土状況

図版16



出土遺物(1)

図版17



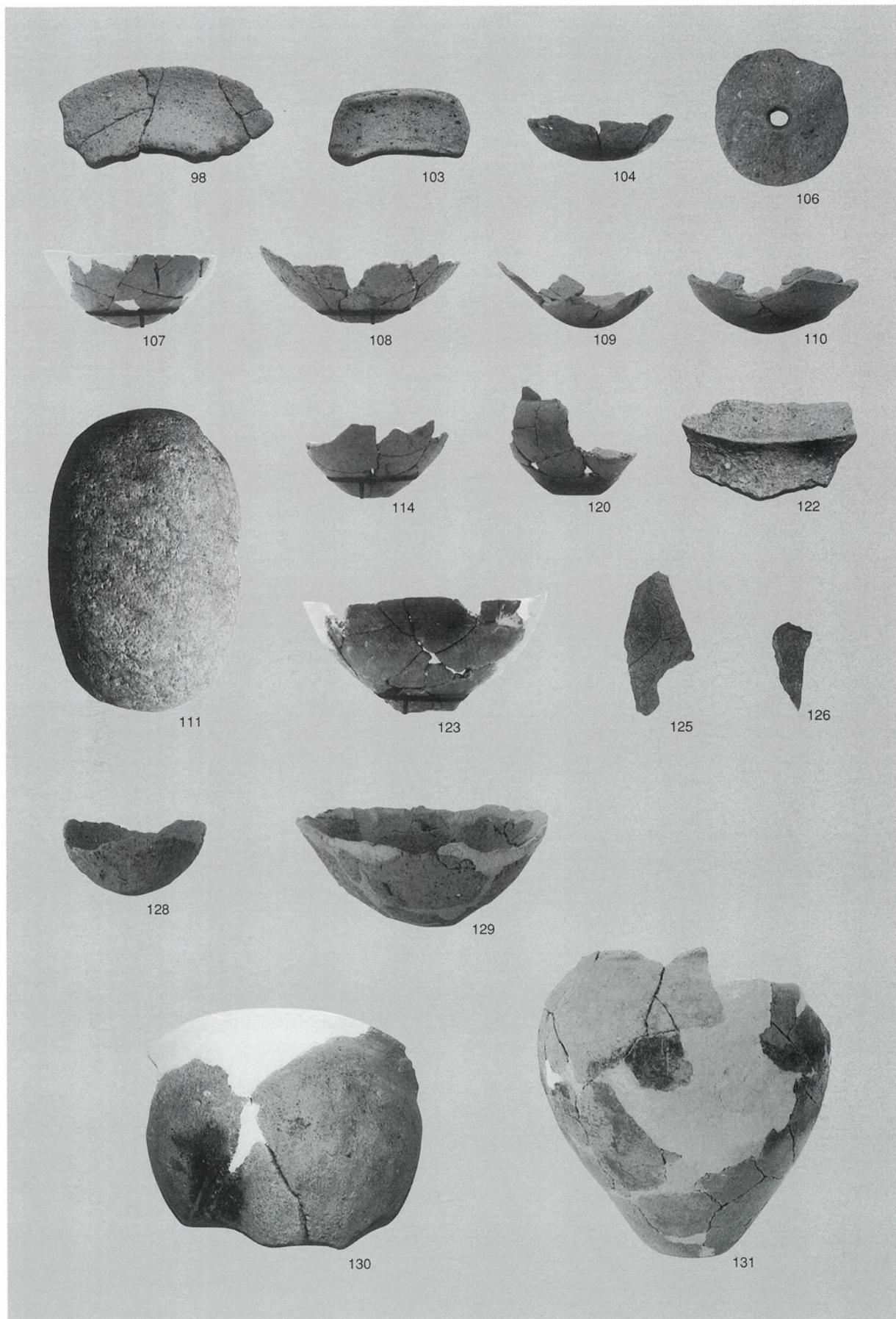
出土遺物(2)

図版18



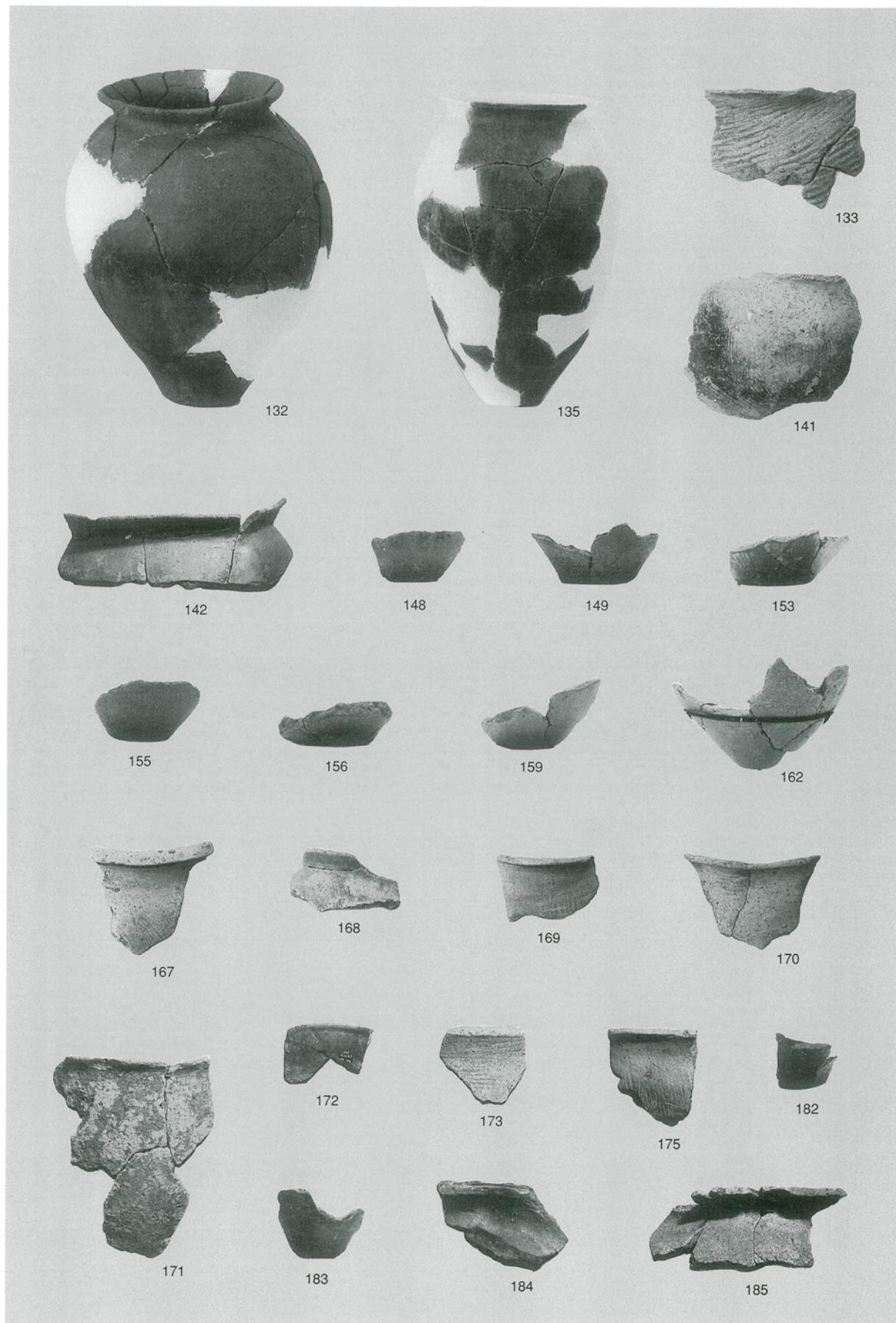
出土遺物(3)

図版19



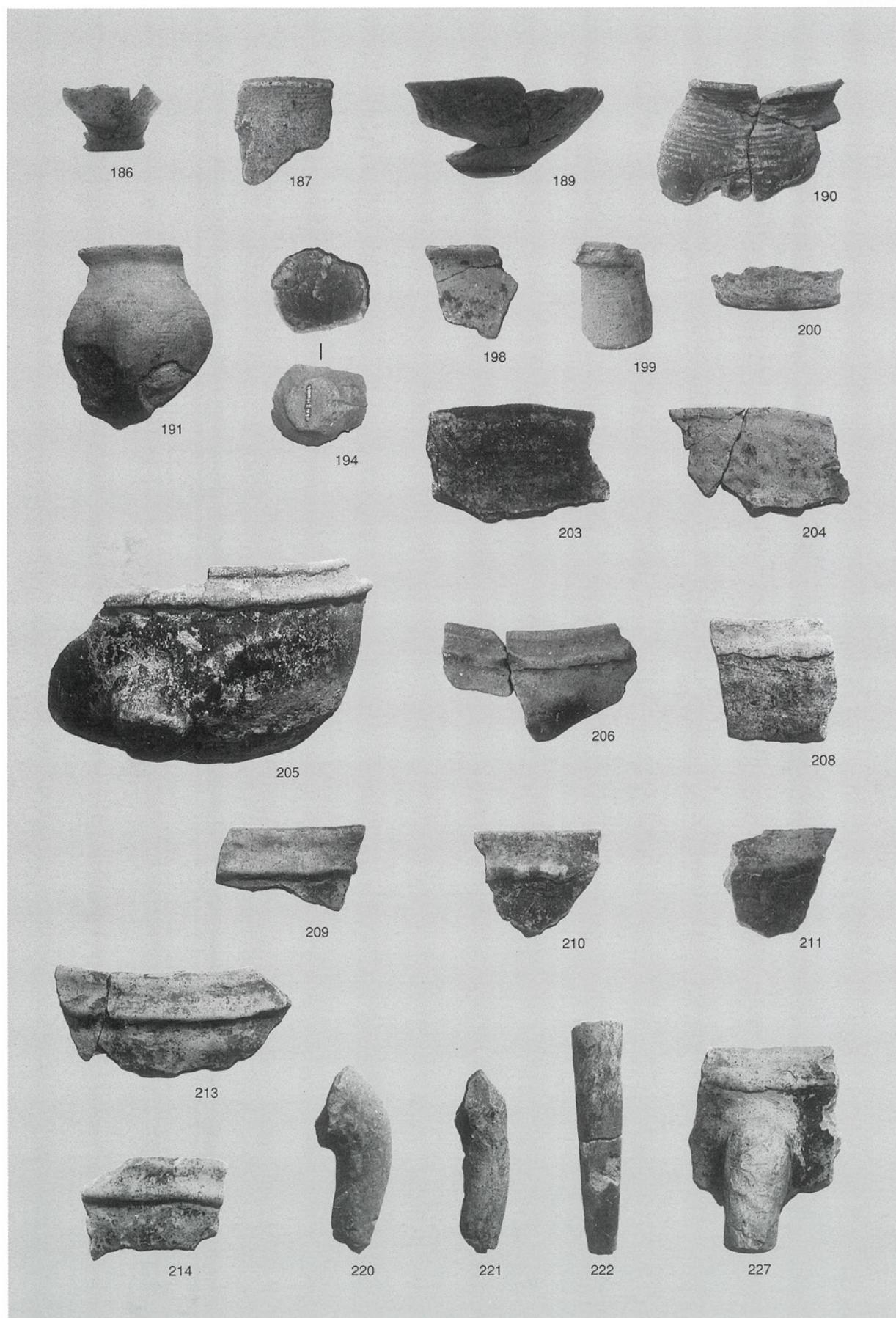
出土遺物(4)

図版20



出土遺物(5)

図版21



出土遺物(6)

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第22集

ウエノ遺跡

—池田警察署庁舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 平成10年3月31日

編 集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2
TEL (0886)72-4545

発 行 徳 島 県 教 育 委 員 会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印 刷 徳 島 県 教 育 印 刷 株 式 会 社